

ありふれて古めかしいこと。

ツの部

★衝立 ツイタテ

襖・障子などに衝をつけたもので、座敷に立てゝへだてとするもの。「醫專」

★通家好 ツウカのヨシミ

舊く祖父の代より親しく交際してゐる家の好みのこと。後漢書に「漢ノ孔融、十歳ノ時ニ、李膺ノ門ニ造リテ曰ク、我ハ是レ李君ノ通家ノ子弟ナリト。膺問ヒテ曰ク、高明ノ祖父ハ僕ト舊恩アルカト。融曰ク、先君孔子ハ君ノ先人李老君ト、徳ヲ同ジクシ、義ヲ比シテ相師友ナリ、融ト君トハ累世ノ通家ナリト。膺異トシテ之ヲ見ル」とある。

★通國 ツウコク

一國の人のこらずといふこと。擧國。孟子に「通國皆稱ニ不孝ニ焉」とある。

★通人 ツウジン

或事柄によく通じて居る人のこと。ものしり。

★痛惜 ツウセキ

甚だしく惜しむこと。痛は一般に甚だしく、又は非常にといふ意。「早商」

★痛罵 ツウバ

甚だしくのゝしること。

★通弊 ツウヘイ

一般を通じての弊害のこと。通患も同じ。「名商・米工・朝大」

★痛痒 ツウヤウ

いたさとかゆさ、利害關係のこと。痛痒を感じずと云へば利害關係のない意である。「専檢・東北大・高校・名工」

★東之間 ツカノマ

一寸の間のこと。暫時。「廣高師・海經」

★月代 ツキシロ

さかやきのこと。「千圓・同志」

★月並 ツキナミ

(1)毎月といふこと。(2)俗氣が多く新しい所のないことを嘲つていふ語。月並發句の略なり。「陸士」

★杜撰 ツサン

著書又は議論などに誤りの多いこと。野客叢書に曰く「杜撰詩ヲ作ルニ、多ク津ニ合ハズ。故ニ事格ニ合ハザルモノヲ杜撰トナス」とある。「高校・山商・富業・東美・金工・高檢・水産・盛農・専檢2・長商2・海欄・廣高師・秋鑛・米工2・海兵・東北大・京城醫・法大・千圓・福商・上野・日醫・岐農」

★頭陀袋 ツタブクロ

行脚の僧が頭にかけて物を入れるに用ひる袋のこと。又頭陀は僧なり。死人の頭にかける袋。

★津々浦々 ツヅウラウラ

國の端から端までの各地のこと。「長商」

★美人局 ツツモタセ

夫婦なれ合ひて他の男をたぶらかし、金を得ること。

★葛籠 ツツラ

衣類を入れるに用ひるつとらのこと。「外語2・高校・陸教」

★都度 ツド

たの度ごとに。「水産」

★矯角殺牛 ツノをためてウシをコロす

少し許りの缺點を直さうとして却つて大きな害をなすこと。

★爪木 ツマギ

たきつけにする折枝のこと。妻木。「専檢・千圓・外語」

★妻戸 ツマド

雨開きになつてゐる板戸のこと。「北大・千圓」

★徒然 ツレツレ

なすことも無くたいくつなさまにいふ語。「陸士」

★追従 ツキシヨウ

へつらふこと。阿媚。「外語・愛醫」

★追悼 ツキタウ

死者をいたみ悲しむこと。

★追儼 ツキナ

おにやらひのこと。節分の豆まき。「北大・高檢」

★追遠 ツキエン

祖先の徳を思ひ出して祭ること。論語の「慎終追遠」より出づ。「神宮」

テの部

★遞加 テイカ

順に従つて増し加へること。反対は遞減なり。遞次は順々にといふこと。

★提議 テイギ

議論を持ち出すこと。

★低回 テイクワイ

頭を垂れて行きつ戻りつして思ひなやむさま。低は俯なり、垂なり。回はめぐらす。〔名商・東商大〕

★定款 テイクワン

會社等の組織及びその業務を行ふ上の規定のこと。款はさだめ。

★庭訓 テイクン

家庭の教訓のこと。孔子の子、鯉が走つて庭を過ぎた時、孔子が之を呼び止めて、禮や詩の學ぶべきことを教へたといふ故事に出づ。〔早商・水産・北大〕

★提携 テイケイ

共同して事をやること。〔米工〕

★汀渚 テイシヨ

みぎは。〔神商大〕

★牴觸 テイシヨク

ふれること。さしははること。〔米工〕

★挺身 テイシン

身をぬき出すこと。

★提撕 テイセイ

後進の人ををしへ導くこと。又手にたづさへること。

★定省温清 テイセイワンセイ

子が父母に孝養を盡すこと。人の子たる者は晩には其の寢具を定め、朝には其の安否を省み、冬は温にし、夏は清しくして孝養を盡すべきであるといふこと。禮記に「凡爲人子之禮、冬温而夏清、昏定晨省」とある。温清定省ともいふ。〔陸士・千醫・海欄〕

★爲體 テイダラク

ありさまのこと。〔千藥〕

★鄭重 テイチヨウ

丁寧、れんごろのこと。〔海兵〕

★亭々 テイチテイ

テの部

★締結 テイケツ

とりむすぶこと。訂結。〔五高〕

★亭午 テイゴ

正午の時のこと。

★牴牾 テイゴ

くちががつて互に相容れないこと。牴は抵抗なり、牾は逆なり。牴觸。

★底止 テイシ

とどまること。底は至るなり。詩經に「靡所底止」とある。〔陸士・千醫〕

★諦視 テイシ

しつかりと見ること。諦觀。

★廷叱 テイシツ

朝廷で君子を叱りつけること。〔京法・外語・農大〕

★提唱 テイシヤウ

主義・意見等を人より先だつて説ききかすこと。

★貞淑 テイシユク

婦人の操正しく心の善良なること。淑は善なり。漢書に「能致其貞淑、不貳其操」とある。〔女高師〕

★偵諜 テイテフ

密かに敵の様子をきぐり伺ふのみ。斥候。〔商船〕

★帝展 テイテン

帝國美術展覽會のこと。〔成蹊高〕

★停頓 テイトン

物事がとどこほること。停滯。澹滯。〔名工〕

★泥濘 デイネイ

泥ふかいところ、ぬかるみのこと。

★剃髮 テイハツ

かみをそること。

★貞婦 テイフ

操の正しく堅固にして終始變らぬ婦のこと。貞は正なり、固なり。史記に「貞婦不見二夫」とある。〔東高師〕

★底本 テイホン

草稿又は土嚢となる本のこと。

★鼎立 テイリツ

かなへの足のやうに三方對立すること。〔神宮・農商〕

★朝意 テウイ

朝廷の御意向のこと。天子の御意志。〔横商〕

★朝觀 テウケン

諸侯などが主君に拜謁すること。參觀。〔長商〕

★手打 テウチ

(1)手づから人を斬り殺すこと。(2)手づから作ること。(手打齋參)。 (3)取引の約定が成立した時、手を打ち鳴らすこと。(4)喧嘩の和睦が成立した時、手を打ち鳴らすこと。〔廣高師〕

★超涯之恩澤 テウガイノオンダク

限りもなく厚いなきけのこと。〔海兵・長商〕

★朝三暮四 テウサンボシ

詐りて人を愚弄すること。列子に「宋ノ狙公、猿ヲ愛シテ、之ヲ養ヒ、群ヲ成ス。ソノ食ヲ限ラムトシテ、先ツ之ヲタブラカシテ、汝等ニ朝、三ツノ栗ヲ與ヘ、暮ニ四ツノ栗ヲ與ヘント。猿皆起ツテ怒リヌ。俄カニシテ然ラバ、汝等ニ朝ハ四ツヲ與ヘ、暮ニハ三ツヲ與ヘント。衆猿皆伏シテ喜ビヌ」とある故事による。又莊子の齊物論にも見ゆ。〔海樵・陸士・盛農2・東北〕

大)

★超自然力 テウシセンリヨク

自然の影響を蒙らないで、自然を離れてといふこと。〔廣高師〕

★髻 齧 テウシン

七八歳の子供のこと。髻は小兒の垂髮、齧は齒のぬけ換る頃、即ち七八歳の頃をいふ。〔專檢〕

★超世 テウセイ

一世に超越してゐること。〔神商大・山商・海軍〕

★調節 テウセツ

程よくととのへること。〔鹿農〕

★朝宗 テウソウ

(1)諸侯が天子に拜謁すること。(2)河水が海に流れ込むこと。書經の註に「春見ユルヲ朝トイヒ、夏見ユルヲ宗トイフ。朝宗ハ諸侯天子ニ見ユルノ名ナリ。中略。河水ノ勢已ニ奔リテ海ニ趣ケルコト、猶ホ諸侯ノ王ニ朝宗スルガ如キナリ」とある。〔千醫〕

★彫琢 テウタク

きざみみがくこと。〔專檢〕

★調停 テウテイ

仲をとりもちなかなほりをさせること。〔愛醫・鹿農〕

★喋々 テウテウ

多辯なることの形容。

★嫋嫋 デウテウ

(1)風吹きて木動く貌。楚辭に「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下」とある。(2)聲の細くして絶へざる貌。前赤壁賦に「餘音嫋嫋、不絶如縷」とある。

★調度 テウド

(1)手まはりの道具のこと。調度品。(2)物事を適度に調へること。調度課。〔專檢・水産・福商・神宮・山商・海樵・浦工〕

★掉尾 テウビ

(1)尾をふるふこと。(2)最後の活動の勢のよいこと。孔武仲詩に「悠然掉尾波間去、須信人生不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>魚」とある。

★調伏 テウブク

佛力によつて悪魔を降伏させること。

★朝野 テウヤ

テの部

朝廷と在野と、政府と民間と、又官吏と一般人のこと。天下。世間。〔早高〕

★凋落 テウラク

おちぶれること。零落。〔京城醫〕

★條理井然 デウリセイゼン

すぢみちの正しいこと。〔明專〕

★跳梁 テウリヤウ

勢逞しくあばれ躍ること。跳ははれ躍る、梁は陸梁、即ちあばれる。莊子に「東<sub>レ</sub>跳梁、不<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>高<sub>下</sub>」とある。

★朝令暮改 テウレイゴカイ

命令を改むることの極めてはげしいこと。即ち朝に出した命令を暮に改める義による。粟貴論に「急政暴虐、賦斂不<sub>レ</sub>時、朝令而暮改」とある。

★超越 テウエツ

すぐれること。〔專檢・山商・東醫〕

★摘要 テキエウ

肝要なる點をつまみかゝげること。要をつかむこと。〔米工〕

★敵愾心 テキガイシン

君主の恨み怒る所の者に敵對する心。敵に對しての怒り。左傳に「諸侯敵王所愾、而愾其功」に本づく。〔專檢・高校・山商・東北大・米工・早高・盛農・名工・福商〕

★的 確 テキカク

たしかなこと。確實。〔神商大〕

★剔 扶 テキケツ

ほじくり出すこと。爬羅剔扶の語あり。〔米工・京城工・秋嶺〕

★敵國破 謀臣亡

テキコクヤブレテボウシンホロぶ必要がなくなると邪魔にされるといふこと。史記に「狡兎死シテ走狗烹ラレ、高鳥盡キテ良弓藏メラレ、敵國破レテ謀臣亡ブ。天下已ニ定マル。我レ固ヨリ當ニ烹ラルマシ」とある。〔和商〕

★適者生存 テキシヤセイゾン

四圍の状況に適するものは生存して、然らざる者は自ら亡びること。〔陸士〕

★偶 黨 テキタウ

才氣の衆人に優れること。晉書に「偶黨不刑細行」とある。

とある。〔專檢・鹿農・外語・盛農〕

★觀 面 テキメン

まのあたり。すぐに。〔外語〕

★手 垂 テダレ

伎倆のすぐれ秀でたること。〔醫專・陸士〕

★哲 學 テツガク

天地宇宙間の原理を研究する學問のこと。〔水農〕

★徹 底 テツテイ

そこまで達すること。〔鹿農・陸士・眞大・小商〕

★徹頭徹尾 テツトウテツビ

始から終りまで、どこまでもといふこと。〔東美〕

★撤 廢 テツバイ

やめて取り去ること。撤回は一度さし出したものを取り下げること。〔名工〕

★轍鮒之急 テツブノキフ

窮困して死に瀕すること。鮒の水を離れて車跡の中に居るによる。莊子に「莊子家貧、故往貸粟於監河侯。監河侯曰、諾、我將得三邑金、將貸予三百金、可乎、莊周忿然作色曰、周昨來、有三中道而呼者、死者の名を録する過去帳のこと。一楊炯ト云フ者、文ヲ作ルニ好ンデ古人ノ姓名ヲ連ネ、之ヲ點鬼簿ト號シタ」といふ故事より出づ。

周顧視、車轍中有鮒魚焉、周問之曰、鮒魚來、子何爲者耶、對曰、我東海之波臣也、君今有斗升之水、而活我哉、周曰、諾、我且南遊吳越之王、激西江之水、而迎子、可乎、鮒魚忿然作色曰、吾失我常與、我無所處、吾得斗升之水、然活耳、君乃肯此、曾不如此早索、我於枯魚之肆」とある。

★天空海澗 テンクウカイワツ  
天の蒼々として限りなく、又海のひろくしたるが如く、心の廣大なること。又反對に海澗天空ともいふことがある。〔海嶺〕

★不知手之舞之足之蹈之  
テノコレをマヒ、アシノコレをフむをシラズ  
非常によろこぶさま。嬉しくてたまらず、覺えず自ら舞踏するに至るの義なり。孟子、禮記にこの語出づ。

★典 型 テンケイ  
てほんのこと。典則として模範とすべきものをいふ。〔金工・産商〕

★天 祐 テンイウ

天の助けのこと。易に「自天祐之」とある。天佑と同じ。

★點 檢 テンケン

一つ一つあらため調べること。〔西南〕

★天 祐 テンイウ

天の助けのこと。易に「自天祐之」とある。天佑と同じ。

★轉 嫁 テンカ

己の過失を人にぬりつけること。責任轉嫁。〔名工〕

★恬 嬉 テンキ

安心して喜ぶこと。〔四高・東商大〕

★點 鬼簿 テンキボ

死者の名を録する過去帳のこと。一楊炯ト云フ者、文ヲ作ルニ好ンデ古人ノ姓名ヲ連ネ、之ヲ點鬼簿ト號シタ」といふ故事より出づ。

★添 削 テンサク

詩文などの文字を書き添へたり、削つたりしてなほす

こと。「海欄」  
★回<sup>ス</sup>天日於既<sup>ラ</sup>墜<sup>ム</sup> テンジツをキツキにカヘす  
天子など尊い方の勢力の衰へたのを又元の盛んな地位  
にかへすこと。既に西に墜ちた太陽を元に返す義によ  
る。「専檢」

★天壤無窮 テンジャウムキユウ  
天地と共にきはまりがないといふこと。天壤は天地な  
り。國境の長久なることなどにいふ。「名醫」

★殿上人 テンジャウビト  
殿上に昇ることを許されたもの。地下の對。「高校・專  
檢・臺北醫」

★天 錫 テンシヤク  
天よりたまはること。錫は賜なり。天授。書經に「天  
乃錫<sup>フ</sup>三王者<sup>ニ</sup>」とある。「高校・米工」

★點 心 テンシン  
あひだ食のこと。少しの食を心胸の間に點すといふ義  
による。輟耕錄に「今、以<sup>テ</sup>早飯前後<sup>ニ</sup>小食<sup>一</sup>爲<sup>ス</sup>點心<sup>ト</sup>」  
とある。

★天真爛漫 テンシンランマン

飾り氣がなく、ありのままが言動にあらはれること。  
〔海欄・名工〕

★典 籍 テンセキ  
書籍のこと。典はふみなり。「女高師・廣高師・海軍」

★傳 説 テンセツ  
いひつたへのこと。「早高」

★恬 然 テンセン  
平氣なさま。恬はやすらか。恬然として恥ぢずなどい  
ふ。「大商・小商」

★覲 然 テンセン  
面目ありて人を見る貌。國語に「餘雖<sup>レ</sup>覲<sup>トシテ</sup>然<sup>ナリ</sup>而人面<sup>ナリ</sup>」  
吾猶<sup>ニ</sup>禽獸<sup>一</sup>とある。「陸士」

★椽大之筆 テンダイノフデ  
大文章を作るの才あること。椽はたるきなり。たるき  
の大ききほどの筆といふ義による。晋書に「詢、夢人  
以<sup>テ</sup>大筆如<sup>ク</sup>椽<sup>ノ</sup>與<sup>レ</sup>之、語<sup>レ</sup>人曰、此當<sup>レ</sup>有<sup>ス</sup>大手筆事<sup>一</sup>、  
果<sup>シテ</sup>武帝崩<sup>ル</sup>哀<sup>ヲ</sup>世<sup>ヲ</sup>諡<sup>ス</sup>、皆<sup>テ</sup>詢<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>草<sup>ス</sup>」とある。「盛農」

★天道無<sup>レ</sup>親常與<sup>ニ</sup>善人<sup>一</sup> テンダウシンナシツネニセ  
天は人に區別を立て、親しむといふことなく、ただ善

行ある人に親しみ與するものであるといふこと。「神  
宮・專檢」

★恬 澹 テンタン  
あつさりとして思ふこともなく爲すこともなく無欲な  
さま。恬はやすし、澹はしづか。恬淡、恬澹も同じ。  
〔盛農〕

★點 綴 テンテイ  
ほどよくとりあはせること。「東音・桐染」

★天 朝 テンテウ  
朝廷の敬稱。天聽に達すは天子の御耳にはいること。  
〔大外語〕

★點 滴 テンテキ  
あまだれのこと。

★輾轉反側 テンテンハンソク  
幾度となく寝がへりをうつこと。心配などで眠られな  
いさまをいふ。輾は半轉、轉は周轉、反は輾の過ぐる  
をいひ、側は留まる義なり。

★奠 都 テント  
都を定めること。

★纏 頭 テントウ  
當座の祝儀のこと。はな。「海欄・明專」

★傳 統 テントウ  
古から傳つてゐること。「神商・和商・米工・同志」

★傳 播 テンパ  
だん／＼と廣くつたはりひろがること。「東北大」

★顛 沛 テンバイ  
つまづきたふれること。造次顛沛はつまづきの場合とい  
ふこと。「東商大」

★典 範 テンハン  
のつとるべき手本のこと。「廣高師」

★天 稟 テンシン  
うまれつきのこと。天性。天賦。「専檢・外語」

★天 飈 テンペウ  
上から吹き下して來る風のこと。藤井竹外の詩即ち吉  
野三絶と稱せられて有名なるものに「古陵松柏吼<sup>ユ</sup>天  
飈<sup>ニ</sup>、山寺尋<sup>レ</sup>春<sup>ヲ</sup>寂<sup>ヲ</sup>寥<sup>ヲ</sup>、眉<sup>ノ</sup>雪<sup>ヲ</sup>老<sup>ノ</sup>僧<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>輾<sup>レ</sup>帶<sup>ヲ</sup>、落花深  
處<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>南<sup>ノ</sup>朝<sup>一</sup>」とある。

★展 墓 テンボ

墓詣りすること。墓參。禮記に「展<sup>シテ</sup>墓而入<sup>ル</sup>」とある。  
〔小商〕

★天網恢々疎而不漏<sup>テ</sup>。天網はあてにならぬやうだけれど、善には必ず善報あり、悪には必ず悪報ありて一も逃さざることをいふ。天網は天が悪人を捕へる爲に張るあみ、即ち法律・自然の制裁等なり。即ち天の網はその目が粗く善悪の報が漏れる如くであるが、決して一も漏すやうなことはないといふ義による。〔陸士2〕

★天網不<sup>レ</sup>漏<sup>ル</sup>。天は悪人に對する制裁を漏らすやうなことはないといふこと。換言すれば悪人は天の制裁を免かれ得ないといふこと。〔水産〕

★顛末<sup>ト</sup>。事柄の始から終まで。一部始終。〔外語・水産〕

★天命<sup>ヲ</sup>。天から受けた命令のこと。めぐりあはせ。運命。〔外語・鹿農・商船・米工・京城醫〕

★殄滅<sup>ス</sup>。天から受けた命令のこと。めぐりあはせ。運命。〔外語・鹿農・商船・米工・京城醫〕

★登遐<sup>ト</sup>。天子の崩御のこと。遐は遠なり、遠きに昇る義による。列子に「天子登遐、百姓號<sup>レ</sup>之二百餘年不<sup>レ</sup>輟<sup>ル</sup>」とある。〔海欄・米工〕

★蹈<sup>シテ</sup>東海<sup>ニ</sup>而死<sup>ス</sup>。世事を憤慨して死すること。これ魯仲連の故事にして仲連は齊の人なり、故に東海といひしなり。戰國策史記列傳に出づ。

★見<sup>ハス</sup>頭角<sup>ヲ</sup>。衆人に傑出すること。衆人に傑出すること。恐喝。〔高校〕

★伺喝<sup>ヲ</sup>。なほざり、意に留めざること。等閑に附すはなほざりにすること。張謂の詩に「眼前一樽又長<sup>ヘ</sup>滿、心中萬事如<sup>シ</sup>等閑<sup>ト</sup>」とある。〔千醫・海兵2・盛農・長商・山商・慈醫〕

★動機<sup>ト</sup>。トウキ

ほろぼしつくすこと。絶滅。〔水産・陸士〕

★諂諛<sup>ヲ</sup>。阿諛。〔陸士・水産・外語〕

★天倫樂事<sup>ヲ</sup>。兄弟間の樂しみのこと。天倫は兄弟、兄は先、弟は後なること。天の倫<sup>ハ</sup>大なり、故にいふ。李白の文に「會<sup>ニ</sup>桃李之芳園<sup>ニ</sup>、敘<sup>ス</sup>天倫之樂事<sup>ヲ</sup>」とある。〔廣高師・陸士〕

★同惡相助<sup>ル</sup>。悪人も其の希望を達するには互に助け合ふこと。史記に「同惡相助、同好相留、同情相成、同欲相趨、同利相死」とある。

★儉安<sup>ト</sup>。一時の安きをむさぼること。史記に「儉<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>」とある。〔陸士2・東北大・盛農・外語2・女高師・三農〕

★騰貴<sup>ト</sup>。物價があがること。〔專檢・長商〕

★同氣相求<sup>ル</sup>。主義を同じくする者は、自然に合するといふこと。天子の御即位のこと。即位と踐祚とは嚴密には區別あり。踐祚を見よ。

★東宮<sup>ト</sup>。皇太子の御殿のこと。左傳に「四時<sup>ハ</sup>東<sup>ヲ</sup>春<sup>ト</sup>トス。萬物生長<sup>スル</sup>ハ東<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>。西<sup>ヲ</sup>秋<sup>ト</sup>トナス。萬物成就<sup>スル</sup>ハ西<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>。此<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>、君西宮<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>、皇太子常<sup>ニ</sup>東宮<sup>ニ</sup>居<sup>ル</sup>ナリ」とあり。又、東方は易卦に於て震とす、震は長男にして東に屬す。故に皇太子宮を東に立つ、之を東宮といふ。又、春宮ともいふ。〔專檢〕

★燈火可<sup>レ</sup>親<sup>シ</sup>。トウクワシタシむべし

秋の時節となれば心身爽快となり、燈火に親みて書を讀むに宜しいといふこと。

★形 管 トウクワン  
女の用ひる赤軸の筆のこと。轉じて女子の文章をいふ。

★憧憬 ドウケイ  
あこがれること。「海兵・専檢・神商大」

★同工異曲 ドウコウイキヨク  
音楽・詩文などのたくみになる點は同じで、其の曲や趣を異にすること。「高松商」

★働 哭 ドウコク  
泣き悲しむこと。「海機」

★東西南北之人 トウザイナンボクノヒト  
住居の一定せざること。

★洞 察 ドウサツ  
みぬくこと。

★同而不和 ドウじてワセズ  
表面は同意を表するも、内心は然らざること。

★統 帥 トウスキ

すべひきゐること。統率。統帥權とは天皇が大元帥として親しく陸海軍を統率し給ふ大權にして、それは政府の職掌の外に置かれてゐるものである。軍の行動は完全な自由と策戰の秘密とを必要とするもので、局外者たる政府がこれを掣肘することは、戰闘力を弱むる恐れあるものであるから、軍の統帥については、これを政府の職責の外に置き、専ら軍部當局者の自由活動に一任するのである。統帥權干犯とは、この軍の統率の大權を政府が犯すことである。ロンドン條約に於てこの問題が惹起した。

★東 漸 トウセン  
だん／＼に東の方へすすむこと。「女高師」

★冬扇夏爐 トウセンカロ  
無用無益のこと。即ち冬の扇と夏の火鉢とは時機適せぬ無用無益のものである。

★凍 餒 トウタイ  
こごえうゑること。凍餓。饑寒。孟子に「凍餒妻子」とある。「陸士・上黨」

★東道主人 トウダウのシユジン

主人となりて來客の用をなす者のこと。東道主も同じ。左傳に「若令<sup>ユルシテ</sup>鄭以爲<sup>ト</sup>東道主<sup>ト</sup>、行李之往來<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>困<sup>ニ</sup>君亦無<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>書<sup>ス</sup>」とあるに本づく。「大分商・小商」

★統 治 トウチ  
すべをさめること。統治權は國を治むる最高の權力のこと。「長商」

★杜宇杜鵑 トウトケン  
ほととぎすのこと。蜀魂。寰宇記に「蜀ノ後主名ハ杜宇、望帝ト號ス。位ヲ離<sup>レ</sup>望帝自ラ逃ル。後、位ニ復セント欲スレドモ得ズシテ死ス。化シテ鵑トナリ晝夜悲鳴ス。蜀人之ヲ聞イテ曰ク、我が望帝ノ魂ナリト」とある。これによりほととぎすを杜宇とも、杜鵑とも、蜀魂ともいふ。「陸士」

★同 胞 ドウハウ  
母を同じくせる兄弟といふこと。胞は胞胎なり。「山商」

★同病相憐 ドウビヤウアヒアハレヒ  
境遇を同じくする者は、互に憐み助くるものだといふ

こと。

★登 庸 トウヨウ  
人材を擧げ用ひること。

★逗 留 トウリウ  
泊ること。旅に永くゐること。滞在。「陸士」

★棟 梁 トウリヤウ  
重任に耐ふるものゝこと。棟は家屋の脊柱たるムナギ、梁はむなぎを負ふハリなり。かしら。首領。柱石。又特に大工のかしらのこと。棟梁の器などいふ。「長商」

★登龍門 トウリロウモン  
人の榮達すること。龍門は黄河の上流に在り。此處に急流ありて、之を龍門の淵と稱す。鯉魚が之を登れば化して龍になるといふ。故に前出の意となる。

★同 僚 ドウレウ  
同じ役所に勤めてゐるなかまのこと。僚は同官なり。又僚は寮に通ず。詩經に「我雖<sup>レ</sup>異<sup>ニ</sup>事<sup>ト</sup>、爾同<sup>レ</sup>僚<sup>ト</sup>」とある。「廣高師」

★呵 凍 トウをカス  
寒氣烈しくて筆や硯が凍つたのを息を吹きかけてとか

★以<sup>ナ</sup>銅<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>鑑<sup>ト</sup>可<sup>シ</sup>正<sup>ス</sup>衣冠<sup>ヲ</sup>

しながら文を草すること。  
ドウをモツてカガミとナサバイカンをタダサハシ  
銅を鑄て鏡を造れば衣服や冠の亂れたのを正すことが  
出来るといふこと。通鑑に「唐太宗曰、以銅爲鑑、  
可正衣冠、以古爲鑑、可知興廢、以人爲鑑、  
可知得失」とある。

★鯨波之聲 トキノコエ

多人散のものが一度にとつと揚げる聲のこと。聞聲。  
〔陸士〕

★常磐木 トキハギ

四時落下しなくて常に青葉を保つ木のこと。常緑樹と  
もいふ。松杉の類。〔米工〕

★時めく トキめく

時綱にあつて榮へること。〔高校・廣高師・北大〕

★獨眼龍 ドクガンリヨウ

片目の英雄といふこと。獨眼は一眼なり、龍は傑出し  
たる人物の義なり。唐書に「黃巢反ス、李克用之ヲ破  
ル。時ノ人其ノ一目眇ニシテ勇アルヲ以テ、號シテ獨

眼龍トナス」とある。

★徳器 トクキ

徳と才能のこと。行の成るを徳といひ、才の成るを器  
といふ。徳義は道德上の義理。

★度外視 ドグワイシ

問題にせぬこと。無関係のものとして取り扱ふこと。

★得策 トクサク

利益のある考といふこと。〔鹿農〕

★得失相償 トクシツアヒツグナフ

損と得とが差引同じ位のこと。

★讀書三到 ドクシヨサンタウ

書を読むには眼と口と心の三つが到らなければならぬ  
といふこと。

★讀書百遍義自通 ドクシヨヒヤクバンギオノヅカラ

意義の通ぜざる所も數百遍も反覆して讀むときは、其  
の文義自然に明かになりて解釋を得るまかふ。

★督責 トクセキ

せめなじること。催促。督促。

★獨斷專行 ドクダンセンカウ

相談せずに獨りで定めて勝手に事を行ふこと。

★得度 トクド

佛門に入つて僧侶になる許可のこと。その式を得度式  
といふ。

★徳不<sup>レ</sup>孤<sup>ニ</sup>必有<sup>レ</sup>鄰 トクはコならずカナラザリンア

徳ある者は孤立せず必ず類がありて之に應ずることは  
居に隣あるが如くだといふこと。〔名工〕

★積鼻輝 トクビコン

今の「サルマタ」のこと。

★秃筆 トクヒツ

さきのすり切れた筆のこと。又自分の文章を謙遜して  
いふ。秃筆を阿すなどいふ。

★督勵 トクレイ

とりしまり勵ますこと。〔大谷〕

★髑髏 ドクロ

死人の頭蓋骨のこと。

★常闇 トコヤミ

何時までも闇であること。又世の亂れて久しく治らな  
いことにもいふ。〔米工〕

★斗筭之人 トサウノヒト

器量の小さな人のこと。斗は一斗、筭は一斗二升を容  
るゝ器なり。論語に「子曰、噫、斗筭之人、何足<sup>レ</sup>算  
也」とある。〔陸士・盛農・小南〕

★外様 トザマ

徳川時代に徳川の一門又は譜代にあらざる大名を稱し  
た言葉。〔東北大〕

★刀自 トジ

(1)主婦のこと。(2)他に事へて家事を掌る婦人のこと。  
(3)年たけた婦人の尊稱。

★徒爾 トジ

むだなこと。〔朝大〕

★歲寒 然後知<sup>ニ</sup>松柏之後凋也

トシサムくしてシカるノチにシヨウハクノシボミにオ  
クルゝをシる

世亂れて忠臣の操の堅固なるを知るといふ喩。論語子  
罕に出づ。〔熊鷹〕

★吐瀉 トシヤ

口より吐き出すこと。



★圖書 トシヨ

書籍のこと。河圖洛書の略語なり。易に「河出圖、洛出書、聖人則之」とある。又韓愈の文に「坐一室、左圖書」とある。

★屠所之羊 トシヨノヒツジ

屠殺に連れて行かれる羊のこと。死に近く喩。

★不可同年而語

トシをオナジラしてカタるべからズ。差の甚だしいこと。不レ可同年而語も同じ。〔長商〕

★杜絶 トセツ

ふさがり絶へること。〔長商・米工〕

★屠蘇 トソ

薬の名なり。正月元旦に酒に入れて之を飲めば病を除くといふ。

★怒濤 ドタウ

大きな波のこと。

★徒黨 トダウ

事を共にしようとして團結したなかまのこと。〔廣高師〕

★塗端 トタン

はずみのこと。

★塗炭之苦 トタンノクルシミ

非常なる苦しみといふこと。塗は泥塗を踏み、炭は炭火に墜ちて救ふ者なきが如く、人民が苦しむをいふ。

書經に「有夏昏德、民墜塗炭」とある。〔一高・上雲・新醫・海機・外語・水産・女高師・高校〕

★土著 ドチヤク

其の土地に常住する者のこと。漢書に「其俗或土著、或移徙」とある。

★吶喊 トツカン

多人數、一時に大聲にて叫ぶこと。ときのことゑをあげること。福惠全書に「齊集吶喊」とある。

★咄嗟 トツサ

瞬間のこと。呼吸の間。世説に「石崇作豆粥、咄嗟而辨」とある。

★咄々怪事 トツトツクワイジ

驚くべき奇怪のこと。

★訥辯 トツメン

★吐哺握髮 トホアクハツ

賢者を求めるに切にして、少しも客を待たせざること。即ち食事に當り、客の來るれば、口中の食を吐いてでも之を迎へ、又髮を洗へるときに當れば、髮を握りて出て迎へる義による。史記に「一沐三握髮、一飯三吐哺起以待士」とある。〔臨教〕

★塗抹 トマツ

ぬりけすこと。抹殺。〔字農・小商〕

★土饅頭 ドマンヂウ

墓のこと。范成大の詩に「縱有千年鐵門限、終須一箇土饅頭」とある。

★富潤屋徳潤身

徳はタクをウルホシトクはミをウ。財産は家屋を立派にし、徳（正しい行）は人の身體に潤を與へて氣高くするといふこと。大學に「富潤屋、徳潤身、心廣體胖、故君子必誠其意」とある。〔海兵・專檢〕

★豊明節會 トヨノアカリのセチエ

新嘗祭の翌日神に供へた新穀を主上も召上り群臣に賜ふ宴のこと。

拙くてにぶい辯舌のこと。〔外語〕

★斗南一人 トナンイチニン

天下第一の賢人のこと。北斗星より南に唯一人ありとの意なり。唐書に「狄公ノ賢、北斗以南一人ノミ」とある。

★圖南之鵬翼 トナンノホウヨク

大事業をなさうとする企のこと。莊子に「鳥アリ、其ノ名ヲ鵬トナス。背ハ泰山ノ若ク、翼ハ垂天ノ雲ノ若シ。扶搖ニ搏チテ、羊角シテ上ル者九萬里、雲氣ヲ絶チ、青天ヲ負ヒ、然シテ後ニ、南ヲ圖ル。且ニ南冥ニ適カントスルナリ」とある。

★驚馬 ドバ

才なくにぶくて役に立たぬ馬のこと。驚鈍は愚鈍に同じ。〔神商・早高・陸士〕

★怒髮衝冠 ドハツクワンムリをツク

甚だしく怒れるさま。怒れる時髮悉く逆立て冠をさすをいふ。史記に「却立倚柱、怒髮上衝冠」とある。

★都鄙 トビ

都會と田舎のこと。周禮に「治都鄙」とある。

★畫虎類狗 トヲをエガきてクにルキテ  
學んでなり損ふ喻。似て非なるものとなる喻。〔神宮・山商〕

★取沙汰 トリサタ  
世間のうはさのこと。〔廣高師・岐農〕

★舍人 トリネ  
天皇及び皇族に近侍警衛する士のこと。又宮内省主殿

★鳥囚 ハレト 不忘飛 フツ 馬繫 ハハ 常念馳 ニツ  
トリはトラハれてトぶをワスれズ、ウマはツナがれてツネにハシルをオモフ

★度量 ドリヤウ  
ものさしとます。又人の心のこと。度量が大きいなどいふ。〔海經〕

★屠龍技 トリロウのギ  
無用のわざ、又無駄のこと。莊子に「朱泚浸、龍ヲ屠

ルコトヲ支離益ニ學ブ。千金ノ家ヲ彈シ、三年ニシテ枝成リテ、其ノ巧ヲ用フル所ナシ」とある。〔大分商〕

★吐露 トロ  
かくさずして所思を述べること。韓愈の文に「愈敢不吐露情實」とある。

★兔園冊 トエンサツ  
俗語で書きたる卑近なる書物のこと。自著の書を卑下するにも用ふ。

★團栗の背くらへ ドンダリのセイくらへ  
優劣のなれこと。〔陸士〕

★豚兒 トンジ  
己の子の謙稱。愚息。

★吞舟之魚 ドンシウノウワ  
大悪人、大奸雄のこと。轉じて非常な人物、傑物の意にも用ひる。共に舟を呑む程の魚の義よりなる。〔東商〕

★吞舟之魚失水制 ヘバチセラレ 於螻蟻 ニ  
ドンシウノウワヲミヅをウシナへばロウギにセイせらる賢者も地位を失へば小人の爲に辱かしめられるといふ

★頓首 トンシユ  
拜して頭を下して直に擧ぐる事。即ち對等の人に對する禮なり。

★遯世 トンセイ  
世を逃れる事。即ち俗縁を絶つて佛門に入ること。又隱居することに用ふ。遯は遁の正字なり。遯辭は逃げ言葉なり。〔陸士・愛醫・早高〕

★貪婪 ドンラン・タンラン  
むさぼること。極めて慾の深いこと。食は金錢をむさぼること。婪は食物をむさぼること。〔鹿農・陸士〕

ナ

★内憂外患 ナイイウグワイクワン  
國內に生ずる憂と外國より攻め来る患のこと。左傳に「唯聖人能内外無患、自非聖人、外事必有内憂」とある。

★内証 ナイコウ  
ト・ナ

内わもめのこと。内亂。詩經に「豳賦内証」とある。豳賦は穀を食ふ蟲にして小人のことなり。〔水産・山商〕

★内侍所 ナイシドコロ  
八咫の御鏡の奉安してある所。維新後は賢所と申す。〔千壽・高檢〕

★内親王 ナイシンワウ  
皇子以下皇玄孫に至るまでの姫君の稱。

★内帑 ナイド  
宮中の財貨の庫のこと。帑は金庫なり。御内帑金は天皇の御手元金のこと。〔盛農〕

★内府 ナイフ  
内大臣のこと。〔商船〕

★曩年 ナウネン  
先年といふこと。曩日、曩昔などいふ。〔陸士〕

★曩祖 ナウソ  
先祖のこと。〔女高師〕

★囊中之錐 ナウチヌウノキリ  
才能ある者は直ちに外にあらはれるといふこと。史記

に「平原君曰ク、夫賢士ノ世ニ處スルヤ、譬ヘメ錐ノ囊中ニ處ルガ如シ。其ノ末立ロニ見ハル」とある。

★如レ探ニ囊中物<sup>ナウチニウ</sup>のモノをサグるゴトシ  
ことの甚だ容易なる喩。〔外語〕

★長脇差 ナガワキザシ  
昔、關東で長い脇差をさした博徒の異稱。〔鹿農〕

★長押 ナゲシ  
鴨居の上や敷居の下に別に長く横に渡す材のこと。普通  
通にナゲシといふ。〔高校〕

★捺印 ナツイン  
列を押すこと。署名捺印などいふ。〔長商〕

★納得 ナツトク  
のみこむこと。承知すること。得心。〔専檢〕

★直衣 ナホシ  
古の公卿の通常服のこと。〔廣高師・京法・農大・専檢〕

★奈落之底 ナラクノソコ  
地獄の底のこと。又物事の最後のこと。

★習與<sup>ニ</sup>性成<sup>ル</sup> ナラヒセイとナラ  
習はしが度々重れば、天賦の性質の如くなるといふこ

と。書經に「茲<sup>コ</sup>乃<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>義<sup>ト</sup>習<sup>ト</sup>與<sup>ト</sup>性<sup>ト</sup>成<sup>ル</sup>」とある。〔廣高師〕

★生業 ナリハヒ  
渡世の仕事のこと。

★南柯之夢 ナンカノユメ  
夢のこと。南柯は南枝なり。異聞集に「淳于棼、夢ニ  
大槐安國ニ入りテ王ニ見ユ。王曰ク、吾ガ南柯郡、卿  
ヲ屈シテ守ト爲サムト。凡ソ二十年ニシテ、使者送ツ  
テ穴ニ出ヅ。遂ニ覺ム。古槐ノ下ヲ尋ヌルニ蟻穴アリ、  
乃チ槐安國。又一穴アリ、直ニ南枝ニ上ル。即チ南柯  
郡ナリ」とある。

★難關 ナンクワン  
切り抜けるに大ケ敷いところ又は場合のこと。通過す  
るに困難な關所又は門の義による。難局も同じ。〔山  
商〕

★南山之壽 ナンザンノジュ  
人の長壽を祝する語。南山は終南山、周の都たりし鎭  
京の南にあり。詩經に「如<sup>シ</sup>南山之壽<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>老<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>崩<sup>ル</sup>」と  
ある。

ニ の 部

★乳臭 ニウシウ  
人の年若く經驗の乏しい者のこと。ちよくさい義によ  
る。青ニ才。黄口兒。漢書に「是口<sup>ホ</sup>乳臭<sup>ハ</sup>、安<sup>ラ</sup>當<sup>ラ</sup>ニ  
吾韓信<sup>ニ</sup>」とある。〔専檢・北大〕

★柔和 ニウワ  
やさしいこと。溫和。溫順。〔東北大〕

★肉薄 ニクハク  
飛道具を用ひず敵に間近くせまること。薄は迫なり。

★買肉食<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup> ニクをカふてコレをシヨクナ  
〔山商・鹿農〕  
敬の信なること。韓詩外傳に曰ク「孟子少ナル時、東  
隣ニ猪ヲ殺スノ聲ヲ聞キ、母ニ問フ、何ヲナスカト。  
曰ク、汝ニ啖ハシメント欲ス。既ニシテ母悔イテ曰ク、  
吾レ常ニ敬ユルニ、制止シカラザレバ食ハズ、席正シ  
カラチレバ座セザルヲ以テス。今適知ツテ而シテ之ヲ  
欺クナリ。是レ敬信ナラザルナリト。隣ノ猪肉ヲ買ツ  
テ以テ之ヲ食ハシム」とある。

★南船北馬 ナンセンホクバ  
忙しくかけまはること。又絶へず旅行をすること。支  
那の南方を旅行するには船を便とし、北方は馬を便と  
す故による。

★南殿之櫻 ナンデンノサクヲ  
紫宸殿の櫻のこと。〔龍大〕

★南風不競 ナンブウキヨはズ  
南方の國勢が衰へて振はぬこと。元義は南風は南方の  
詩なり。南方の詩とは楚の國の詩なり。國勢が衰へて  
ゐる爲めに、其の詩を歌ふに其の音微弱にして振はざ  
る義による。左傳に「晉人聞<sup>ク</sup>有<sup>リ</sup>楚師<sup>ト</sup>師曠<sup>曰</sup>、不<sup>レ</sup>  
賽<sup>、</sup>吾屢<sup>々</sup>歌<sup>ニ</sup>北風<sup>ト</sup>、又歌<sup>ニ</sup>南風<sup>ト</sup>、南風不<sup>レ</sup>競<sup>、</sup>多<sup>シ</sup>死  
聲<sup>、</sup>楚必<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>功<sup>ト</sup>」とある。又日本外史楠公論に「南  
風不<sup>レ</sup>競<sup>、</sup>俱傷<sup>ニ</sup>共亡<sup>ト</sup>」とある。南風は吉野朝のこと。  
〔臨教〕

★南面 ナンメン  
君主となつて國を治めること。南は陽なり。南面は人  
君治を聽くの位なり。〔専檢・國大・金醫・海兵〕

★肉 袒 ニクタン

肌を脱いで謝罪の意を表はすこと。即ち上衣をぬぎ打たれる覺悟を示すこと。戰國策に「肉袒而進、退而請死罪」とある。「專檢・廣高師・水産・農大・米工・陸士」

★逃 水 ニゲミツ

水が土地の中に入つて消えてわからなくなる。又晩春より初夏の候に若草にたつ陽炎の水流に似たるものこと。

★衣 錦夜行 ニシキをきてヨルユク

成功しても郷人に知られないこと。漢書に「富貴不レ歸故郷一如衣錦夜行」とある。

★一 豎 ニシユ

病のこと。疾は軽く、病は重し。左傳に曰く「晉侯疾病ス。醫ヲ秦ニ求ム。秦伯醫綏ヲシテ之ヲ爲サシメ未ダ到ラズ。侯夢ム、病化シテ二豎トナリテ曰ク、彼ハ良醫ナリ、懼ル我ヲ傷スルヲ、我焉ニカ之ヲ逃レン」と。「東農教」

★二千石 ニセンセキ

漢代の太守のこと。その年俸が二千石で、我が國の地

方長官の如きものなるが故に、我が國にては府縣知事のことをいふ。

★二重生活 ニヂユウセイクラツ

自分の理想とする生活が實現されない爲め、他の現實的な生活を以て生き二様の生活をする。即ち文筆者たることを理想の生活とするもそれが實現されない爲め、他の現實的な商人の生活を以て二様の生活をする類である。「廣高師」

★日 新 ニツシン

日毎に昨非を改めて新らしくなること。大學に「苟日新、日日新、又日新」とある。「鹿農」

★日本主義 ニツボンシユギ

日本は日本獨特の考へ方を持ち、日本特有の精神を發揮すべきだといふ主義。「廣高師」

★追 二一兎 ニトをオフ

二道をかけて事をする。追二兎者不レ得二兎一といふことがある。

★二人 ニニン

父母のこと。詩經に「明發不レ寤、懷二人也」とある。

★割 鶏焉用ニ牛刀 ニハトリをサクにナンゾギユウ

小事を處理するのに大器を用ひざる喩。論語に「夫子、莞爾 笑曰、割鶏焉用ニ牛刀」とある。

★新嘗祭 ニヒナメマツリ

其年の新穀を神に捧げ、又陛下のお上りになる儀式。

★入 道 ニフダウ

佛門に入ること。又佛門に入った人のこと。

★入 木 ニフボク

墨痕の深く木に入りしこと。又名手の筆に喩へていふ。吳叔事類賦に「工人削之、筆入木三分」とある。

★二枚舌 ニマイジタ

言葉が前後矛盾し又人によつて二様に言ふこと。虚言。

★如 意 ニヨイ

思ふまゝになること。反対は不如意なり。指歸に曰く「骨角竹木、刻シテ、人手指爪ヲ作ル。柄長サ三尺許リ、或ハ背ニ痒アリ、手ノ至ラザル所ハ、用ヒテ以テ搔抓ス、人ノ意ノ如シ。故ニ如意ト曰フ」とある。

★如是我聞 ニヨセカモン

御經の最初におく語で、我はかくの如く聞かといふこと。

★女 院 ニヨケン

佛門に入られた皇太后のこと。

★任 意 ニンイ

心まかせのこと。隨意。「專檢」

★任重 而道遠 ニンオモクしてミチトホシ

責任の重大なること。背負ふ荷は重くして行くべき道は遠い義なり。論語に「士不レ可ニ以不ニ弘毅ニ、任重而道遠、仁以爲己任、不ニ亦重ニ乎、死而後已、不ニ亦遠ニ乎」とある。

★任 俠 ニンケフ

をとこだてのこと。史記に「相共信、爲任、同ニ是非ニ爲レ俠」とある。

★人間萬事塞翁馬 ニンゲンバンジサイウガウマ

人の禍福は定りがなまいといふこと。詳しくは塞翁馬で説明す。サの部を見よ。

★人 情 ニンジャウ

人の心が物に感じて動くはたらきのこと。莊子に「其

レ人情ニ非ラザルカ」とある。

★忍辱 ニンジョク  
屈辱を忍びこらへること。〔北農〕

★胡蘿蔔 ニンジン  
野菜の名のこと。胡蘿蔔元の時、始めて胡地より来る、  
氣味蘿蔔に似たり。故に名づく。

★認諾 ニンダク  
みとめて承知すること。〔水産〕

★人非人 ニンビニン  
人にして人にあらざる行の人。不義非道の人。人面獸  
心。

ヌの部

★舐糠及米 ヌカをネアリてコメにオロぶ  
土地をけづり盡せば國を滅ぼす喻。糠をねぶり取つて  
しまへば米に至るの義による。

★齋盜糧 ヌスビトにカタをモタラす  
敵に利益を與へること。戰國策に「藉冠兵而齋盜糧者也」とある。

★射干玉の ヌバタマの  
暗・夜に冠する枕詞。〔女子大〕

★濡衣 ヌレギヨ  
無實の罪のこと。冤罪。

★濡手に粟 ヌレテにアハ  
骨を折らずに利益を得ること。即ちぬれた手で粟をつかむ義による。〔大外語〕

ネの部

★寧馨兒 ネイケイジ  
こんな良い子といふこと。寧馨は俗語で如レ此の意なり。兒け子なり。晋書に「何物老嫗生此寧馨兒」とある。〔廣高師・國大〕

★寧日 ネイジツ  
安すらかにして無事なる日のこと。梁武帝の語に「終無寧日」とある。寧議はやすらかにして無事なる歳のこと。世語に「自子之行、晋無寧歲」とある。〔陸士・京城醫〕

★佞人 ネイジン

辯舌に巧にしてへつらふ者のこと。〔水産・外語・日大〕

★禰宜 ネギ  
神官にして神主の下役のこと。

★熱血 ネツケツ  
あつき血潮のこと。又誠心の義ともなる。

★熱心 ネツシン  
物事を一心に思ひ込むこと。熱中。孟子に「仕則慕君、不得於君則熱中」とある。

★捏造 ネツザウ  
無根のことをいつはりこしらへること。

★熱鬧 チツタウ  
人多くしてさわがしいこと。白居易の句に「熱鬧漸知隨念盡」とある。〔陸士・海欄・仙醫・盛農・上賢〕

★捏報 ネツパウ  
無いことを實際あつたやうにこしらへて報ずること。〔廣高師〕

★涅槃 ネヘン  
煩惱を脱して永遠の生命を得ること。佛の死、釋迦の死をいふ。梵語にして、之を漢譯すれば圓寂、寂滅、

ネの部

★涅槃 ネヘン

煩惱を脱して永遠の生命を得ること。佛の死、釋迦の死をいふ。梵語にして、之を漢譯すれば圓寂、寂滅、

★念佛三昧 ネンブツサンマイ  
一心不乱に佛を念ずること。〔高校〕

★念力 ネンリキ

★年中行事 ネンジュウギヤウジ  
一年中の各季節に行ふべく定つてゐる儀式のこと。〔鹿農〕

★念出 ネンシュツ  
無理算段して出すこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

★年鑑 ネンカン  
年々に起つた物事の状況を集め記したもののこと。

★年齒 ネンシ  
年齢のこと。

ホノハの部

思ひをこめること。

ノの部

★濃 艶 ノウエン

つやがあつてあてやかなること。李白の詩に「一枝濃艶露凝香」とある。

★能 士 ノウシ

才能ある士のこと。荀子に「足<sub>ル</sub>以<sub>テ</sub>容<sub>ニ</sub>天下之能士」とある。士に就いてはシの部に詳しく説明す。

★能 事 ノウジ

やれば出来ること。可能なること。易に「引<sub>キ</sub>而伸<sub>ベ</sub>之<sub>ヲ</sub> 朋類<sub>シ</sub>而長<sub>シ</sub>之<sub>ヲ</sub> 天下之能事畢矣」とある。

★農 穡 ノウシヨク

穀物の植付と取り入れ、即ち農業のこと。農は種を植ふるをいひ、穡は收むるをいふ。穡に同じ。

★農爲<sub>ニ</sub>國本<sub>一</sub> ノウハクニノモトタリ

農業は政治の根本であるといふこと。帝範に「夫食爲<sub>ニ</sub>人天<sub>一</sub> 農爲<sub>ニ</sub>國本<sub>一</sub>」とある。

★能率増進 ノウリツツウシン

仕事の効果の割合が増すこと。〔陸士・臨教・金葉・航空機〕

★篋 代 ノシロ

篋(ヤジリ)の中子(ナカゴ)の矢竹にはまりこんでゐる部分のこと。〔陸士・東高師〕

★長 閑 ノドカ

空が晴れて天気よくのんびりとしてゐること。〔海兵・宇農・豪農〕

★野伏山立張本 ノアセヤマダチのチャウホン

山賊の發頭人のこと。〔女高師〕

★暖 簾 ノレン

商家の軒にかけて日除けとするもの。又商家の屋敷のこととなる。〔米工・宇農〕

★野 分 ノワケ

晩秋から冬にかけて吹く烈しい木枯しのこと。〔廣高師・明大・日醫・廣農・専檢〕

ハの部

★俳 優 ハイイウ

芝居の役者のこと。

★俳 諧 ハイカイ

用語も意味も狂體によむ和歌のこと。五、七、五の三句十七字で成立つてゐる。俳句。發句。

★賣 交 バイカウ

友人を欺くこと。交友を賣るの義による。史記に出づ。

★廢學若<sub>ニ</sub>吾斷<sub>ニ</sub>斯織<sub>一</sub> ハイガクハワガコのシヨクを

刻苦して勉勵するも、一朝にしてその學問を廢せば無用に歸するといふこと。列女傳に「孟母以<sub>レ</sub>刀斷<sub>ニ</sub>其機<sub>一</sub>曰、子廢學若<sub>ニ</sub>吾斷<sub>ニ</sub>斯織<sub>一</sub>」とある。

★背 汗 ハイカン

恥ぢて背に汗の出ること。〔神商大〕

★肺 肝 ハイカン

肺臓と肝臓とのこと。轉じて心中の意となる。

★黴 菌 バイキン

生活機能をもつてゐる物に寄生する下等植物のこと。肉眼には見えぬ程の微細なもので、其の繁殖は迅速にして物を腐敗せしめ、又傳染病のもととなる。〔長商〕

★俳 徊 ハイクワイ

ハの部

行きつ戻りつすること。ためらひて進まざる貌。漢書に「徘徊往來」とある。又俳偲とも書く。〔盛農・臺師〕

★敗軍之將不可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>言<sub>一</sub> カラナク

戦に敗れたる者は、再び軍事を説く可からずといふこと。吳越春秋に「臣聞亡國之臣不可<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>政、敗軍之將不可<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>勇」とある。

★背 景 ハイケイ

舞臺の後の壁に畫いた景色のこと。轉じて後に引き立てよくれる後援者のことをいふ。〔東高師〕

★沛 乎 ハイコ

雨の盛んに降るさま。沛然。〔北大・高校・桐葉〕

★梅妻鶴子 バイサイカクシ

風流にして雅致ある生活すること。翠雨軒詩話に曰く「宋林和靖、住<sub>ニ</sub>西湖孤山<sub>ニ</sub>、植<sub>ニ</sub>梅花<sub>一</sub>畜<sub>ニ</sub>鶴<sub>一</sub>、常曰、鶴爲<sub>レ</sub>子梅爲<sub>レ</sub>妻」と。

★梅酸止<sub>レ</sub>渴 バイサンカツをト<sub>レ</sub>む

梅の實の酸味を聯想して渴を止むること。祖庭事苑に「魏武帝、與<sub>ニ</sub>軍士<sub>一</sub>失<sub>レ</sub>道、大渴而無<sub>レ</sub>水、遂令<sub>レ</sub>曰、前

有<sup>リ</sup>梅林<sup>ニ</sup>結<sup>テ</sup>子<sup>ヲ</sup>、甘酸<sup>可</sup>ニ以<sup>テ</sup>止<sup>ム</sup>渴<sup>ヲ</sup>、士卒<sup>聞</sup>之<sup>テ</sup>、口中<sup>水</sup>出<sup>テ</sup>遂<sup>得</sup>レ及<sup>ニ</sup>前<sup>原</sup>ニ<sup>ト</sup>ある。

★拜 芝 ハイシ  
對面の敬語。御目にかゝること。芝は人の顔色のこと。拜眉。拜顔。

★稗 史 ハイシ  
小説流に書いた歴史のこと。正史の反對。〔陸士〕

★不 勝<sup>ニ</sup>栝<sup>杓</sup>ニ<sup>ハ</sup>ハイシヤクに見<sup>タ</sup>ヘズ  
已に酔ひてまた飲む能はざること。史記に「沛公不<sup>レ</sup>勝<sup>ニ</sup>栝<sup>杓</sup>、不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>辭<sup>ス</sup>」とある。

★背 誦 ハイシヨウ  
そらよみのこと。暗誦。魏志に「因使<sup>ニ</sup>背<sup>ニ</sup>誦<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>失<sup>ニ</sup>一字<sup>ニ</sup>」とある。〔醫專〕

★陪 乘 バイジヨウ  
貴人の車に共に乗つてお侍をすること。

★陪 臣 バイシン  
臣下の臣下、即ちまた家來のこと。〔海樞〕

★拜 趨 ハイスク  
参上の敬語。御うかがひすること。

★杯中蛇影 ハイチヌウのダエイ

疑ひ惑ふて神經をなやますこと。疑心暗鬼を生ずの類なり。盃の字を書くことあるも盃は杯の俗字なり。晉書に「樂廣嘗親友、久潤不<sup>レ</sup>復來、廣問<sup>ニ</sup>其故<sup>一</sup>、答曰、前在<sup>ニ</sup>坐蒙<sup>レ</sup>酒、方<sup>レ</sup>飲、忽見<sup>ニ</sup>盃中有<sup>レ</sup>蛇、意甚惡<sup>レ</sup>之、既飲而<sup>レ</sup>疾、時河南<sup>臨</sup>東<sup>壁</sup>上有<sup>ニ</sup>角弓<sup>一</sup>、漆畫<sup>ニ</sup>作<sup>レ</sup>蛇、廣意<sup>ニ</sup>盃中蛇<sup>即</sup>角弓也、復置<sup>ニ</sup>酒於<sup>前</sup>庭<sup>一</sup>、謂<sup>レ</sup>客曰、盃中復有<sup>レ</sup>所見否、答曰、所見如<sup>レ</sup>初、廣乃告<sup>ニ</sup>其所以<sup>一</sup>、客豁然<sup>意</sup>解、沈痼頓愈」とある。

★拜 塵 ハイチン  
貴人に阿諛すること。又賢者を尊重すること。晉書に「君每<sup>レ</sup>出<sup>降</sup>車路左<sup>一</sup>望<sup>レ</sup>塵而拜」とある。

★買田問舍 バイデンモンシヤ  
國事を顧ずして自己の安逸を食ふこと。魏志に「備曰、君求<sup>レ</sup>田問<sup>レ</sup>舍、言無<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>采」<sup>ト</sup>あり、註に曰く「求<sup>レ</sup>田問<sup>レ</sup>舍、務<sup>レ</sup>求<sup>レ</sup>安也」<sup>ト</sup>ある。求の字を買の字に換へしなり。

★悖 德 ハイトク  
徳にもとること。悖道。〔陸士・水産〕

★背水之陣 ハイスキノデン  
決死の全力を盡すこと。敵を前に迎へ、水を背後にして陣を取り決死の戦をなす義による。兵法に「之ヲ死地ニ陷シイレテ、而シテ後生キ、之ヲ亡地ニ置キテ、而シテ後存ス」といふ義に同じである。この語は韓信が背水之陣を以て趙を破り、趙王歇を擒にせし故事に出づ。〔海兵・高校・京城醫・國大〕

★排 擠 ハイセイ  
おしのけること。排斥。擠斥。

★敗 類 ハイタイ  
やぶれくづれること。〔山商〕

★胚 胎 ハイタイ  
(1)はぢまること。根ざすこと。(2)はらごもること。胚も胎もみごもる義なり。〔長商・海兵・名工・米工・陸士・東美・東北大〕

★配 謫 ハイタク  
遠方へ流されること。配流。〔水産〕

★背 馳 ハイチ  
彼と此と反對になること。〔高商〕

★俳 味 ハイミ

俳諧の趣味といふこと。  
★杯盤狼藉 ハイバンラウゼキ  
盃や皿などがとり亂れて洒落の紛亂せる有様のこと。史記に「杯盤狼藉、堂上燭滅」とある。

★背 負 ハイフ  
そむくこと。背をむけ負くといふ義による。〔東商大・陸士〕

★肺 腑 ハイフ  
(1)心の眞底といふこと。(2)肺と腑の相附く如く至つて親しい者のこと。親戚。〔海兵・陸士〕

★背 戾 ハイレイ  
そむきもとること。背は叛く、戾は悖なり。〔東商大〕

★飲 灰洗胃 ハイをノミキをアラフ  
改心して善行をなすこと。南史に出づ。  
★銜 枚 バイをフクむ  
カンバイの部を見よ。〔陸士〕

★忘憂物 バウイウブツ  
酒の別名のこと。顧榮傳に「惟酒可<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>忘<sup>レ</sup>憂<sup>一</sup>」とある。

★防意如城

城を築いて防ぐが如き強固なる決意のあること。元來は私慾の生ずるを防ぐ意なりしなり。朱嘉の文に「守口如瓶、防意如城」とある。

★褒衣博帶

儒者の服のこと。褒とは大裾、博帶は幅廣き帶なり。漢書に「褒衣博帶盛服、至門上謁」とある。

★望雲情

子が旅にて父母を思ひ慕ふ情のこと。漢書に「仁傑登泰山、反顧見白雲孤飛、謂左右曰、吾親舍其下」とある。

★報効

恩に感じて力を盡すこと。〔盛農〕

★芳紀

年若い女子の年齢のこと。紀は歳なり。

★忘却

わすれること。却は助字なり。〔名商〕

★防禦

攻撃をふせぐこと。〔海樓〕

★魴魚頰尾

苦勞の甚だしきこと。頰は赤なり。魴といふ魚の尾は元來白色なり。然るに赤色となるは勞したるが故なり。所謂「魚勞、則尾赤、人勞、則髮白」の意に同じ。詩經に「魴魚頰尾王室如燬」とある。

★鮑魚之肆

臭氣鼻をつくこと。鮑魚は「ヒモノ」又鹽漬の魚なり、肆は店なり。故に魚屋の店に行けば臭氣鼻をつく義による。孔子家語に「與不善人居、如入鮑魚之肆、久而不聞其臭」とある。

★彷彿

ふら／＼さまよひ歩くこと。方皇、仿佛とも書く。〔盛農・慶大〕

★抱關擊柝

門番や夜廻りの賤しい役のこと。抱關は門のかんぬきを執ること、擊柝は拍子木を打つことなり。

★傍系

直系から分れた系統のこと。傍訓はふりがなのこと。

★望覓

わがまゝのこと。勝手。放逸。〔海兵・海軍・慈賢〕

渴望の切なること。孟子に曰く「民望之若大旱之望雲霓」とある。

★放言

勝手気儘に無責任の言をなすこと。

★尨犬

むく犬のこと。尨狗。〔明專〕

★旁午

往來の繁しいこと。漢書に「使者旁午」とある。〔九藥〕

★亡國之音

淫靡なる音楽のこと。滅亡せる國の音楽の意による。禮記に出づ。

★暴虎馮河

極めて危険なる喩。即ち暴虎は虎を手で打ち殺すことにして、馮河は河を歩いて渉ることなり。詩經に「不致暴虎、不致馮河」とある。〔東高師・廣高師・陸士・專檢・京鑑・山商・名工〕

★方劑

薬の調合のこと。〔京醫大〕

★包藏禍心

秘かに他を害せんとする心を抱くこと。左傳に「無乃包藏禍心以圖之」とある。

★茅茨不剪

宮殿の儉素なること。屋根をかやで葺いて先端を剪りそるへないこと。

★芒刺在背

恐懼して身動きも出来ざること。芒刺は草の端なり、在背は背中にあつて刺すなり。前漢の宣帝紀に「漢ノ宣帝、高帝ノ廟ニ謁ス。霍光驂乘ス。上、内ニ之ヲ嚴憚ス。芒刺ノ背ニ在ルガ如シ」とある。

★傍若無人

傍に人無きが如く、又眼中人なきが如く振舞ふこと。史記に「已而相泣傍若無人者」とある。

★苞苴

(1) 賄物のこと。藁にて包みたるを苴といひ、下に藉くを苴といふ。(2) 又賄賂のこと。〔專檢〕

★放縱

わがまゝのこと。勝手。放逸。〔海兵・海軍・慈賢〕



★放 心 ハウシン

うつかりしてゐること。又安心すること。放念。〔北  
大〕

★抱薪救火 ハウシンキフクワ

災を除かんとして却て身を滅する喻。維南子主術訓に  
「止言以言、止事以事、譬猶抱薪救火」とある。

★方 寸 ハウスン

心のこと。一寸四方。僅かな大いさ。轉じて心のこと  
となる。〔早高・海兵・宇農〕

★方寸之木可使高二於岑樓

ハウスンノキモシンロウヨリタカカシムベシ  
比較する標準を誤れば、低きものも高きものより尙長  
くなるといふこと。岑樓は樓の如く鋭く高きもの。孟  
子に「不揣其本、而齊其末、方寸之木不使高二  
於岑樓」とある。

★茫然自失 バウゼンジシツ

ぼんやりして氣を失ふこと。莊子に「子貢茫然自失」  
とある。〔東商大〕

★寶 祚 ハウソ

天子の御位のこと。皇祚。寶算は聖壽に同じく天子の  
御年齢のこと。〔神宮・中商〕

★彭 祖 ハウソ

仙人の名のこと。荀子に「彭祖堯ノ臣ニシテ、虞・夏・  
商・周ヲ經テ、壽七百歳」とある。〔廣高師〕

★滂 沱 ハウダ

涙のひききりなく落ちるさま。

★妄 誕 バウタン

うそ、いつはりのこと。〔陸士〕

★飽暖生淫欲 ハウダンインヨクをシヤウザ

飽食暖衣して安逸なればおのづから淫慾を生ずといふ  
こと。事林廣記に曰く「飽暖生淫欲、飢寒發善心」  
とある。又一沃士之民不材、淫也、瘠士之民、無  
不繩義、勞也」とあるに同じ。

★方 丈 ハウヂヤウ

一丈四方といふ意から和尙の小さい居間のこと。轉じ  
てお寺の佳職のこととなる。

★望 塵 バウヂン

★庖丁解牛 ハウテイウシをトク

來客を俟つ意のこと。車馳つて塵是が爲に起る。遂に  
其の來るを知る。晋書に「望塵而拜」とある。  
其の技術の精妙なるに感嘆すること。莊子に「庖丁、  
文惠君ノ爲メニ牛ヲ解ク。手ノ觸ルル所、肩ノ倚ル所、  
足ノ履ム所、膝ノ跨ル所、若然響が刀ヲス、ムル聒  
然音ニ中ラザルナシ。桑林ノ舞ニ合ヒ、乃チ經首ノ會  
ニ中ル。文惠君曰ク、噫、善哉、技蓋シ此ニ至ルカト。  
庖丁刀ヲ釋キテ對ヘテ曰ク、臣ノ好ム所ノ者ハ、道ナ  
リ。技ヨリ過ム。始メ臣ガ牛ヲ解クノ時、見ル所、牛  
ニ非ザルモノナシ。三年ノ後、未ダ嘗テ全牛ヲ見ズ。  
良庖ハ歳ニ刀ヲ更ム、割スレバナリ。族庖ハ月ニ刀ヲ  
更ム、折スレバナリ。今臣ガ刀十九年ナリ。解ク所數  
千牛ナリ。而シテ刀又新タニ研ヨリ發スルガ若シ。彼  
ノ節ニハ間アリテ、而シテ刀又ハ厚キコトナシ。厚キ  
コトナキヲ以テ間アルニ入ル。恢恢乎トシテ其レ又ヲ  
遊ブニ於テ必ズ餘地アリ。是ヲ以テ十九年ニシテ、刀  
又新タニ研ヨリ發スルガ若シト。文惠君曰ク、善イ哉、  
吾レ庖丁ノ音ヲ聞キテ生ヲ養フコトヲ得タリト」とあ

★放 擲 ハウテキ

なげうつて顧みぬこと。〔水産〕

★妄 動 バウドウ

あとさきの考なしに事を起すこと。輕舉妄動などいふ。  
〔神商大〕

★胃 瀆 バウドク

けがすること。

★妄 念 バウネン

みだりな考のこと。〔襄師〕

★忘年之交 バウネンノマツハリ

年齢の別を意に介せず、才徳を以て交ること。漢書に  
「彌衡有二三逸才、少與三孔融、交、時衡未滿二十一、而  
融已五十、爲忘年之交」とある。

★澎 湃 ハウハイ

水や波の相うつ音のこと。又水のさかんなさま。

★寶馬香車 ハウバコウシヤ

華美なる馬や車のこと。

混同して一になること。又まじりひろがること。「明專・長商・陸士」

★放飯流歎而問無齒決ハウハンリウセツしてシケツナキをトフ

大なる無禮をしながら、小なる無禮を氣にして問ふこと。即ち放飯流歎とは、饗應を受けた時に大口に澤山食ひ、汁を飲むに流し込むが如くすることにて大なる無禮なり。その大なる無禮を氣付かずして、齒決即ち乾肉を手で割かないで齒で食ひち切る小なる無禮をしなかつたかと問ふて氣にすること。孟子に「放飯流歎而問無齒決、是謂不知知務」とある。

★抱負ハウフ

自分の心に懐く考のこと。抱負遠大などいふ。計畫。かゝへたりおぶつたりする義よりなる。「高校・神商大・熊工」

★抱腹絶倒ハウフクゼツタウ

大いに笑ふさま。抱腹は誤り、捧腹の方正し。捧腹の部を見よ。

★彷彿ハウフツ

さも似たりといふこと。髣髴とも書く。「水産・千園」

★不可方物カラス ハウアツサヘからズ

物が混亂して辨別することの出来ないこと。方は別つ、物は名づけるなり。方物は又その地方の産物をいふこともある。國語に「民神雜糅、不可方物」とある。「東商大・商船」

★放辟ハウヘキ

勝手氣儘で心がれちけてゐること。「臨教・立大・東高師」

★褒貶ハウヘン

ほめるとそしること。毀譽褒貶も同じ。毀・貶はそしり、譽・褒はほめるなり。句調を強める爲に重ねていふなり。「山商・専檢・高校・廣高師」

★報本反始ハウホンハンシ

物の由りて出でたる本に報ゆること。即ち祖先を尊ぶこと。報も反も共に報ゆる意なり。

★放漫ハウマン

わがままなこと。

★亡命バウメイ

國籍を脱して逃亡すること。命は名で即ち名籍、亡は

その名籍を失ふことなり。

★亡羊之歎バウヤウノタン

學問の道多岐にして眞理に達し難きを歎ずること。列子に曰く「楊子ノ隣人羊ヲ亡セリ。既ニ其ノ黨ヲ率キ、又楊子ノ豎ニ請ヒテ之ヲ追フ。楊子曰ク、岐路多ケレバナリト。既ニシテ反ル。問フ、羊ヲ獲タルカト。曰ク、之ヲ亡セリト。曰ク、奚ゾ之ヲ亡セリト。曰ク、岐路ノ中ニ、又岐アリ、吾レ行ク所ヲ知ラズ、反ル所以ナリト。楊子曰ク、大道ハ、多岐ヲ以テ羊ヲ亡ヒ、學者ハ多方ヲ以テ生ヲ喪フ」と。「北大」

★亡羊補牢バウヤウラウをオギナフ

一度過つて後改むること。牢は羊を養ふ圍なり。羊を失ふて圍を補ふ義による。戰國策に「見兎而顧レ犬、未レ爲レ晚也、亡羊而補レ牢、未レ爲レ遲也」とある。

★放埒ハウラツ

しまりがないうこと。酒食などに金錢を無駄使ひすること。「高校・京城高・名工・名商」

★暴戾恣睢バウルイシキ

ハの部

あらゆるしく道理にそむき、行を恣にし、にらみ見る

こと。史記に「暴戾恣睢、聚黨數千人、横行天下」とある。

★流芳百世ハウをヒヤクセイにナガサ

芳名を後代に傳ふること。漢書に「晉桓溫生、而有大志、嘗撫枕歎曰、男子既不能流芳百世、亦當臭遺萬年」とある。

★以貌取人バウをモツてヒトをとる

性格の如何を顧みず、其の容貌のみにて人を採用すること。史記に「孔子曰、吾以言取人、失之宰予、以貌取人、失之子羽」とある。

★馬鹿バカ

愚人のこと。史略に「趙奇、鹿ヲ獻ジテ馬ト云フ。二世左右ニ問フ。或ハ馬ト云ヒ、或ハ鹿ト云フ」とある

★以馬革裹屍バカクをモツてシカパネをツ、ハ

烈士の戰爭に死するをいふ。後漢書に曰く「男兒要當死三子邊野、以馬革裹屍還葬耳、何能臥二床上、在二兒女子手中耶」と。

★運籌帷幄之中ハカリゴトをキアクノウチにメダ  
陣營に於て戦略を決すること。帷幄は陣營の幕なり。史記に「夫運籌帷幄之中、決勝千里之外」とある。「明專・山商・海機・海兵」

★破顔ハガン  
顔色を和げて少しく笑ふこと。破顔一笑などいふ。  
〔海機〕

★霸氣ハキ  
覇者とならうとする意氣ごみのこと。人を壓する氣慨。野心。霸氣があるなどいふ。「水産」

★馬牛而襟裾ベギウにしてキンキヨス  
學識なき者を譏りていふこと。韓愈の詩に「人不通古今、馬牛而襟裾」とある。

★破鏡ハキヤウ  
夫婦が離別すること。昔夫婦ありて相別るに臨み、鏡を破りて、各其の半を執りし故事による。丹鉛總錄に曰く「破鏡不重照、落花難上枝」と。

★白雲郷ハクウンキヤウ  
天帝の居をいふ。莊子に曰く「乘彼白雲、遊于帝鄉」と。

★莫逆バクギヤク  
意氣投合せる友のこと。莊子に「四人相視而笑、莫逆於心、遂相與爲友」とある。「專檢・米工」

★白玉樓中之人ハクギヨクロウチユウノヒト  
文人の死すること。書言故事に「李賀將卒、夢ニ人ノ一版書ヲ持スルヲ見ル。曰ク、天上ノ白玉樓成ル、君ヲ召シテ記ヲ爲ラシムト。暫クシテ氣絶ス」とある。「神商大」

★白魚入舟ハクギヨフネにイ  
敵の歸服する兆のこと。史記に「武王渡河、中流白魚躍入王舟中、武王俯取以祭」とある。

★白駒之隙ハククノゲキ  
光陰の速に經過する喩。即ち白馬がすき間を過ぎ行くやうだといふ義なり。又人生のはかないことにもいふ。「桐工・海機・外語・米工」

★白華菅、白茅束ハククワノクワシ、ハクバウのタ  
夫婦相須ちて用をなすといふこと。即ち白華を漬して菅となせば、白茅を以て之を束れて全しといふ義なり。

詩に「白華菅兮、白茅束兮、之子之遠、俾我獨兮」とある。

★麥秋バクシウ  
陰曆四月の異稱。むぎのあき。「外語」

★栢上之桑ハクシヤウノクラ  
貞操の堅い婦人のこと。古今注に「栢上ノ桑ハ秦氏ノ女、邯鄲ノ人ニシテ、名ハ羅敷ナリ。桑ヲ栢上ニ採ル、王、臺ニ登リ、見テ之ヲ悦ビ、因リテ酒ヲ飲ミ、誓ハント欲ス。羅敷乃チ箏ヲ彈シ、栢上ノ歌ヲ作ル。使君自有婦、羅敷自有夫、東方千餘騎、夫婿居上頭」とある。

★驀然バクセン  
まつしぐらに、一散にといふこと。驀は馬に騎る。「水産・陸士」

★剝啄之聲ハクタクノコエ  
客の門をコツ／＼と叩く音のこと。又客の足音に似いふ。韓退之の詩に「剝啄啄、有客至門、我不出應、客去」とある。

★伯仲之間ハクチュウノアヒダ

甲乙兩者の間に甚だしい優劣の差が無いこと。大差なし。似たり寄つたり。伯は兄、仲は弟の義による。「專檢・大外語・千圓」

★爆竹バクチク  
正月十五日に青竹を束れて火に燦りて爆發せしむること。左義長の火。どんどの火。支那人は之を祝日に爆發させしといふ。

★幕天席地バクテンセキチ  
志氣の大なること。氣宇の高大なること。即ち天を幕とし、地を席となすが如き意氣をいふ。

★白熱ハクネツ  
非常に勢ひ立つたこと。金が白色の光を放つほど非常に熱せられた義による。白熱戦などいふ。「神宮」

★白飯青藜ハクハンセイスイ  
人に招待せられて僕者や馬に至るまでもてなしを受けたるを辱。白飯青藜といふ。杜詩に曰く「與奴白飯、馬青藜」と。藜は芻の俗字、馬にくはせる草なり。

★白眉ハクビ  
多くの中で一人の優れたる者のこと。蜀志に曰く「馬」

氏兄弟五人、白眉最良、良眉中有三白毛、故以稱之」と。〔専検・海軍・官軍〕

★白璧之微瑕 ハクヘキノビカ  
少しの缺點のこと。大體は美なれども僅かの疵あること。

★薄 暮 ヘクガ  
ひぐれのこと。黄昏。薄は肉薄の薄でせまること。〔神商大〕

★白面書生 ハクメンシヨセイ  
年若く事務に經驗なきものこと。

★伯 樂 ハクラク  
古、善く馬を見わけた人のこと。又馬の事に明るく、その賣買周旋などする者のこと。〔水産〕

★白龍魚化 ハクリヨウギヨクワ  
貴人も微行をなす時は賤者の爲に辱かしめられるといふこと。説苑に「白龍魚化被豫且制」とある。豫且は宋の國の賤臣なり。又莊子に「神龍失水、陸居爲蟻、所制」とあるも意同じ。

★暴 露 バクロ

かくした事のあらはれること。暴露戰術などいふ。暴も露もあらはれることなり。〔水産・臺師・神商大〕

★駁 論 バクロン  
自己の意見を主張し、人の議論を攻撃すること。〔小商〕

★霸 權 ハケン  
はたがしらの有する権力のこと。〔女高師〕

★藐姑射之山 ハコヤノヤマ  
仙人が住んでゐるといふ山のこと。又上皇の御所のこと。山海經に「藐姑射之山無草木多氷」とある。〔臨教〕

★鴈 祭 バサイ  
軍の止まる所にて軍神を祭ること。禮記に「鴈於所征之地」とある。

★馬 史 バシ  
司馬遷の史記のこと。

★馬耳東風 バジトウフウ  
聖賢の教や又他人の諫言の耳に入らぬ喻。李白の詩に「世人聞之皆掉頭、有如馬耳東風吹馬耳」とある。

★靡 不 有 初 鮮 克 有 終

ハジメアラザルナシ、ヨクヲハリアハルハスクナシ  
人は物の初をよくしないものは無いが、其の終りまで全うすることの出来る者は少ないといふこと。この語詩經に用づ。〔廣高師〕

★始如三處女、終如三脱兔

ハジメハシヨヂヨのゴトクヲハリハダツトのゴトシ  
始は處女の如くおとなしく敵に油断をさせ、後には逃げる兎の如くに敏捷な振舞をして敵に施す術なからしめること。〔海兵〕

★馬上得之 ベジヤウコソをエタリ  
兵馬の力即ち干戈を以て天下を得たること。史記に出づ。

★破邪顯正 ハジヤケンセイ  
邪しきを破つて正しきをあらはすこと。

★馬 食 バシヨク  
箸を用ひず直ちに食器より食ふこと。又大食すること。牛飲馬食といふ。

★端 居 ハシキ

家又は縁側の端に坐ること。〔山商・北大〕

★波 臣 ハシン  
流浪の人のこと。魚のこと。莊子に「我ハ東海ノ波臣ナリ」とある。鰲鮒之急の部を見よ。

★破 船 ハセン  
破れ船、即ち沈没船のこと。

★霸 道 ハダウ  
武力をもつて天下を治めること。

★旅籠屋 ハタゴヤ  
旅館のこと。〔東高師・外語・明華〕

★旗 本 ハタモト  
徳川時代將軍直參の士で知行百俵以上一萬石以下の者のこと。〔海兵・上置・米工〕

★破 綻 ハタン  
破れほころびること。事業が立ち行かなくなること。〔海兵・長商・米工・盛農・山商・愛醫大・大商・廣高師〕

★破竹之勢 ハチクノイキホヒ  
非常に勢ひがはげしいこと。即ち竹を破る如く勢よく勢せずして容易に敵を破る義による。晉書に「今兵威

已振 譬<sup>ハレシム</sup>「破<sup>レ</sup>竹」とある。「専檢・普文」

★發 揮 ハツキ

あらはし示すこと。「山商・長商」

★八 紘 ハツクワウ

八方の地のはてのこと。天下のこと。「神宮・明專・東農教・大藥」

★跋 扈 バツコ

はびこること。上を凌いで我儘な振舞をすること。跳梁跋扈などいふ。「専檢・海兵・高檢・大商」

★拔山蓋世 バツザンガイセ

力が非常に強く元氣の非常に盛んなるさま。「水農・山商」

★發 祥 ハツシヤウ

人又は國の起る初のこと。

★發 縱 指示 ハツシヨウジ

犬をつなぐ繩を解いて獲物にけしかけること。史記に「夫獵<sup>シテ</sup>追<sup>レ</sup>殺<sup>スル</sup>獸<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>者<sup>ハ</sup>狗<sup>也</sup>、發<sup>シ</sup>縱<sup>シ</sup>指<sup>シ</sup>示<sup>ス</sup>者<sup>ハ</sup>人<sup>也</sup>」とある。「海欄・東商大」

★發 燭 ハツシヨク

火をつける附木のこと。綴<sup>ル</sup>縁<sup>ニ</sup>に「杭<sup>ヲ</sup>人<sup>ノ</sup>削<sup>リ</sup>松<sup>木</sup>、爲<sup>シ</sup>小<sup>片</sup>、其<sup>薄</sup>如<sup>シ</sup>紙、溶<sup>シ</sup>硫<sup>黄</sup>一<sup>塗</sup>、木<sup>片</sup>名<sup>ニ</sup>發<sup>燭</sup>」とある。

★發 軻 ハツジン

齒止を除いて車で出發すること。「女高師」

★拔 萃 バツスキ

多くの中から抜き出すこと。孟子に出づ。「京城醫・水産」

★跋 涉 バツセフ

山河を歩き廻ること。詩經に「草行ヲ跋ト云ヒ、水行ヲ涉トイフ」とある。「三高・神商大・慶大」

★葉 月 ハツキ

陰曆八月のこと。「陸士・女大・早大專」

★發 憤 ハツブン

ふるひたつこと。奮發すること。即ち憤を發して道を求むる義による。

★拔 擢 バツテキ

衆中より選びぬくこと。漢書に「今復拔擢<sup>セラル</sup>備<sup>ハル</sup>内朝<sup>臣</sup>」とある。「女高師」

★法 度 ハツト

さしとめ、禁制のこと。「七高・鹿農」

★拔本塞源 バツボンソクゲン

本源にさかのぼりて正しく處置すること。左傳に出づ。

★潑 刺 ハツラツ

魚の飛びはれるさま。勢の熾んなるさま。杜甫の詩に「船尾跳魚潑刺<sup>ム</sup>」とある。「女高師・愛醫大・長商」

★撥亂反正 ハツランハンセイ

亂世を治め正道に復すること。撥は治なり除なり。公羊傳に「撥<sup>シテ</sup>亂<sup>ヲ</sup>世<sup>ヲ</sup>反<sup>シテ</sup>諸<sup>正</sup>莫<sup>レ</sup>近<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>春秋<sup>ニ</sup>」とある。「海經・鹿農・專檢・盛農・慶大・小商・神商」

★破天荒 ハテンクワウ

前例にない大きなことを爲すこと。天荒は天のあれたることにて未開の時の混沌たること。之を破り開く義による。「専檢・陸士・海兵・京城醫・國大」

★馬頭米囊花歡 バトウメイノウクタワのヨロコビ

艱難を経て目的に達せるよろこびのこと。米囊花は粟の花なり。飛翫の詩に「無<sup>レ</sup>限<sup>ノ</sup>客<sup>愁</sup>今日<sup>散</sup>、馬頭<sup>初</sup>見<sup>ル</sup>米<sup>囊</sup>花<sup>」</sup>とあるによる。

ハの部

★鳩 杖 ハトヅエ

朝廷より老に賜りし杖のこと。杖の頭に鳩を刺んだもの。後漢書に曰く「民年七十者<sup>ハ</sup>授<sup>ル</sup>之<sup>以</sup>玉<sup>杖</sup>、以<sup>ニ</sup>鳩<sup>爲</sup>飾、欲<sup>シ</sup>老人<sup>如</sup>鳩<sup>不</sup>噉<sup>也</sup>」とある。

★花 笈 ハナイカダ

(1)植物の名のこと。(2)花を折りそへた笈のこと。「廣高師」

★餞 ハナムケ

旅立する人へのおくりものこと。

★花より團子 ハナよりダンゴ

理想よりは現實をとるといふこと。花より實をとるといふ義による。

★埴生之宿 ハニフノヤド

賤しき家のこと。陋屋。「小商」

★弱 府 ハフ

弱者の政治を行ふ所、即ち幕府のこと。「高校」

★法家拂士 ハフカヒツシ

世々祿をうけてゐる者と輔弼の士とのこと。拂は弼に通ず。又法家は支那哲學で、道德よりも法律が政治上

重要なものであると認められた法律學者のこと。管仲・申子・商子・韓非子等は之である。〔廣高師・專檢〕

★法 故 ハフコ

法則、故事のこと。

★馬舞之災 バブノラザワヒ

火災のこと。晉書に「黃平、索紞ニ問ヒテ曰ク、我レ昨夜會中ノ馬舞數十人、馬ニ向ヒテ手ヲ拍ツテ夢ミル、此レ何ノ祥ゾヤト。紞曰ク、馬ハ火ナリ、舞フハ火起ルト爲スナリ、馬ニ向ヒテ手ヲ拍ツハ火ヲ救フ人ナリト。平未ダ歸ラズ而シテ火起ル」とある。

★濱 庇 ハマビサシ

濱邊の家のこと。〔北大・九藥〕

★華 人 ハヤト

薩摩・大隅地方に住んでゐた人民のこと。薩摩華人などいふ。〔關大〕

★爬羅剔抉 ハラテキケツ

人の缺點などを一々あばき出すこと。又隠れたる人材などを探り出すこと。〔長商・小商〕

★祓 ハラヒ

神に祈つて災難・罪障を拂ひのけること。〔廣高師〕

★腹 卷 ハラマキ

(1)はらおびのこと。(2)鑑の一種で腹に巻いて背中で合せるやうにしたもの。〔東高師〕

★波羅密 ハラミツ

煩惱を去りて解脱すること。

★波瀾重疊 ハランチョウヂ

人間生活中に色々のことがらが起伏すること。又ごたごたの多いこと。波は小さなみ、瀾は大なみなり。

★破廉恥 ハレンチ

人としての正道に外れた恥かしい行のこと。破廉恥罪は法律上で盜賊・詐欺・姦通等すべて私心私慾から犯した罪のこと。

★不見齒 ハをミセズ

微笑するのみにて大笑せざること。禮記に「三年未レ見齒」とある。不見齒とは雄辯の條件であるといふ。

★翻雲覆雨 ハンウンフクウ・ホンウンフクウ

人情の反覆定りなき喩。翻は又翻にてもよし。杜甫の貧交行に「翻手作雲覆手雨、紛紛輕薄何須數」

君不見管鮑貧時交、此道今人棄、如土とある。〔陸士〕

★挽 歌 バンカ

死を用ふ歌のこと。

★泛 交 ハンカウ

廣く多くの人と交際すること。〔海欄〕

★反 眼 ハンガン

互ににらみ合ふこと。反目に同じ。〔陸士・東商大〕

★反 間 ハンカン

敵の間者を利用して敵情をさぐり、うらをかくこと。孫子に出づ。

★萬 機 バンキ

天下萬づの政事のこと。〔盛農・秋鏡〕

★輓 近 バンキン

近年、近頃、近世の意である。〔山商〕

★挽 回 バンクワイ

もとへもどすこと。家運挽回などいふ。〔長商〕

★判 官 ハンクワン・ハングワン

(1)裁判官のこと。(2)古の官名。(3)檢非違使の尉の稱。

神に祈つて災難・罪障を拂ひのけること。〔廣高師〕

★腹 卷 ハラマキ

(1)はらおびのこと。(2)鑑の一種で腹に巻いて背中で合せるやうにしたもの。〔東高師〕

★波羅密 ハラミツ

煩惱を去りて解脱すること。

★波瀾重疊 ハランチョウヂ

人間生活中に色々のことがらが起伏すること。又ごたごたの多いこと。波は小さなみ、瀾は大なみなり。

★破廉恥 ハレンチ

人としての正道に外れた恥かしい行のこと。破廉恥罪は法律上で盜賊・詐欺・姦通等すべて私心私慾から犯した罪のこと。

★不見齒 ハをミセズ

微笑するのみにて大笑せざること。禮記に「三年未レ見齒」とある。不見齒とは雄辯の條件であるといふ。

★翻雲覆雨 ハンウンフクウ・ホンウンフクウ

人情の反覆定りなき喩。翻は又翻にてもよし。杜甫の貧交行に「翻手作雲覆手雨、紛紛輕薄何須數」

★飯後鐘 ハンゴのカネ

飯を食せぬ工夫のこと。書言故事に「唐ノ王播、少クシテ孤貧、揚州ノ惠照寺ノ本蘭院ニ食客タリ。僧之ヲ厭ヒ、乃チ飯後ニ鐘ヲ撞ク、播來レバ則チ時ニ後ル。播乃チ詩ヲ留メテ去ル。上堂已ニ了シ各々東西ス、慚愧ス、聞黎飯後ノ鐘ト。後二十四年ニシテ播此ノ邦ニ鎮タリ。來レバ向ノ照詩ハ已ニ碧紗ヲ以テ籠メ護レリ。播因ツテ復タ照詩シテ曰ク、二十年前塵土ノ面、如今始メテ得タリ碧紗ノ籠ムルヲ」とある。

★盤根錯節 バンコンサクセツ

處置するに困難なる事柄のこと。盤根はわだかまつてゐる木の根、錯節はいりくんだ木のふし。後漢書に「不レ遇ニ盤根錯節何以別ニ利器乎」とある。〔陸士・北大・水産・盛農・東美・千醫・高檢・專檢〕

★煩 瑣 ハンサ

こまかくてわづらはしいこと。〔岐農・北工・東北大・富樂〕

★呼 萬歲 ハンサイをサケブ

君主若くは團體又個人を長久なれと祝して呼ぶこと。

春秋に「宋康王酒ヲ飲ム、室中萬歳ヲ呼ブ者アリ、堂上悉ク應ズ」とある。

★萬死一生 バンシイツシヤウ

大危急の裡に生を得ること。史記に曰く「出<sup>ス</sup>萬死<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>顧<sup>ニ</sup>一生<sup>ノ</sup>之計<sup>ト</sup>」と。

★伴食 バンシヨク

職にありて爲す所なきこと。又實力なく無能にして位に列ること。伴食大臣などいふ。「京城醫・盛農」

★萬乘之君 バンジヤウノキミ

天子のこと。孟子に「兵車萬乘ハ、天子ヲ謂フナリ」とある。即ち天子は兵車萬乘を出すべき畿内方千里の地を領するに由る。「女職・早高・小商・東高師・水産」

★反切 ハンセツ

漢字の二字を合して一音とすること。

★晩節 バンセツ

(1)晩年のこと。節は時期なり。(2)晩年の節操のこと。節は又節操の義なり。

★萬朶之花 バンダノハナ

多くの花のこと。あまたの枝の花の義による。「横商」

★範疇 ハンチウ

しなわけ、分類のこと。

★版圖 ハント

國の領土のこと。「慶大」

★般若湯 ハンニヤタウ

僧家で酒のことをいふ。般若とは佛語にて知恵の意なり。東坡志林に「僧家酒ヲ謂<sup>テ</sup>般若湯トナスト。然レバ酒ヲ美賞シテ名ヅケタルニヤ」とある。

★反撥 ハンバツ

反動ではね返す力のこと。

★繁文縟禮 ハンブンジュクレイ

面倒な虚禮といふこと。繁文はわづらはしい文章、縟禮は細かい禮式の義による。繁縟で出ることもある。「神商大・熊工・海欄・北大・秋嶺・海兵・山商」

★反目 ハンモク

互ひにらみ合ふこと。仲の悪いこと。反眼に同じ。

★汎濫 ハンラン

水にあふれること。

★凡例 ハンレイ

大要書きのこと。書中の内容や編纂の大體の筋を述べるはしがきのこと。「東高師」

ヒの部

★最肩 ヒイキ

力を添へて引立てること。依怙最肩などいふ。「長商」

★繆巧 ヒウカウ

たくみなはかりごとのこと。文天祥の詩に「豈有<sup>ニ</sup>仲繆巧<sup>ト</sup>」とある。「陸士」

★悲歌慷慨 ヒカカウガイ

哀れげに歌ひ、といきをつけてなげくこと。史記に「於<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>項王乃<sup>チ</sup>悲歌慷慨、自爲<sup>レ</sup>詩<sup>ト</sup>」とある。

★僻事 ヒガゴト

理にあたらぬこと。あやまり。「廣高師・京意・濱工・仙醫・愛醫大・東醫大・上羣・桐工・東高師・福商」

★僻耳 ヒガミミ

聞きそこないのこと。「廣高師」

★僻目 ヒガメ

ハ・ヒの部

見まぢがひのこと。又すがめのこと。

★貔貅 ヒキウ

猛獸のこと。貔はをす、貅はめす。轉じて精銳なる軍隊に喩ふ。「陸士・海軍・専檢」

★引出物 ヒキアモノ

饗應のとき主人から客への贈物のこと。

★匪躬 ヒキニウ

一身の利害を顧みず、君主の爲めに忠節を盡すこと。致<sup>ス</sup>匪躬<sup>ノ</sup>節<sup>ト</sup>などいふ。匪はあらず。易の「王臣蹇々、匪<sup>ニ</sup>躬<sup>ノ</sup>之故<sup>ト</sup>」に出づ。「廣高師・山商」

★比丘 ヒク

僧侶のこと。轉じて出家した婦人、即ちあまのこと。「陸士・法大」

★卑屈 ヒタツ

心がいやしくいぢけてゐること。又いくぢがないこと。「海軍」

★日暮道遠 ヒクレミチトホシ

人の年已に老いて目的とする前途のなほ遠いのに喩へる。

★**丕業** ヒゲウ

大きな仕事のこと。大事業。偉業。丕は大きいなり。

★**悲劇** ヒゲギ

悲しく哀れな演劇のこと。又社會に於ける悲しむべき出来ごとのこと。

★**非業** ヒゴウ

佛語で正當のむくいでないこと。非業の死などいふ。

★**菲才** ヒサイ

才智の乏しいこと。又自分の才智の謙稱。淺學菲才などいふ。〔慶大・名商〕

★**皮相** ヒサウ

うはべだけを見て是非を定むること。皮相之士。皮相之見などいふ。〔海欄・明大・早大専〕

★**悲壯** ヒサウ

かみしみの中に勇ましいこと。後漢書に「聲節悲壯、聽者莫不三慷慨」とある。

★**悲愴** ヒサウ

かなしくいたましいこと。

★**比周** ヒシウ

人と親しむに、比は私の心を以てかたよること、周はあまねくゆきわたり公平なること。論語に「君子周而不比、小人比而不周」とある。〔海欄〕

★**七首** ヒシユ

鑄のない短刀のこと。あひくち。懐劍。〔東商大〕

★**批准** ヒジエン

臣下より奏上した事柄を、君主が御裁可遊ばされること。又條約文を當事國の主權者が承認すること。〔山商・陸士・臺師〕

★**避暑** ヒシヨ

轉地して暑を避けること。〔女職・女高師〕

★**陳微忱** ヒシンをノボ

ま心を陳べること。謙遜ないひぶりなり。〔陸士〕

★**秕政** ヒセイ

わるい政治、悪政のこと。弊政。秕は穀の實のらざるシヒナ、轉じて惡の義となる。晋書に「軍無秕政」とあり、又晋書に「朝無秕政、人無謗言」とある。

〔早高・高檢〕

★**靡然** ヒセン

なびきしたがふさま。〔海欄・陸士〕

★**鼻祖** ビソ

第一の祖、元祖のこと。人の始めて胎を爲くるときは第一に鼻生ず。故にいふ。

★**窺鼻息** ヒソクをウカガフ

人の機嫌のよしあしを見て態度を決すること。又人の機嫌をとること。鼻息はハナイキ。

★**尾大不掉** ビダイナレバフルハズ

上弱く下強きときは制御する事が出来ぬといふこと。體が小さくして尾が大なるものは自由がきかぬ義による。左傳に「末大必折、尾大不レ掉」とある。〔海兵・盛農・大醫・水産〕

★**只管** ヒタスラ

そればかり、ひたむきにといふこと。一途。〔東高師〕

★**直垂** ヒタダレ

古は庶人の服にして江戸時代には禮服となつたもの。〔高校・金専・陸士・水産・山商・東商大・大分商・満工・高〕

檢

★**筆筭** ヒチリキ

樂器の一種。〔明専〕

★**畢竟** ヒツキヤウ

つまる所はといふこと。つまり。所詮は。〔神商・立命大・大商・高校〕

★**筆削** ヒツサク

書いて本に載せるべきは記し、削るべきは記さないでおくこと。〔高校〕

★**謚如** ヒツジヨ

安かにして靜かなさま。〔高校〕

★**匹儔** ヒツチウ

たぐひ、仲間のこと。〔米工〕

★**筆誅** ヒツチユウ

人の罪事をかき立て、筆で攻撃すること。

★**逼迫** ヒツバク

行きつまること。金まはりがつまること。經濟逼迫などいふ。

★**匹夫之勇** ヒツブノユウ



賤しき知慮のない者の血氣にはゆる小勇のこと。匹夫は身分のひくく知慮のないもの。「神商大・熊醫・海兵・海欄・陸士・盛農・甲南・大女事」

★美的生活 ビテキセイクロツ

美を生命としこれを追求する生活のこと。「廣高師」

★人衆 勝天、天定、亦勝人

ヒトオホキときはテンにカフ、テンサダマリてマタヒトにカフ

人が多くて凶暴の勢の盛んなる時には、天も之を如何ともすることが出来ぬが、天はその凶暴を自然に降して亦人に勝ち、善惡を賞罰するに至るといふこと。史記に「勝天」

★人有不爲也而後可有爲

ヒトナキザるアリて、ノチモツてナサアるベシしてはならぬ事は決してしない者であつてこそ、始めて爲すべきことを必ず爲し遂げるものであるといふこと。「陸士」

★人之過也、各於其黨、觀過斯知仁矣

ヒトノアヤマチャ、オノノソノタウにオイテス

ヤマチをミればコ、にジンをシる

人が道理に背くのは、仁者は常に厚に失し、不仁者は常に薄に失する如く、その黨類によりて異なるものであるから、過失を見れば厚きに失する仁者なることは知れるといふこと。論語に出づ。「東商大・高檢」

★成人之美 ヒトノビをナサ

人の善い事をほめ助けてこれをさせること。「廣高師」

★人一能之己百之

ヒトヒトたびコレをヨクすれば、オノレコレをヒヤクたびす

他人が一度で出来ることでも自分は之を百度するといふこと。中庸に「人一能之己百之、果能之」

★人皆有不忍人之心

ヒトミナヒトにシノビザ人は誰れでも皆、惡を他人に加へるに忍びない心があるといふこと。「鹿農」

★髀肉之歎 ヒニクノタン

無事に月日を過し功名を立てることの出来ないのを嘆

★檜皮膏 ヒハダブキ

檜の皮でふいてある屋根のこと。「女高師・東高師」

★悲憤慷慨 ヒフンカウガイ

激昂して大いになげくこと。

★彌縫 ビボウ

一時を取りつくらふこと。まに合せの處置をすること。

つくるひ縫ふ義による。左傳に「彌縫其闕、而匡救其笑」とある。「水産・大醫・名工」

★肥笨 ヒホン

大男で何の役にも立たぬこと。「慶大」

★微恙 ビヤウ

少しの病のこと。「高後・京醫大」

★評臆 ヒヤウシツ

しなみだめのこと。品評。臆は定めるなり。「明専・大商」

★平仄 ヒヤウソク

つちつまの意に用ひる。平仄が合はぬは、つちつまが合はぬ事なり。元來は漢字の響によつて類別した平韻と仄韻のことなり。即ち漢字には平・上・去・入の四

くこと。三國誌蜀志に曰く「劉備督テ劉表ガ座ニ於テ、起テテ胸ニ至リ、還リテ慨然トシテ涕ヲ流ス。表怪ミテ之ヲ問ヘバ、備答ヘテ曰ク、常時身、鞍ヲ離レズ、髀肉皆消セリ。今久シク騎セズ、髀肉ニ肉生ズ。日月流ルルガ如ク、老将ニ至ラントシテ、功業立タズ。是ヲ以テ悲シムノミト」と。「高校・専檢」

★日就月將 ヒにナリツキにス、む

學業が日に月に進歩すること。詩經に出づ。「盛農・福農」

★誹謗 ヒバウ

そしること。

★未亡人 ビバウジン

寡婦の自稱のこと。左傳に「婦人既ニ寡ニシテ、自ラ未亡人ト稱ス」とあり、婦人は夫死すれば従つて死すべきに未だ死せざる人の意にして、寡婦の謙して自らを稱する語なり。今の人ハ之を他稱として使用す。嚴格に言へば他稱とするは無禮なり。左傳に「丈夫勤勞不レ忘ニ先君、以及ニ嗣君、施及ニ未亡人」とある。

聲あり、平聲は上平・下平に分れ、平韻なり。上・去・入の三聲は、平韻に對して仄韻といふ。漢詩を作るにはこの平仄の規則を必要とす。〔東高師〕

★評壇

是非優劣について批評し論議する社會といふこと。〔廣高師〕

★百揆

政治をとりしめる官吏のこと。書經に出づ。〔普文・東高師・專檢〕

★百尺竿頭進一步

工夫をしつとした上に、更に一工夫をすること。即ち百尺の竿の頭には既に達するも更に一步を進むる義によるなり。傳燈錄には百丈といへり。乘燈譚にて之を百尺に作れるなり。〔小商〕

★百世之師

百代の後までも人の模範となる人のこと。孟子に「聖人百世之師也」とある。〔海兵〕

★百辟

多くの諸侯のこと。辟は君なり。〔東商〕

★行三百里者半於九十里

事をなすに始の易く終りの難き喻。即ち百里の路を行く者は九十里を行つて丁度その半ばの五十里を來たとなすべきであるといふ義による。戰國策に「行三百里者、半於九十里」此言「末路之難」とある。〔小商〕

★氷釋

了解して一點の疑惑をも留めないこと。氷のやうにとける義による。氷解も同じ。〔水産・山商〕

★氷炭不相容

善惡は兩立せぬといふ喻。又忠臣と佞臣とは並び居ることが出来ないといふこと。氷と炭火とは性質正反對なる故決して和合せぬといふ義による。楚辭に「氷、火ヲ見レバ則チ消エ、火、氷ヲ得レバ則チ滅ム。以テ忠佞並ビ處ルベカラザルニ喻フ」とある。

★憑弔之客

古跡などに立寄つて弔ふ人のこと。〔海編〕

★日和

(1)空模様のこと。(2)晴天のこと。(3)事のなり行きのこ

と。形勢。日和見主義などいふ。〔長商〕

★糜爛

ただれること。又事の滅茶滅茶になりしこと。糜は米を粥にすること。爛は肉の形を失ふことなり。

★比倫

ならば、たぐふ。又たぐひ、なま、くらべものこと。倫はたぐひ。比類に同じ。匹儔。〔三農〕

★賞臨

他人が來ることをいふ敬語。又貴人の臨席のこと。賞はかざりなり。かざり來る義による。御光來。御光臨。御來臨。〔仙醫・上黨・東商大・福島商・陸士・海軍・京醫大〕

★鄙吝

いやしくけちであること。〔海編・水産〕

★披瀝

さらけ出すこと。心中をうちあけること。披はひらく、瀝はサラヘルなり。〔熊工・早大專・名工〕

★尾籠

禮を失すること。尾籠の話などいふ。

★披露

公にひろめ發表すること。〔高校・農大〕

★牝鷄之晨

妻が夫の權を奪ひてしやばる喻。書經に「武王曰ク、古人言ヘルアリ。曰ク、牝鷄ハ晨スルコトナシ。牝鷄ノ晨スルハ、惟レ家ノ榮ルナリ。今商王受惟レ婦言ヲ是レ用フ」とある。牝鷄にして晨を告ぐるときは陰陽常に反して、家道衰ふるなり。〔京城醫〕

★貧者一燈

燈明を神佛に供へるに、富者の一萬燈よりも貧者の一燈の方が、真心からすれば功德が大きいといふこと。〔大谷大・眞宗大〕

★擧蹙

顔をしかめ、眉をひそめて憂ふること。〔陸士・山商・北大〕

★擯斥

しりぞけ、のけものにする。排斥。

★効顰

己の醜くきをかへりみみず矢鱈に人のまれをすること。

莊子に「西施（美人の名）胸ヲ病ンテ而シテ其ノ里ニ  
墮ス（顔をしかめること）。其ノ里ノ醜人之ヲ美トシ、  
歸リテ亦胸ヲ捧ゲテ而シテ其ノ里ニ墮ス。其ノ里ノ富  
人ハ之ヲ見テ、堅ク門ヲ閉ジテ而シテ出デズ。食人ハ  
之ヲ見テ、妻子ヲ挈ヘテ而シテ之ヲ去ツテ走ル。彼レ  
墮ヲ美トスルヲ知リテ、而シテ墮ノ美ナル所以ヲ知ラ  
ズ」とある。〔盛農・神商大〕

★彬彬輩出 ヒンビンハイシユツ

さかんに出ること。彬々は文と質とを兼ねそなへて盛  
んなるさま。論語に出づ。〔東商船〕

★稟 賦 ヒンブ

生まれつきといふこと。〔慶大〕

★繽 紛 ヒンブン

亂れ散るさま。落花繽紛などいふ。〔早大專〕

★暋 勉 ヒンメン

精を出して勉むること。暋も勉むるなり。〔女高師・海  
軍〕

★泯 滅 ヒンメツ

ほろびること。〔高校・神商大〕

★紊 亂 ビンラン

みだれること。〔同志〕

フの部

★布 衣 フイ・ホイ

官に仕へて居らぬ者のこと。無位無官の者。平民。雖  
鐵論に「古ハ庶人甞者シテ後、粗布ヲ衣ル。其ノ餘ハ  
即チ麻桑ノミ、故ニ命ジテ布衣ト曰フ」とある。布衣  
之交は貧賤の交のことをいふ。〔專檢・米工？・桐工・  
秋嶺・陸士・名工・京法・神商大・千岡・水産・盛農・海機・  
小商〕

★覆 育 フイタ

おほひそだてること。大切に於て養育すること。フと  
訓むときはオホフ意となり、フタと訓むとクツガヘル  
意となる。

★撫 育 フイタ

可愛がり育てること。

★吹 聽 フイチキウ

人に言ひふらすこと。〔水産・陸士〕

★風雲急 フウウンキフナリ

事件又は問題の起りさうな形勢にあること。急迫した  
さまを風雲急なるに喩へていふなり。

★風雲之會 フウウンノクワイ

明君と賢臣の際會すること。易經に「雲從龍、風從  
虎、聖人作、而萬物覩」とあるに於る。又英雄が時に乘  
じて志を達することをいふ。後漢書に「威能感會風  
雲、奮其智力」とある。

★風 格 フウカク

氣高い人がらのこと。〔東商大〕

★風 紀 フウキ

ならばしをともしまる規則のこと。

★風 教 フウケウ

教へならはすこと。詩經に「風風也、教也、風以勸之、  
教以化之」とある。

★風餐雨虐 フウサンウギヤク

風を食ひ、雨に虐待せられること。又風餐露宿の語あ  
り。〔仙工〕

★風 趣 フウシュ

フの部

★風樹之歎 フウジユノタン

おもむきのあること。〔女高師・神商大〕  
父母死して孝養を盡すことの出来ないなげきのこと。  
韓詩外傳に「樹欲<sup>スレバ</sup>静<sup>カク</sup>、風不<sup>レ</sup>止、子欲<sup>スレバ</sup>養<sup>ハント</sup>、  
親不<sup>レ</sup>待<sup>タ</sup>、往<sup>キテ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>返<sup>ル</sup>、年也<sup>ハ</sup>逝<sup>リ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>追<sup>フ</sup>、親也<sup>ハ</sup>」  
とある。又風木之悲、風木之歎ともいふ。〔慶高師・專  
檢・大醫大・名工・大外語〕

★風 誦 フウシヨウ

聲を發して讀むこと。〔朝大〕

★風聲鶴唳 フウセイカクレイ

風の聲と鶴のなく音のこと。唳は鶴の鳴聲なり。鶴、  
風聲鶴唳とは、おち氣づいて一寸した物音にも驚くこ  
と。〔水産〕

★風 土 フウド

氣候と土地との有様のこと。

★風 丰 フウバウ

ふつくりとしたうるはしい姿のこと。丰は豐滿の意な  
り。〔盛農〕

★風馬牛 フウバギウ

遠く離れて無関係のこと。さかりのつきたる馬牛が牝牡相求めて得ざる程遠く離れた義なり。こゝの風ははなれる意なり。即ち離れた牝牡の馬牛のこと。

★風 靡 フウビ

風が草をなびかせる如くなびき従ふこと。史記に出づ。〔女高師〕

★風來人 フウライジン

何處から来たとも知れぬ人といふこと。風來坊ともいふ。

★風 韻 フウキン

みやびやかなこと。風致。風趣。風雅。〔慶大〕

★敷 衍 フエン

おしひろめること。短縮の對なり。〔長商・山商・盛農・福商・名工・神商大・東亞〕

★不 覺 フカク

覺悟がたしかでないこと。又油断して居てしくじること。〔陸士・東高師・北大・臨教〕

★不恰好 フカツカウ

やうすの悪いこと。〔京城醫〕

★馥 郁 フクイク

香氣の發するさま。〔東協大〕

★負嶠之勢 フグウノイキホヒ

虎が山に依れる勢をいふ。嶠は山曲なり。負嶠は山曲を背にしたること。故に前意となる。

★復 仇 フクキウ

仇討ちすること。復讐。〔女職〕

★覆載之間 フサイノカン

天地の間といふこと。天は萬物をおほひ、地は萬物をのせる故にいふ。即ち禮記に「天之所<sup>スル</sup>覆<sup>スル</sup>地之所<sup>スル</sup>載」とある。〔水産・陸士・小商・三高・東北大・盛農・明専〕

★福 祉 フクシ

さいはい、幸福のこと。〔外語・女高師〕

★輻 輳 フクソウ

物ごとが一所に集ること。車のやが轂に集る義による。戦國策並に漢書に出づ。〔山商〕

★不俱戴天 フグタイテン

兩方一所に此の世に生存せざること。即ち父の讐とは俱に天を戴かざる義による。禮記に「父之讐、不<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>」

★不 堪 フカン

藝にたくみでないこと。〔愛賢大・専檢・京城商〕

★俯 瞰 フカン

高い處から下を見おろすこと。〔陸士・盛農〕

★不 軌 フキ

國家の法を守らざること。軌は法なり、規則なり。故に不軌は規則に従はざることとなる。

★不 諱 フキ

死ぬることをいふ。死は人の諱み避くる能はざる故なり。

★不 羈 フキ

つなぐことが出来ぬこと。不羈奔逸はおさへきれないこと。獨立不羈は他人より制御を受けないことなり。〔東北大〕

★俯仰不愧天地 フギヤウテンチニヘヂズ

心中にやましいことなく、公明正大で天地に恥ぢぬこと。〔陸士・水産・東商〕

★腹 案 フクアン

前以ての考へといふこと。

★覆 轍 フクテツ

失敗といふこと。即ち車のくつがへつた跡の義による。覆轍を躰まらずは前人の失敗に鑑みて失敗せざること。新論に「能<sup>ク</sup>登<sup>リ</sup>阪<sup>ヲ</sup>赴<sup>キ</sup>險<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>覆<sup>キ</sup>轍<sup>之</sup>敗」とある。〔新醫・山商・七高〕

★伏 匿 フクトク

かくれひそむこと。〔名商〕

★備不虞 フグニソナフ

だしぬけの出来事に備へること。左傳に出づ。〔東北大・東商大〕

★復 辟 フクヘキ

再び天子の位にかへすこと。辟は君なり。書經に出づ。〔千醫・京羈・神商大・神宮・東商〕

★伏魔殿 フクマデン

魔の隠れてゐる所のこと。秘密のひそんでゐる怪しい家のこと。魔窟。〔千醫〕

★復 命 フクメイ

命ぜられたことをやり終へてその旨を報告すること。

★服 膺 フクヨウ

心にとめて忘れないこと。膺は胸につけ肌身を離さぬ  
たて、心に留めて片時も忘れないこと。拳拳服膺を見  
よ。〔名釋〕

★附 會 フクワイ

正理を知らずこじつけること。牽強附會を見よ。〔高  
校〕

★負郭田 フクワクノデン

城に近い所にあつてよく肥えた田のこと。負は背なり、  
郭は城なり。〔臨教・外語・東高師〕

★浮華放縱 フクワハウシヨウ

うはべをかざつてしまりがなく、わがまゝ勝手なるこ  
と。

★幅 員 フクキン

ひろさのこと。幅は面積、員は周圍なり。〔鹿農〕

★誣 言 フクゲン

失當のいひかた。〔神宮〕

★不 辜 フクコ

罪のないこと。無辜に同じ。孟子に出づ。

★無 性 フクシャウ

怠つて物事をなほざりにすること。不精も同じ。〔海  
兵〕

★覆 醬 フシヤウ

著書の世に行はれずして反古となること。即ち醬油の  
瓶にフタをして用ひざる義による。

★不 惜 身 命 フシヤクシンミヤウ

自分の生命を惜まず盡力すること。不<sub>レ</sub>惜<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>命<sub>一</sub>と讀  
めば直に了解出来る。〔専檢〕

★部 署 フシヨ

やくはりのこと。やくはりを定めること。〔海兵〕

★扶 植 フシヨク

うゑつけること。勢力を扶植すなどいふ。〔陸士〕

★普 請 フシン

建築又は土木工事のこと。同志の人にあまれく寄附を  
請ふて佛寺を建築する義から轉ず。〔高校・七高・東高  
師〕

★夫 人 フジン

人の妻を呼ぶ尊稱。即ち貴人の配<sub>レ</sub>の義による。禮記

★扶 桑 フサウ

もと東海中に在りし神木の名のこと。東方にありし故  
に日本の異稱となる。

★斧鑿之痕 フサクノコン

手入れをしたあとといふこと。斧はをの、鑿はのみな  
り。をのとのみあとの義による。又詩文などを作る  
に徒に辭句に修飾を加へること。宣和書譜に「如<sub>レ</sub>良工  
無<sub>レ</sub>斧鑿之痕<sub>一</sub>」とある。〔女高師・海軍・産商〕

★俘 囚 フシウ

とりこのこと。捕虜。〔海兵〕

★武士は食はねど高楊子

武士の氣位を形容した語なり。即ち武士は食ふものが  
なく、一物をも口にしてゐなくても恰も満腹したやう  
に小楊子を使つて、少しもひもじい様子を見せないと  
いふこと。〔鹿農〕

★父 執 フシツ

父の友人のこと。禮記に出づ。父と同じ志を執る人の  
意による。〔廣高師〕

★天子ノ妃ヲ后トイヒ、諸侯ニハ夫人トイヒ、大夫  
ニハ孀人トイヒ、士ニハ婦人トイヒ、庶人ニハ妻トイ  
フ」とあり、註に「妃ハ配ナリ、后ハ後ナリ、夫ハ扶ナ  
リ、孀ハ屬ナリ、婦ハ服ナリ、妻ハ齊ナリ」とある。

★負薪之憂 フシンノウレヒ

自分の病氣を豫通していふことば。薪を負ふた疲れが  
出て病む義による。禮記に出づ。

★風 情 フゼイ

おもむき、様子といふこと。〔高校・北大〕

★不 世 出 フセイシュツ

世に稀に出づるものゝこと。因て不世出の才とは才智  
勇略等一世に卓絶したる者のこと。史記に出づ。〔盛  
農・水産・北大〕

★不 肖 フセウ

愚かな者といふこと。肖は似なり。善に似ざる意で人  
に及ばざること。一説に不肖は父に似ざる義。又一解  
に人は天の生ずる所なり、故に天に似ざるを不肖とい  
ふとある。中庸に「子曰、道之不<sub>レ</sub>明也、我知<sub>レ</sub>之矣、  
賢者過<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>肖者不<sub>レ</sub>及也」とある。〔愛賢大〕

★伏 勢 フセセイ

隠れてゐて敵を襲ふ軍隊のこと。伏兵。〔陸士・北大〕

★符 節 フセツ

割り符のこと。竹を以て作り、これを兩分し、その一片を與へて以て他日の驗とす。若し合ニ符節一などいふ。

★伏 屋 フセヤ

小さい家のこと。賤が屋。〔仙工・早大・大專〕

★撫 然 フセン

ぼんやりした失意のさま。

★膚淺陳套 フセンチンタウ

考へが浅くてふるいこと。膚淺は淺薄なること。〔水産〕

★譜代大名 フダイダイミヤウ

代々引き續いて一君家に事へて來た大名のこと。反對は外様大名なり。〔東北大・神商大〕

★附 託 フタク

まかせること。委員附託などいふ。〔名工・桐工・陸士〕

★武 斷 フダン

武力を以て物を決斷し人を制すること。

★扶 持 フチ

助けもつこと。轉じて米で給與する祿のこと。禮記・

★臨 淵羨 魚不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>退<sub>一</sub>而<sub>レ</sub>結<sub>二</sub>網<sub>一</sub>

フチにノゾんでウヲをウラヤむよりシリゾいてアミをムスぶにシカズ

★物 故 フツコ

徒に幸福を望むよりは退いて幸福を得べき方法を講じた方がよいといふこと。漢書に出づ。〔熊工〕

★物 色 フツシヨク

人の死のこと。其の服用せし所のもの皆すでに故といふ義なり。〔廣高師・福商〕

★物 色 フツシヨク

さがし求めること。〔廣高師・東北大・水産〕

★拂 底 フツテイ

物品のなくなるること。底をはらふ義による。〔鹿農・海欄〕

★拂 亂 フツラン

そむきみだすこと。〔北大・廣高師〕

★不 逞 フテイ

心に不満をもつ者のこと。逞は快なり。即ち心に快からざる不平をもつ人のこととなる。〔水産・女高師〕

★普天之下率土之濱 フテンノシタツドノヒン

陸地のある限りの天の下といふこと。昔は偏なり、率は偏ふ、濱は涯なり。故に天の偏く覆ふ所の下、地の長く涯に續く限りといふ義なり。詩經に「普天之下、莫<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>王土<sub>一</sub>、率土之濱莫<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>王臣<sub>一</sub>」とある。〔海欄・米工・專檢〕

★浮 屠 フト

佛のこと。又轉じて僧・寺のこと。浮屠も同じ。〔陸士〕

★埠 頭 フトウ

はとばのこと。〔鹿農・臺農〕

★不 如意 フニヨイ

自分の思ふ通にならざること。晉書に「天下不如意者、恒<sub>レ</sub>十居<sub>二</sub>七八<sub>一</sub>」とある。

★刻<sub>レ</sub>舟<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>劍 フネにコクしてケンをモトむ

事物に拘泥して融通が利かぬこと。呂氏春秋に「楚人

★不 文 律 フブンリツ

文書に記さない法律のこと。

★浮 薄 フハク

心がけがかるく、しくしてしつかりせぬこと。〔名工・廣高師〕

★普 遍 フヘン

あまねく行きわたること。普遍妥當はあまねく行きわたつて無理の生じないこと。〔北大〕

★不 偏 不 黨 フヘンフタウ

どちらにも味方せぬこと。中立。〔米工〕

★撫 摩 フマ

なでさすること。〔山商・早高・海欄〕

★不 毛 フマウ

地味が悪くて物の出來ないこと。史記に出づ。〔鹿農・

陸士

★文 月 フミツキ

陰曆七月のこと。「廣高師・小商」

★不夜城 フヤシヤウ

燈光畫を欺くが如き繁華なる市街のこと。夜も晝のやうに明るい城の義による。漢書に出づ。

★婦 容 フヨウ

女の身だしなみのこと。禮記に「婦人先<sup>ツ</sup>嫁三月<sup>フルニ</sup>、教<sup>ナス</sup>以<sup>テ</sup>婦<sup>ト</sup>徳、婦<sup>ト</sup>言、婦<sup>ト</sup>容、婦<sup>ト</sup>功」とあり、この四つを女子の四行といふ。四行に就いては曹大家の女誡に曰く「夫<sup>レ</sup>婦<sup>ト</sup>徳ト云フハ、必ズレモ才<sup>ト</sup>剛<sup>ト</sup>絶<sup>ト</sup>異<sup>ト</sup>ナルニアラザルナリ。婦<sup>ト</sup>言ハ、必ズシモ辯<sup>ト</sup>口<sup>ト</sup>利<sup>ト</sup>辭<sup>ト</sup>ナルニアラザルナリ。婦<sup>ト</sup>容ハ、必ズシモ顔<sup>ト</sup>色<sup>ト</sup>美<sup>ト</sup>麗<sup>ト</sup>ナルニアラザルナリ。婦<sup>ト</sup>功ハ、必ズシモ技<sup>ト</sup>巧<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>ニ過<sup>ト</sup>グルニアラザルナリ。幽<sup>ト</sup>間<sup>ト</sup>貞<sup>ト</sup>靜<sup>ト</sup>ニシテ節<sup>ト</sup>ヲ守<sup>リ</sup>テ弊<sup>ト</sup>齊<sup>ト</sup>、己<sup>ト</sup>ヲ行<sup>フ</sup>ニ恥<sup>アリ</sup>、動<sup>ト</sup>靜<sup>ト</sup>法<sup>ト</sup>アル、是<sup>ヲ</sup>婦<sup>ト</sup>徳ト云フ。辭<sup>ヲ</sup>擇<sup>ン</sup>テ説<sup>キ</sup>、惡<sup>ト</sup>語<sup>ヲ</sup>言<sup>ハ</sup>ズ、時<sup>アリ</sup>テ然<sup>ル</sup>後<sup>ニ</sup>言<sup>ヒ</sup>、人<sup>ニ</sup>厭<sup>ハ</sup>レザル、是<sup>ヲ</sup>婦<sup>ト</sup>言ト云フ。塵<sup>ヲ</sup>穢<sup>シ</sup>盟<sup>ヲ</sup>浣<sup>シ</sup>服<sup>ヲ</sup>鮮<sup>潔</sup>、沐浴<sup>時</sup>ヲ以<sup>テ</sup>シ、身<sup>垢</sup>辱<sup>セ</sup>ズ、是<sup>ヲ</sup>婦<sup>ト</sup>容ト云フ。心<sup>ヲ</sup>專<sup>ニ</sup>シテ内<sup>助</sup>ヲナ

★浮 浪 フラウ

シ、戲<sup>笑</sup>ヲ好<sup>マ</sup>ズ、酒<sup>食</sup>潔<sup>齊</sup>ニシ、以<sup>テ</sup>賓<sup>客</sup>ヲ奉<sup>ズ</sup>、是<sup>ヲ</sup>婦<sup>ト</sup>功ト云フ。此ノ四者ハ女人ノ大<sup>徳</sup>ニシテ、之<sup>ヲ</sup>乏<sup>ク</sup>ス可<sup>カ</sup>ラザルナリ。然<sup>レ</sup>ドモ之<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>スコト易<sup>シ</sup>、惟<sup>ニ</sup>、有<sup>心</sup>ニ在<sup>ル</sup>ノミ」と。「女高師」

★不 埒 フラチ

一定の住所・職業なく、ぶら／＼とさまよひ暮すこと。又浮浪人のことをいふ。放浪の旅。流浪の旅。「熊野」

★武陵桃源 フリヨウタウゲン

世間と離れた別天地のこと。陶潜の桃花源記に「晋ノ太元中、武陵ノ人、魚<sup>ヲ</sup>捕<sup>ヘ</sup>テ業<sup>ト</sup>トナス。溪<sup>ニ</sup>縁<sup>リ</sup>テ行<sup>ク</sup>、忽<sup>チ</sup>桃<sup>花</sup>林<sup>ニ</sup>達<sup>フ</sup>。林<sup>盡</sup>キテ、水<sup>源</sup>ニ一<sup>山</sup>ヲ得<sup>ル</sup>。小<sup>口</sup>アリ、口<sup>ヨリ</sup>入<sup>ル</sup>。行<sup>ク</sup>コト數<sup>十</sup>歩、豁然<sup>ト</sup>シテ開<sup>期</sup>ナリ。其<sup>ノ</sup>間、男<sup>女</sup>怡<sup>然</sup>トシテ自<sup>ラ</sup>樂<sup>シ</sup>ム。漁<sup>人</sup>見<sup>テ</sup>大<sup>ニ</sup>驚<sup>ク</sup>。自<sup>ラ</sup>云<sup>フ</sup>、先<sup>世</sup>秦<sup>ノ</sup>亂<sup>ヲ</sup>避<sup>ケ</sup>、此<sup>ノ</sup>絕<sup>境</sup>ニ來<sup>ル</sup>。問<sup>フ</sup>、今<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>ノ世<sup>ゾ</sup>ト。乃<sup>チ</sup>漢<sup>アル</sup>ヲ知<sup>ラ</sup>ズ、漁<sup>人</sup>辭<sup>シ</sup>去<sup>リ</sup>、太<sup>守</sup>ニ詣<sup>リ</sup>テ説<sup>ク</sup>。即<sup>チ</sup>人<sup>ヲ</sup>遣

★紛 糾 フンキウ

みだれもつれること。「盛農・桐工・陸士」

★文 化 フンクワ

學問が進み世の中が開けること。

★文 藝 フンゲイ

(1)學問と技藝とのこと。(2)文學のこと。「大谷・同志」

★刎頸之交 フンケイノマジハリ

生死を共にし、たとへ頸をはねられるも悔みない堅き交のこと。史記に「卒<sup>ニ</sup>相<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>驢<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>刎<sup>ニ</sup>頸<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>交<sup>ト</sup>」とある。「高檢・專檢・水産2・海嶽・農大・米工」

★文 教 フンケウ

學藝のをしへのこと。又文治を以て國民を導くこと。文教の府などいふ。「水産・女高師」

★文 獻 フンケン

参考とすべき確な書物のこと。獻は獻の俗字なり。

★粉骨碎身 フンコツサイシン

非常に苦辛すること。骨を粉にし身を碎く義による。禪林語彙に「粉<sup>骨</sup>碎<sup>身</sup>、難<sup>レ</sup>報<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>徳<sup>ト</sup>」とある。

★文藻豊贍 フンサウホウセン

★温<sup>ネ</sup>故<sup>コ</sup>知<sup>チ</sup>新<sup>シン</sup> フルキをタツれてアタラシキをシる

★振 舞 フルマヒ

(1)行のこと。行爲。舉動。(2)もてなしのこと。馳走。饗應。「女高師」

★無 聊 プレウ・ムレウ

たのしみがなくさびしいこと。退屈。「京法・山商・盛農・醫專・東商大・東北大・名商」

★賦 斂 プレン

租税を賦課して取立てること。「山商・慶大」

★不 惑 フワク

四十歳のこと。論語に「四十<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>惑<sup>ハ</sup>」とある。「富薬」

★附和雷同 フワライドウ

わけもなく、かる／＼しく他人の説に賛成すること。「水産・海兵・慶大」

★文 運 ブンウン

才明の氣運のこと。

文才のゆたかなこと。文藻富麗とも言ふ。瞻は裕なり。

〔廣高師〕

★文質彬彬 プンシツホンビン

はでとちみとがほどよいこと。文はハデ、質はヂミ、彬彬は物の適當に相雜ること。論語に「質勝レ文則野、文勝レ質則史、文質彬彬、然後君子」とある。〔明専・慶大2〕

★粉飾 フンシヨク

うはべを飾ること。

★分析 プンセキ

わけて原成分にもどすこと。〔長商〕

★聞達 プンタツ

名譽がたかまり立身出世すること。〔米工・桐工・陸士・高松商〕

★文恬武嬉 プンテンブキ

世の中が太平にて文武の官吏が安に樂みてゐること。恬は安なり。嬉は樂なり。韓愈の文に「相臣將臣、文恬武嬉」とある。〔商船〕

★奮闘 フントウ

ふるひたゝかふこと。〔専檢・名工〕

★噴飯 フンパン

吹き出して笑ふこと。瓊言に「不レ覺失笑、噴レ飯滿レ案」とある。〔海欄・九樂〕

★文物 プンブツ

文明を進歩せしめる物のこと。〔海軍〕

★芬芬 フンブン

香りよきさま。〔小商〕

★分別 フンベツ

道理をわきまへること。又かんがへのこと。〔水農〕

★墳墓之地 フンボノチ

(1)はかばのこと。(2)故郷のこと。即ち先祖の墳墓のある地の義による。〔和商〕

★粉本 フンボン

繪の下書のこと。圖書寶鑑に「古人畫稿、謂二畫之粉本、前輩多寶之」とある。〔陸士・東美・高岡商〕

★分野 プンヤ

區わけのこと。昔、支那全土を星のやどりの二十八宿により區別したる稱である。政治的分野などいふ。

★雰圍氣 フンキキ

まわりの空氣といふこと。地球や他の天體をとりまいてゐる氣體の義による。〔専檢〕

フの部

★乘弊 ヘイイ・イをとる

人の常に守り行くべき道、即ち仁・義・禮・智・信を固くとり守ること。弊は常即ち五常の道をいふ。乗はとる。詩經に出づ。〔水産〕

★陸下 ヘイカ

人臣が天子を稱する辭のこと。この稱は秦の始皇帝の時より始まる。而して陸は堂にのぼるキザハシなり。群臣、天子に上奏するにはこのキザハシの下に在る者と呼ばれて之に言ひ、由りて陸に達する意によるなり。史記に「今陸下與三番兵、誅三殘賊、平三定天下」とある。

★弊害 ヘイガイ

害となるわるいこと。〔神商大〕

★嬖幸 ヘイカウ

フ・への部

★兵革 ヘイカク

君主の寵愛のこと。又君主の寵愛を受ける者のこと。〔陸士〕

★徹甲凋兵 ヘイカフテウヘイ

戦の道具のこと。轉じて戦争のこと。詩經に「兵革不レ息」とある。〔海欄2・水産・上置・京法・長商〕

★平居 ヘイキヨ

弊れた體と疲れた兵卒のこと。〔専檢〕

★屏居 ヘイキヨ

世を退きかくれること。隱居。〔商船〕

★睥睨 ヘイゲイ

ながしけににらむこと。俾倪に作るも同じ。史記に「睥睨更久立」とある。〔陸士・神宮・慶大・北大・専檢〕

★丙午丁未之歲 ハイゴテイビノトシ

ヒノエウマの年とヒノトヒツジの年とは禍災多しとして忌むこと。我が國にても迷信により丙午の年に生れた者を嫌ふ者がある。容齋五筆に「丙午丁未之歲、中



國遇<sup>レ</sup>之<sup>ハ</sup>、輒<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>二變故<sup>一</sup>非<sup>レ</sup>禍生<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>内<sup>一</sup>、則<sup>チ</sup>夷狄<sup>ハ</sup>外侮<sup>ス</sup>、總<sup>テ</sup>而<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ハ</sup>、大抵<sup>ニ</sup>丁未<sup>ノ</sup>災<sup>ハ</sup>、又<sup>ニ</sup>慘<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>丙午<sup>一</sup>、昭昭<sup>ト</sup>天象<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>於<sup>レ</sup>運行<sup>ニ</sup>、非<sup>レ</sup>人力<sup>ノ</sup>之所<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>爲<sup>ス</sup>也<sup>一</sup>とある。〔水産〕

★弊 帚 <sup>ヘイサウ</sup>

我が身の程を知らずしてうぬぼれる喩。弊帚はやぶれたるハウキなり。文選に「家ニヤブレタル帚アリ、自ラ以テ寶重トナス者、乃チ千金ニ比ス。斯レ自ラ見ザルノ愚ナリ」とある。

★弊 政 <sup>ヘイセイ</sup>

悪い政治のこと。稅政。〔高校〕

★兵 燹 <sup>ヘイセン</sup>

兵火即ち戦争によつて生ずる火事のこと。宋史に出づ。〔高校・女高師〕

★屏 息 <sup>ヘイツク</sup>

息をこらして恐れ謹しむさま。屏は蔽なり。論語に「屏<sup>レ</sup>氣以<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>息者<sup>一</sup>」とある。〔山商〕

★米 年 <sup>メイネン</sup>

八十八歳のこと。米の字を分解すれば八十八となる故にいふ。

★兵馬倥傯 <sup>ヘイバコウソウ</sup>

戦争の爲に忙しいこと。日本外史に出づ。〔臨教・九〕

★兵貴神速 <sup>ヘイキシンソク</sup>

兵を用ふるは極めて速きをよしとするといふこと。魏志に出づ。

★兵務精不務多 <sup>ヘイブシヨクフタ</sup>

軍兵は精銳なることをつとめて、多數なることをつとめないといふこと。即ち数は少くとも精銳の兵を欲するなり。〔外語〕

★弊 風 <sup>ヘイフウ</sup>

悪い風俗のこと。〔女高師〕

★平 復 <sup>ヘイブク</sup>

病氣の全快すること。韓詩外傳に「平復<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>常<sup>一</sup>」とある。

★標 語 <sup>ヘウゴ</sup>

短い語句で要點をいひ表はし、めぐるしとなる語のこと。〔神宮・熊鷹〕

★眇 忽 <sup>メイコツ</sup>

極めて小さい数のこと。忽は小数の名なり。〔熊鷹〕

★飄 忽 <sup>ヘウコツ</sup>

急なさま。たちまち。〔小商〕

★描 寫 <sup>ヘウシヤ</sup>

畫きうつすこと。又似せて畫くこと。〔東高師〕

★廟 社 <sup>ヘウシヤ</sup>

宗廟と社稷のこと。〔海國〕

★廟 食 <sup>ヘウシロク</sup>

廟に祭られること。蘇軾の文に「廟<sup>ニ</sup>食<sup>ス</sup>百世<sup>一</sup>」とある。

★眇 然 <sup>メイゼン</sup>

小さいさま。〔陸士〕

★剽 竊 <sup>ヘウセツ</sup>

人の詩や文を盗みとつて己の作とすること。〔水産・海兵・東協大〕

★飄 然 <sup>ヘウゼン</sup>

さまよふさま。〔龍大〕

★廟 堂 <sup>ヘウダウ</sup>

祖先の靈を祀つたみやのこと。轉じて朝廷のこと。即ち昔、政治を行ふ前には宗廟で祖先の靈に告げ、後明堂で群臣に諮りし故による。

★漂 蕩 <sup>ヘウダウ</sup>

所さだめずさまよふこと。水にただよふ義よりなる。〔慶大〕

★剽 盜 <sup>ヘウタウ</sup>

おびやかし取ること。おどして取ること。〔山商〕

★瓢 箪 餘 <sup>ヘウタンナマツ</sup>

するく脱けて押へどころのないこと。〔同志〕

★標 榜 <sup>ヘウベウ</sup>

主義主張又は立場などを表はし識せること。榜はタナフダなり。史記に出づ。〔米工・名工・明専〕

★豹 死 留 皮 人 死 留 名 <sup>ヘウシヨウヒトシシテナトドム</sup>

豹でも死んで美しい皮をのこすのであるから、人はなほ更美名をのこすべきであるといふこと。〔東商大〕

★飄 飄 <sup>ヘウヘウ</sup>

ひるがへるさま。風に吹かれて軽くあがるさま。ひらく。〔盛農〕

★縹 緲 <sup>ヘウベウ</sup>

遠くかすかに見えるさま。縹緲に作るも同じ。〔鳥農〕

★渺 渺 ムウベウ  
廣く遙かなさま。

★豹 變 ヘウヘン

其惡を改めて善い方へ大いに變ること。改善。惡い意味に用ひるは不可なり。易經に「君子豹變」とある。

〔神宮2・鹿農2・靈北師〕

★森 漫 ムウマン

水がはてもなく廣いさま。〔水農〕

★辟 易 ヘキエキ

驚きおそれたじろぐこと。史記に出づ。〔國醫・金工・上置〕

★碧 潭 ヘキタン

あを色をしたふちのこと。〔山商・高校〕

★劈 頭 ヘキトウ

まつさまといふこと。〔山商〕

★霹 靂 ヘキレキ

雷が急激にはげしく鳴ること。青天の霹靂などいふ。

★別 業 マツゲウ

別荘のこと。〔高松商〕

★瞥 見 ムツケン

ちらと見ること。

★蔑 視 ムツシ

見下げること。輕視。

★俛 焉 ムンエン

勤勞するさま。俛は勉に同じ。禮記に出づ。〔慶大・京

城醫〕

★扁 額 ヘンガク

家にかける掛け額のこと。

★便 宜 ムンギ

都合がよいこと。〔金業〕

★偏 狹 ヘンケフ

心がかたよつて狭いこと。〔大商・女高師〕

★邊 境 ヘンキヤウ

くにさかへのこと。邊鄙なところ。邊疆、邊陲も同じ。

★偏 見 ヘンケン

かたよりの意見のこと。〔金工〕

★片言隻辭 ヘンゲンセキジ

一言半句のこと。

★駢 死 ヘンシ・ヘイシ

首を並べて死ぬること。この場合ヘイシと讀む方がよし。〔京法・専檢〕

★扁 舟 ヘンシウ

小舟のこと。史記に出づ。

★篇 什 ペンジフ

詩歌又は書物のこと。詩經に出づ。〔山商〕

★扁 鵲 ヘンジヤク

戦國の世の名醫の名なり。

★駢 植 ヘンシヨク

ならびたつこと。併立。〔陸士〕

★辯 舌 ペンゼツ

ものいひのこと。

★變 遷 ヘンセン

うつりかはりのこと。〔米工〕

★鞭 撻 ペンダツ

むちうちをげますこと。鞭笞。晋書に出づ。〔長商〕

★便 殿 ペンテン

へ の 部

へ の 部

天皇陛下の休息せらるゝ所のこと。漢書に出づ。

★筵 豆 ヘントウ

祭肉を盛る器のこと。筵は竹にて作り、口に藤の條あり、形は豆の如く四升位入るもの。豆は木にて作れる器なり。

★邊 土粟散 ヘンドソクサン

小さい國のこと。

★偏 頗 ヘンパ

中正公平にあらずかたよること。偏跛も同じ。〔水産〕

★偏 旁 ヘンバウ

文字の偏と旁りのこと。〔商船〕

★翻 翻 ヘンバン

鳥又は胡蝶などのひるがへり飛ぶさま。

★修 飾邊幅 ムシウヘン

外貌を修飾すること。後漢書に「天下雖維未定、公孫

不吐哺、走迎國士、與圖成敗、反修飾邊幅、

如三個人形」とある。〔臨教・仙醫・陸士・熊工・高校・專

檢・國大〕

★拊 舞 ムンブ

二五九

手をうつて喜ぶこと。拵も同じ。〔高校〕

★便 辟 ベンヘキ

人の意を迎へて媚び諂ふこと。便は人の欲する所に順ふこと。辟は人の惡むところを避ける義なり。書經に「無レ以ニ巧言令色、傾辟傾媚」とある。〔長商〕

★返 璧 ヘンベキ

人より贈られし物を受けずして返すこと。

★便 蒙 ベンモウ

初學者がたよりよい書物のこと。〔大商〕

★辨 理 ベンリ

能く事を處分すること。辨は判別なり、理は處理なり。

★通路之客 ヘンロソキヤク

祈願のため道中食を乞ひながら四國八十八ヶ所の靈所を巡り行く者のこと。〔東商大〕

ホの部

★甫 ホ

はじめのこと。始に同じ。年甫は年の始のこと。漢書に「甫從博士爲三刺史」とある。

★哺 ホ

今の午後四時のこと。申の刻。哺はくれる義なり。〔京城醫・米工〕

★布 衣 ホイ・フイ

官に仕へて居らぬ者のこと。無位無官の者。平民。フイを見よ。〔小商・海欄・盛農・水産〕

★蓬 蒿 ホウカウ

よもぎなどの草のしげみのこと。〔名高・高校〕

★奉加帳 ホウガチャウ

神佛へ寄進の金品の額、並に人名等を書き入れる帳面のこと。寄進に加へ奉る義による。〔東高師〕

★蜂 起 ホウキ

群がり起ること。蜂の巢をつゝいた時、蜂が群り起るが如き意による。蟻起も同じ。蟻は蜂の古字なり。史記に「楚蜂起之將皆爭附君」とある。〔秋嶺〕

★鳳 閣 ホウケツ

宮城の御門のこと。銅製の鳳凰を飾りてあるによる。〔京法・農大〕

★奉 公 ホウコウ

國家の爲めに力を盡すこと。後漢書に「憂國奉公」とある。

★蓬戸甕牖 ホウコヲウイウ

貧者の家の形容。蓬戸は蓬を編みて作った戸、甕牖はこはれた甕の口を竈にしたる義なり。

★眸 子 ホウシ

ひとみのこと。眸はひとみなり。明眸皓齒などいふ。〔和商〕

★封豕長蛇 ホウシチャウダ

慾深き惡者のこと。封は大なり、豕は豚のこと、ぶたなり。大きなもの、長いへびも共に物を貪り食ふなり。左傳に「昔仍氏、女アリ。后嬖之レヲ娶ル。伯封ヲ生ズ。貪婪ニシテ厭クナシ。之ヲ封豕ト謂フ。又越ノ吳ヲ伐チシ時、申包胥、秦ニ往キ、師ニ乞フテ曰ク「吳爲ニ封豕長蛇、蠶食上國」とある。

★鳳 雛 ホウスウ

少年の優れた者のこと。又世に知られぬ英雄のこと。ほうわらのひなの義による。伏龍鳳雛などいふ。

★篷 窓 ホウソウ

竹・菅又は茅でふいた船のまどのこと。〔神商大〕

★奉 體 ホウタイ

謹みて身に行ふこと。聖旨を奉體す。〔海軍〕

★朋黨比周 ホウダウヒシウ

仲間が相結んでかたより、黨外の者を排斥して惡行をなすこと。朋黨は仲間、比周はへつらひ交ることなり。〔海欄〕

★鋒 鏑 ホウテキ

ほこさきとやじりのこと。〔外語〕

★朋 輩 ホウバイ

身分年齢の同じくらゐな友達のこと、同輩。

★捧腹絶倒 ホウフクゼツタウ

大いに笑ふさま。抱腹に書くは誤りなり。両手で腹をかへて笑ひ倒れる義による。志記に「捧腹大笑」とある。〔山商・名工〕

★賀 賀 ホウボウ

頭を垂れ氣を喪ふさま。目のかすんださま。〔大外・鹿農〕

★奉養所爲 ホウヤウシヨイ

一日費す所と爲す所と相等しからざるを嘆ずること。奉養は養を奉る義で父母家族を養ふこと、所爲は自分の爲したる所なり。事類全書に「范文正公仲淹嘗テ自ラ言フテ曰ク、吾レ毎夜寢ニ就キ一日ノ飲食奉養ノ費ト、晝間爲ス所ノ事トヲ評ルヲ爲スニ、若シ相稱ヘバ即チ野睡熟寢シ、復タ愧耻ナシ。苟クモ然ラザレバ、終夜枕ニ安ズル能ハズ」とある。

★豊約

ホウヤク 少たかなるとつづまやかなると。貧富のこと。〔女高師〕

★封祿

ホウロク ふち、ろくのこと。奉祿も同じ。奉は俸なり。〔鹿農〕

★鳳凰

ホウワウ 聖人が天子の位にあれば之に應じてあらはれるといふ瑞鳥のこと。格物論に「鳳ハ瑞應ノ鳥ナリ。太平ノ世ニハ則チ見ハル。鶏頭、蛇頭、燕領、龜背、魚尾ニシテ、五彩ノ色アリ。高サ六尺許リ、梧桐ニアラザレバ栖マズ、竹實ニアラザレバ食ハズ、醴泉ニアラザレバ飲マズ。凡ソ栖止スル所、衆禽必ラズ之ニ隨ヒテ集マ

ル。故ニ羽蟲三百有六十ニシテ、鳳凰之ガ長タリ」とある。鳳は雄をいひ、凰は雌なり。〔東高師〕

★鳳鳴朝陽

ホウテウヤウニナク 天下太平のめでたい瑞兆のこと。即ちほうわらが朝陽をあびて東の山になく義による。

★墨客

ボクカク 書畫をかく人のこと。〔海軍〕

★木強

ボクキヤウ ことつ／＼してゐること。柔和でないこと。かたいぢ。史記に出づ。〔山商・女高師・盛農〕

★保管

ボクワン 或條件又は約束で他人のものを預り保存すること。保管管理の略なり。〔鹿農〕

★木辰

ボクゲキ 木で造つたはきものこと。下駄。

★墨守

ボクシユ 固く自説を守ること。〔墨翟善守城〕より出づ。因執。〔東北大〕

★牧豎

ボクジュ 飼馬の者

★ト筮

ボクゼイ 牧場にて牛馬を養ふ子供のこと。牧童。〔専檢〕  
うらなひのこと。龜をトと爲し、メドギを筮とす。龜の甲を焼いて占ふと、めどぎを以て占ふとの義による。禮記に出づ。

★北堂

ホクダウ 母の稱なり。詩經に「爛ンソ設草ヲ得テ、言ニ之レラ背ニ樹エン」とあり、詩傳に「設草ハ人ヲシテ愛ヲ忘レシム、背ハ北堂ナリ」とある。設は堂なり。故に堂ともいふ。母堂。〔海鏡〕

★木鐸

ボクダク 世を指導する學者のこと。社會の木鐸の部で詳しく説明す。参照せよ。

★木訥

ボクトク 人のありのまゝで飾り氣のないこと。論語に「剛毅木訥近レ仁」とある。

★北邙之塵

ホクベウノチリ 人死して墓場の塵となるといふこと。邙山は洛陽の北にあり、故に北邙といひ、漢以來墳墓の地として名高

し。人は死してこの北邙の塵土に化するといふ義なり。北邙一片塵ともいふ。劉廷芝の文に「百年同謝西山日、千秋萬古北邙之塵」とある。

★牧民官

ボクミンクワン 人民を治める官のこと。縣知事の如きもの。管子に「凡牧民者欲ニ民之正也」とある。〔北大〕

★北面

ホクメン 君に對する臣の稱。臣として事へること。弟子として仕へること。又我國にては院の御所を守護した武士のこと。君臣又は師弟相見へるには、君師は南に向ひ、臣弟は北に向いて坐する故にいふ。史記に出づ。〔陸士・福商・東高師〕

★反故

ボゴ・ホグ 不用になつた紙のこと。新の反對でふるい、ふるきに反へつた紙の義なり。又凡て物事がむだ、不用になることをいふ。〔長商・陸士〕

★輔車相依

ホシヤアヒヨル 互に助け合ふこと。輔は車輪の兩側にある狹木、車は物を載せるものなり。互に相待つて用を爲すによる。

左傳に出づ。注に「輔ハ頰輔、車ハ牙車ナリ」とあり。又呂覽に「車依レ輔、輔依レ車」とある。唇齒輔車を參照せよ。〔海軍・山商・名工〕

★保障 ホシヤウ

小城ととりでのこと。危害を蒙らぬやう保護すること。又租税を軽くして民を安んずる政治のこと。

★保釋 ホシヤク

未決の罪人を、保證金と、何時にても呼出しあり次第出頭する旨の證書とを預つて一時之を釋放すること。

〔千圓〕

★嚼臍 ホツをカむ

後悔しても及びぬこと。即ち腹の臍を嚼まんとするも及びぬ義なり。左傳に「若不早圖、後君嚼臍、其及レ圖レ之乎」とある。〔海機・廣高師〕

★捕拿 ホダ

とらへること。捕獲。拿は擧の俗字。又反對にして拿捕と言へば浮塵・罪人などをとらへること。〔水産・海機〕

★沒交渉 ホツカウセフ

無關係のこと。〔愛醫大・陸士・高檢〕

★發起 ホツキ

思ひたつこと。發起人などいふ。

★勃興 ホツコウ

盛んにおこること。〔東高師〕

★發心 ホツシン

菩提心をおこすこと。菩提心とは正しいさとりを求める心なり。

★勃然 ホツゼン

色を變ずるさま。怒るさま。孟子に「王勃然變於色」とある。〔海軍・神商大〕

★沒頭 ホツトウ

一事に専心すること。熱中すること。〔山商〕

★勃發 ホツパツ

俄におこること。急にはじまる。〔鹿農〕

★輔弼 ホヒツ

天子の政治をたすけること。晉書に「輔弼之功相尋之功」とある。〔女職・米工・專檢・北大〕

★匍匐 ホフク

はらばふこと。肅伏とも書く。〔專檢・名工・明專・高校・陸士〕

★蒲鞭之罰 ホベシノバツ

寛恕の罰を稱していふ。カマの鞭にてうつも痛くない義による。後漢書に「劉陽南陽ノ太守ニ拜セラル。温仁シテ怒多シ。吏人過アレバ、タダ蒲鞭ヲ用ヒテ之ヲ罰シ以テ辱ヲホスノミ」とある。

★酸醬 ホホツキ

植物の名にしてほろづきのこと。〔大谷〕

★蒲柳之質 ホリウノシツ

かよわい體質のこと。かはやなぎのたほやかな義による。世説に「南宋顧君叔、與三簡文帝同レ年、君叔ハ老帝怪問之、君叔曰松柏之質經レ霜猶茂、蒲柳之質望レ秋先零」とある。〔陸士・小商・專檢・海兵・福商・京法〕

★母衣 ホロ

武具の一で、昔、馬上で背に負ふて矢を防ぐもの。又幌に同じ。〔陸士・法大〕

★本意 ホンイ

のぞみどほりといふこと。根本の意志の義による。

★賞育 ホンイク

孟賁と夏育といふ戰國時代の有名な勇者のこと。蘇軾の文に「賞育失其勇」とある。〔廣高師・海兵〕

★奔逸 ホンイツ

はしり逃げること。逸走。〔京城醫・米工〕

★翻雲覆雨 ホンウンフクウ・ハンウンフクウ

人情の反覆定りなき喻。翻は翻にてもよし。ハンウンフクウを見よ。〔陸士〕

★梵磬 ホンケイ

佛寺に用ひる石の樂器のこと。〔京城醫〕

★翻刻 ホンコク

版本を再び版にすること。

★梵刹 ホンサツ

寺院のこと。梵、清淨之義とある。〔法大〕

★本支百世 ホンシヒヤクセイ

一門が長久に榮へること。本は宗子なり、支は庶子なり。本家・分家の義となる。〔廣高師〕

★奔走 ホンソウ

馳せまはること。東奔西走の略なり。〔專檢〕

★本尊 ホンゾン

主として祭る佛像のこと。轉じて中心となる人の義にも用ひる。

★本地垂迹説 ホンチスキジヤクセツ

我が邦の神はみな佛が假りに姿をあらはしたものであるといふこと。本地は佛の本来の地位、垂迹は種々の事跡を垂れ表はす義なり。即ち日本の神は印度の佛の假に姿をあらはしたものと説くのである。

★煩惱 ホンナウ

人の慾情、願望、苦慮等のわづらひのこと。慾望。智度論に「女人多知智慧、煩惱垢重」とある。

★本能 ホンノウ

經驗等によらずして生れながらに有する一定の性、即ちこゝろのこと。飲食・男女の慾などをいふ。

★梵唄 ホンバイ

お経を高く唱へる聲のこと。梵は清淨の義なり。清淨なる唄の義による。

★本邦 ホンボク

我が國といふこと。

★凡夫 ホンブ

未だ佛道に入らぬ迷へる衆生といふこと。又平凡な人といふこと。凡骨。

★本望 ホンモウ

本来の望みのこと。宋書に「深思自警以副本望」とある。

★翻譯 ホンヤク

或る國の言語文章を他國の言語文章のそれになほすと。〔東美〕

★凡庸 ホンヨウ

つれ、なみといふこと。十人なみの義による。

★本領安堵 ホンリヤウアンド

本来の領土は安心であるといふこと。本領とは大本の義である。人の本領とは、その得意とするところである。〔熊工・女高師〕

マの部

★不遑枚擧 マイキヨにイトマあらず

一々數へあげる暇がないといふこと。枚は一枚の義な

り。枚擧は又マイキヨと讀む。〔長商・千圓・高校・名工〕

★味爽 マイサウ

夜の明け方のこと。拂曉。黎明。書經に出づ。

★味死 マイシ

愚昧にして死罪を犯すこと。味死して申すとは、死罪に遇ふとも辭せず申上ぐる意なり。漢書に「味死再拜言三大王陛下」とある。

★賣僧 マイス

商をする僧侶のこと。又僧侶を罵りていふ語なり。

★盲龜浮木 マウキのフボク

極めて逢ひ難い幸福にあひし喻。即ちめくらの龜が偶然にうき木につかまり附いた義による。如盲龜逢浮木といふ。法華經に出づ。〔明專・陸士〕

★儲之君 マウケノキミ

よつぎの君のこと。皇太子。東宮。春宮。儲君皆同意なり。〔高校・專檢〕

★妄語 マウゴ

うそ、いつはりのこと。又うそをつくこと。智度論に

「妄語之人、先自誑身、然後誑他、以實爲虛、以虛爲實」とある。〔小商・陸士・高校〕

★網罟 マウコ

魚や鳥獸を捕ふる網のこと。網は何をとるあみにも用ひるも、罟は魚のみを捕へるあみなり。〔水産〕

★毛錐 マウスキ

筆のこと。毛錐子。管城子。〔京城大〕

★猛省 マウセイ

深く反省すること。

★網羅 マウラ

残らずよせあつめること。即ち網を張りて魚鳥をあまさずよせあつめる義による。漢書に「夫所謂士英雄也、故曰網羅、其英雄、則敵國窮」とある。

★魍魎 マウリヤウ

山川木石の精、即ちばげものこと。形三歳位の小兒の如く體は赤黒色なりと。「神不レ明、謂三之魍、精不レ明、謂三之魎」とある。魍魎魍魎を見よ。〔明專〕

★誠者天之道也 マコトはテンノミチナリ

言語性行の上にはいつはりのないが天道の本然である

といふこと。中庸に「誠者天之道也、誠之者人之道也」とある。實に千古の名言なり。〔北大〕

★孫引 マゴビキ

文章の例を引くに原書によらず、他人の引例をそのまま引用すること。〔同志〕

★摩擦 マサツ

こすること。又すれあふこと。冷水摩擦。〔陸士〕

★末學 マツガク

未熟なる學問のこと。はした學問。陳書に「臣末學小生、詞無足算」とある。

★末技 マツギ

つまらぬ技藝といふこと。漢書に「好末技不田作」とある。

★先從 魏始 マブクワイヨリハジメ

優れた者を得んとするならば先づ劣れる者より用ひよとのこと。七六貝從魏始にて詳しく説明せり。

★抹殺 マツサツ

ぬりけすこと。消して無くする。〔盛農〕

★末利 マツリ

折にふれてそれともなくいひ出す言のこと。そぞろごと。

★蹠 跣 マンサン

よるめくさま。醉歩蹠。蘇軾の文に「醉漢兩足幾蹠」とある。

★卮 曼ジ

印度に相傳する吉祥のこと。又雪の舞ひ降るさま。ナチス獨逸の國旗のこと。

★慢心 マンシン

おごりたかぶる心のこと。〔高商〕

★曼陀羅 マンダラ

淨土の相を寫した圖のこと。曼荼羅とも書く。

★持滿 マンヲサ

満ちて溢れざること。孔子字語に「孔子曰、吾聞宥坐之器、虚則欹、中則正、滿則覆、明君以爲至誠、故常置之於坐側、子路進曰、敢問持滿有道乎、子曰、聰明睿智守之以愚、功被天下守之以讓、勇力振世守之以怯、富有四海守之以謙、此所謂損之又損之道也」とある。〔愛

商工の利得のこと。古は農を本業とし、商工業を末業とせし故による。後漢書に「理國之道、舉本業而抑末業」とある。

★末路 マツロ

みじめな晩年のこと。英雄末路憐也などいふ。

★團居 マドキ

一座に集つて圓く居ならぶこと。

★學而不思則罔、思而不學則殆

マナびてオモはずればスナハチクラシ、オモふてマナばザればスナハチアヤフシ

學問してもこれを心に求めなければ昏くして得る所はない、又己が心のみを苦しめて求めても聖賢の道を學ばなければ危くして安らかなるを得ないといふこと。この語は論語に出づ。〔陸士〕

★磨礪 マレイ

みがきとぐこと。研磨。〔高船〕

★蔓延 マンエン

はびこりひろがること。〔米工〕

★漫言 マンゲン

知醫

★瞞著 マンチャク

だましごまかすこと。〔米工〕

★政所 マンドコロ

(1) 武家時代に政治をすべた所のこと。(2) 特に檢非違使の役のこと。(3) 又昔、公家などの邸にあつて財政及び雜事を掌つた所のこと。北政所は攝政・關白の妻玉の尊稱。〔東北大〕

★慢罵 マンバ

馬鹿にしたのゝしること。

★滿招損謙受益

満つれば缺け謙すれば利益を受けるのが天道であるといふこと。書經に「滿招損謙受益、之乃天道」とある。〔海經・海嶼〕

★漫筆 マンビツ

心に思ふことを筆にまかせてかくこと。

★滿目蕭條

マンモクセウテウ 見わたす限りもの淋しいこと。

★漫遊 マンユウ

所をきめずにあるきまはること。簡國漫遊。

★孟浪 マンラン

とりとめのないこと。若實ならざること。莊子に「夫子以爲孟浪之言、而我以爲妙道之行也」とある。

ニの部

★御垣守 ミカキモリ

御所の御門を守護する兵士のこと。〔海兵〕

★御氣色 ミキシヨク

御様子といふこと。〔水農〕

★水屑 ミクヅ

水中の塵芥のこと。〔外語〕

★御車寄 ミクルマヨセ

御所の車だまりのこと。〔高松商〕

★御手洗 ミタラシ

神佛を拜む時そまぎをなし手水を使ふ所のこと。〔陸士・高檢〕

★路普請 ミチフシン

道路をつくり又修繕する作業のこと。〔長商〕

★水莖之跡 ミヅキクノアト

筆跡のこと。〔海欄・京城醫・福商・日醫・金醫〕

★水清 無二大魚 一 ミヅキヨければタイギヨナシ

餘りに嚴重にして狭量なれば、人がなつかぬといふこと。餘りすんだ水の中には大きい魚がをらぬといふ義による。後漢書に「君性嚴急、水清、無二大魚、宜二蕩佚簡易二」とある。〔海經・海欄〕

★皆既與二秋草 一 俱泯 ミナスデにシウサウとトモ

秋草の枯れてしまふやうに、最早皆その名が世に知られなくなつてしまつたといふこと。〔神商〕

★水無月 ミナヅキ

陰曆六月のこと。〔高校〕

★身まかる ミまかる

死ぬこと。〔醫專・陸士〕

★躬自厚而薄責ニ於人一則遠レ怨

ミミヅカチアツクしてウスクヒトをセむればスナハチウラミトホシ

自分の身を甚だしく責めて、人を責めることが薄いときは、人の怨を受けることが少ないといふこと。〔海

機〕

★冥加 ミヤウガ

知らず識らずのうちに加はる神佛の加護のこと。又運、しあはせ、あかげの意ともなる。大藏法教に出づ。〔高校・海欄・北大〕

★名詮自性 ミヤウセンジンシャウ

名はその實又は體そのものゝ性質を言ひ表はすといふこと。詮はつぶさに事理を説きあかすこと。故に名詮自性一とすれば明かなり。又明詮自稱とも書く。〔專檢・小商・京城醫・同志〕

★命婦 ミヤウブ

五位の女官のこと。又稻荷神の使としての狐の稱。

★名聞 ミヤウモン・メイブン

名の世上に開ゆること。ほまれ。〔水産〕

★脈絡 ミヤクラク

すじみち、道理のこと。中庸に「脈絡貫通」とある。

★御息所 ミヤスドコロ

ミ・ム の部

ミ・ム の部

★民謠 ミンニウ

はやりうたのこと。人民一般に詠はれてゐる義による。俚謠。

★眠食 ミンシヨク

れむりと食事のこと。又起居のこと。南史に「行生眠食、手不釋レ卷」とある。眠食如何は起居如何といふことなり。

★六日之菖蒲十日之菊

ムイカノアヤメトウカノキ

ムイカノアヤメトウカノキ

二七一



時機を失つて役に立たぬこと。〔明專・專檢・外語〕

★無何有之郷 ムカイウノサト  
何物もなき郷にて、宇宙自然の本體を樂しむべき地のこと。莊子に「田<sup>テ</sup>六極之外<sup>ニ</sup>、遊<sup>ニ</sup>無何有之郷<sup>ニ</sup>」とある。

★無 下 ムゲ  
一概に、一途にといふこと。〔東商大〕

★無 稽 ムケイ  
よりどころなきこと。根據のないこと。稽は考なり。書經に「無<sup>キ</sup>稽<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>、勿<sup>レ</sup>聽<sup>ク</sup>、弗<sup>レ</sup>詢<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>謀<sup>ハ</sup>勿<sup>レ</sup>用<sup>ス</sup>」とある。弗<sup>レ</sup>詢<sup>ハ</sup>衆<sup>ニ</sup>詢<sup>ハ</sup>はざるなり。〔盛農・名工・陸經〕

★夢幻泡影 ムゲンハウエイ  
凡て事の無常にして捉へどころなきこと。諸行無常の義なり。金剛般若經に「一切有爲法、如<sup>シ</sup>夢幻泡影<sup>ニ</sup>」とある。

★無 辜 ムコ  
罪なきこと。又罪なき者のこと。辜は罪なり。周禮に「以<sup>テ</sup>教<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>辜<sup>ニ</sup>、伐<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>罪<sup>ニ</sup>」とある。

★無 告 ムコク

誰にも告げ訴ふべき所のなき窮民のこと。頼りのない民。書經に「不<sup>レ</sup>虐<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>告<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>廢<sup>ニ</sup>困<sup>ニ</sup>窮<sup>ニ</sup>」とある。〔山商〕

★無雜作 ムザウサ  
わけのないこと。手輕なこと。又慎重でないこと。〔鹿農〕

★無 慙 ムザン  
むごたらしいこと。又恥を知らぬこと。

★寧可<sup>ニ</sup>玉碎<sup>ニ</sup>何能<sup>レ</sup>瓦全<sup>ナラシ</sup>  
ムシろギヨクサイすべきもナンゾヨクグワゼンならん人が爲す所なくして無事に生きて居るよりも手柄をたてはなしく死した方がましであるといふこと。瓦の如きつまらぬものとなつて存するよりも、玉となつて碎けた方がましである義による。この語は北齊書に出づ八二頁瓦全の部を参照せよ。〔海軍〕

★寧爲<sup>ニ</sup>鷄口<sup>ニ</sup>勿<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>牛後<sup>ニ</sup>  
ムシろケイコウとナるもギウゴとナるナカレ大なる者の後につき従ふよりもいつそ潔く小なる者の先頭にたてといふこと。鷄の口は小さいけれど食を

くふのであり、牛の役は大きいけれど糞を出すに過ぎぬといふ義による。史記に「蘇秦、韓ノ宣惠王ニ説イテ曰ク、臣聞ク、鄙諺ニ曰ク、寧<sup>ル</sup>爲<sup>ニ</sup>鷄口<sup>ニ</sup>勿<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>牛後<sup>ニ</sup>ト。今四面シテ臂ヲ交ヘテ秦ニ臣事セバ、何ゾ牛後ニ異ナランヤ。夫レ大王ノ賢ヲ以テ、強韓ノ兵ヲ挾ンテ牛後ノ名アラシコト、臣、竊ニ大王ノ爲メニ之ヲ羞<sup>ズ</sup>」とある。〔海欄・陸士・海兵・專檢〕

★寧人負<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>負<sup>レ</sup>人<sup>カズ</sup>  
ムシろヒトワレにソムクとも人が自分に背くやうなことがあつても自分が人に背くことはないといふこと。負は背くなり。〔廣高師〕

★無 狀 ムジャウ  
功のないこと。亡狀は無禮なこと。

★無常觀 ムジャウクワン  
人の死生・世の變轉常なきものとみる見方のこと。釋民要覽に「生滅輪廻是謂<sup>ニ</sup>無常<sup>ト</sup>」とある。〔山商〕

★矛 盾 ムジュン  
言ふことが前後あはぬこと。自家撞着も同じ。尸子に曰く「楚人矛ト盾トヲヒサグ者アリ。コレヲ譽メテ曰ク、吾ガ盾ノ堅キ能ク、陷ルナシト。又矛ヲ譽メテ曰

ク吾ガ矛ノ利ナル者ニ於テ陷レザル無シト。或人曰ク、子ノ矛ヲ以テ子ノ盾ヲ陷レバ如何ト。ソノ人應フルコト能ハズ」と。〔專檢・陸士・仙醫・海兵・山商・海欄・東商大・滿工・鹿農・臺農・仙工〕

★無盡藏 ムジンザウ  
物の取つてもくも盡きないこと。東坡の赤壁賦に「天地之間、物各有<sup>レ</sup>主、苟非<sup>ニ</sup>吾<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>所有<sup>ニ</sup>、雖<sup>ニ</sup>一毫<sup>ト</sup>一末<sup>ト</sup>無<sup>レ</sup>取<sup>ル</sup>、惟<sup>ニ</sup>江上之清風<sup>ト</sup>、與<sup>ニ</sup>山間之明月<sup>ト</sup>、取<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>無<sup>レ</sup>禁<sup>ス</sup>、用<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>竭<sup>ス</sup>、是<sup>レ</sup>造物者之無<sup>レ</sup>盡藏也<sup>ト</sup>」とある。〔山商・名工〕

★無 念 ムネン  
(1)何も考へないで我を忘れること。無念無想。(2)やしいこと。残念なこと。〔金醫・農大〕

★胸有<sup>ニ</sup>成竹<sup>一</sup>  
ムネにセイチクアリ  
事を行ふにあたり既に出来上つた考が心中にあるといふこと。一五三頁成竹の部に詳しく説明せり。参照せよ。〔高校〕

★紫奪<sup>レ</sup>朱<sup>ヲ</sup>  
ムラサキアケをウバふ  
偽物が眞物を黷すといふこと。紫は間色で朱は正色な

リ。〔東高師〕

★村雨 ムラサメ

にはか雨のこと。夕立。〔女高師〕

★亡慮 ムリヨ

おぼよそ、ざつといふこと。概算。無慮も同じ。

〔陸士〕

★無聊 ムレウ

心に淋しく思ふこと。文選に「與レ子別後益復無聊」

とある。

★無爲 ムキ

何もしないこと。論語に「子曰、無爲而治者、其舜

也與」とある。

メの部

★茗醺 メイエン

お茶の會のこと。茗は茶なり、醺は宴に同じ。

★冥行 メイカウ

物を見ずして行くこと。向う見ずに進むこと。猪進。

〔東高師〕

★明鏡止水 メイキヤウシスキ

心に慾念なく、明かにすんである喻。明かなる鏡と靜かに澄んである水の義による。莊子に「鏡明、則塵垢不レ止、止、則不レ明也」とあり、又「人莫レ能レ於流水」而能レ於止水」とあり、尙又「至人用レ心若レ鏡」とある。

★名教 メイケウ

儒教即ち孔孟によつて唱へられた仁義道德の教へのこと。君臣の義・父子の親等皆名目ありて、素るべからざる教なる故による。晋書に「名教之内、自有二樂地」とあり、又、垂二名教の語あり。〔東北大〕

★冥想 メイサウ

目を閉ぢ心を落ちつけて深く考へること。

★明窗淨几 メイサウジヤウキ

明かなる窓の下に清き机のあること。又書齋のさつぱりと整頓したること。歐陽修の文に「蘇子美嘗言、明窗淨几、筆硯紙墨皆極二精良、亦自是人生一樂、然能得二此樂者其稀」とある。〔秋鏡〕

★名利 メイリ

有名な寺院のこと。〔桐工〕

★名狀 メイジヤウ

かたち有様を言ひあらはすこと。形容すること。名狀すべからずなどいふ。

★命世 メイセイ

一世に名ある者のこと。天に命ぜられて人の世に出た義による。命世の士、命世の雄などいふ。

★名聲噴々 メイセイサク

世上のきこえ評判が口々に噂され、ほめ稱へられること。名は名譽、聲は聲望、即ち世のきこえ評判となる。

★名聲藉甚 メイセイシヤジン

評判が高く世間にきこえること。藉甚は世に藉くこと甚だしきことなり。

★名節 メイセツ

道徳上守るべき操のこと。〔水農〕

★明徴 メイチョウ

あきらかに證明すること。國體明徴などいふ。

★明德 メイトク

天から享けた人間の本性のこと。大學に「在レ明明

徳」とある。〔廣高師〕

★明媚 メイビ

あざやかに美しいこと。明媚は山水の景色にいふ。且光明媚などいふ。

★明府 メイフ

すぐれた役人のこと。〔陸士〕

★冥福 メイフク

のちの世の仕合せのこと。死後の幸福のこと。北史に「追奉冥福」とある。

★名分 メイブン

人は各その名に従つて盡すべき守るべき分際のあること。大義名分を見よ。

★名聞 メイブン・ミヤウセン

名の世上に聞ゆること。ほまれ。〔東高師〕

★明眸皓齒 メイボウカウシ

容顔の美しい形容。眸はひとみ、皓は白。明かなひとみ、白い齒の義による。杜甫の詩に「明眸皓齒今何在、血汚遊魂歸不レ得」とある。

★名利 メイリ

名譽と利益のこと。莊子に「人未レ有テ不ニ興レ名就レ利者」とあり、又「名利治ニ小人」とある。

★螟蛉

桑の蟲のこと。轉じて養子のこととなる。詩經に「螟蛉有レ子、蠆蠃負レ之」とあり、蠆蠃は土蜂にして、即ち土蜂が桑の蟲の子を養ひ、之を化して己の子となる義による。因つて他姓の人の養はれて人の子となるもの、即ち養子をいふ。

★馬手

右の手のこと。弓手に對していふ。

★免疫

病氣に冒されぬ素質となること。〔航操〕

★面晤

面會してはなすこと。晤は會談の義、面談。面語。

★面從後言

人の面前ではこびへつらひて之に従ひ、背後に於ては之をそしめること。書經に「汝勿ニ面從、退有ニ後言」とある。

★面從腹非之態度

メンジユウフクヒノタイド

表面では従ひ、腹の中では従はぬ有様といふこと。

★面折廷争  
メンセツテイサウ  
まのあたり人の過を責め、朝廷の君主の面前であらうこと。史記に「於レ今面折廷争、臣不レ如レ君」とある。〔陸士〕

モの部

★蒙塵

天子が難をきけて門外に奔られること。天子の輦落ちること。天子は常に道を清めて行き、九重の内に居られる。然るに塵を蒙つて出でさせられるは、變ありて外に奔られるが故なればなり。左傳に「天子蒙ニ塵于外」とある。〔盛農〕

★蒙昧

世のひらけない時のこと。又おろかなこと。蒙は道理に通ぜぬこと、昧はくらい。〔名工〕

★沐猴冠

衣冠は人並に著けてゐても心は人でないといふ喻。即ちそしつてさるが冠をかぶつてゐるといひしなり。沐

★百舌

小鳥の名。〔東高師〕

★勿論

言ふまでもなく。無論といふこと。

★勿怪之幸

思ひ掛けぬ仕合のこと。案外な仕合せ。〔京城醫・高松商〕

★勿體

重々しいこと。もの／＼しいこと。勿體を附けるなどいふ。〔京城醫・高松〕

★可三以託六尺之孤

可三以寄ニ百里之命  
モツテリクセキノコをタクすべく、モツテヒヤクノメイをヨサベシ

遺兒を託し又國政を委れるに足るといふこと。六尺之孤は古は生れて二年半を一尺といひしにより十五歳位のこと。百里之命は諸侯の國の民の生命といふことなり。論語に出づ。〔海經〕

★物忌

心身の不淨を清め、汚れにふれることを忌むこと。齋

★模造

ぼんやりしてはつきりせぬさま。不鮮明なさま。〔水農〕

★模糊

ぼんやりしてはつきりせぬさま。不鮮明なさま。〔水農〕

★沐浴

湯あみをして身を清めること。又めぐみを受けること。〔鹿農〕

★迫目睫

目前にまじせまること。目睫は目とまつげとの間の義で、極めて近接せる意なり。

★目笑

目と目と見合せて笑ふこと。〔山商〕

★默殺

だまつてこらへること。何の意思表示もせずに葬り去ること。〔鹿農〕

猴は類猴にして猿の一種なり。史記に「説者曰、人言、楚人沐猴、而冠耳、果然、項王聞レ之烹ニ説者」とある。〔専檢・小商・神宮・山商〕

★模造

ぼんやりしてはつきりせぬさま。不鮮明なさま。〔水農〕

戒。〔神商大〕

★物 具 モノノグ

武器のこと。〔山商〕

★模 倣 モハウ

まねをすること。模倣。

★模 範 モハン

手本のこと。〔名工・東美〕

★百 敷 モ、シキ

大宮、宮中のこと。内裏。〔百敷の〕は大宮にかゝる

枕詞なり。〔海兵〕

★模 稜 モリヨウ

事を曖昧にして是非を決せざること。唐書に「嘗謂

人曰、決<sup>スル</sup>事<sup>ニ</sup>欲<sup>シ</sup>明白<sup>ニ</sup>、誤<sup>レ</sup>則<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>悔、摸稜持<sup>ニ</sup>兩

端<sup>ニ</sup>可<sup>ク</sup>也、故世號<sup>ニ</sup>摸稜手<sup>ニ</sup>とある。〔陸士〕

★門下高足 モンカのカウソク

弟子中のすぐれたる者のこと。〔海模〕

★門外漢 モングワイカン

其の道にたづきはらぬ者のこと。専門外の者。〔陸士〕

★門外可<sup>レ</sup>設<sup>ニ</sup>雀羅<sup>一</sup> モングワイジャクラをマウくべ

尋れて来る人がないので、門の外には澤山の雀がいつも集つてゐるから、一つ羅でも張つて捕へようかといふこと。雀羅は雀をとるあみなり。漢書に「翟公爲<sup>ニ</sup>廷尉<sup>一</sup>、賓客填<sup>レ</sup>門<sup>一</sup>、及<sup>レ</sup>廢<sup>レ</sup>門<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>設<sup>ニ</sup>雀羅<sup>一</sup>、後復爲<sup>ニ</sup>廷尉<sup>一</sup>、客欲<sup>レ</sup>往<sup>一</sup>、翟公大<sup>ニ</sup>笑<sup>一</sup>、其門<sup>一</sup>曰<sup>一</sup>、一死一生、知<sup>ニ</sup>交情<sup>一</sup>、一貧一富、知<sup>ニ</sup>交情<sup>一</sup>、一貴一賤、交情<sup>一</sup>見」とある。

★門 人 モンジン

弟子のこと。門下。門弟。〔海模〕

★門 閥 モンバツ

家がらのこと。門地。〔米工〕

★門 楣 モンビ

家の名譽のこと。家の梁の義なり。陳鴻の長恨歌に、「當事<sup>ニ</sup>諒<sup>レ</sup>詠<sup>一</sup>有<sup>レ</sup>云、男不<sup>レ</sup>封<sup>一</sup>、侯、女作<sup>レ</sup>妃、君看<sup>レ</sup>女却<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>門上<sup>一</sup>楣」とある。

ヤの部

★陽 炎 ヤウエン

かげらふのこと。快晴の日に空中に見える現象。〔海

模〕

★佯 狂 ヤウキヤウ

偽つて狂者となること。〔小商〕

★羊質 虎皮 ヤウシツにしてコヒス

外見が美しくして其の質が劣つてゐること。外見は虎で

なか身は羊の義による。揚子法言に「或人曰ク、人ア

リ、自<sup>ラ</sup>孔<sup>ヲ</sup>姓<sup>ニ</sup>シテ、仲尼<sup>ヲ</sup>字<sup>ニ</sup>シ、其<sup>ノ</sup>門<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>、

其<sup>ノ</sup>堂<sup>ニ</sup>升<sup>リ</sup>、其<sup>ノ</sup>几<sup>ニ</sup>伏<sup>シ</sup>、其<sup>ノ</sup>裳<sup>ヲ</sup>着<sup>レ</sup>バ、則<sup>チ</sup>

仲尼<sup>ト</sup>謂<sup>フ</sup>マキカト。曰ク、其<sup>ノ</sup>文<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>ナリ、其<sup>ノ</sup>

質<sup>ハ</sup>非<sup>ナ</sup>リ。敢<sup>テ</sup>質<sup>ヲ</sup>問<sup>フ</sup>、曰ク、羊質<sup>ニ</sup>シテ虎皮<sup>ス</sup>、

草<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>而<sup>シ</sup>テ説<sup>ビ</sup>、豺<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>而<sup>シ</sup>テ戦<sup>ク</sup>、其<sup>ノ</sup>皮

ノ虎タルヲ忘ル、ナリ」とある。〔海兵〕

★羊 腸 ヤウチャウ

曲折して峻しい阪道のこと。寫折。九十九折。羊のハ

ラワタの義に比す。〔高模〕

★懸<sup>ニ</sup>羊頭<sup>一</sup>賣<sup>ニ</sup>狗肉<sup>一</sup> ヤウトウをカ、げてクニクをウ

看板によきものを示して悪しき物を賣ること。羊の頭

を看板にして犬の肉を賣る義による。無門闕に出づ。

〔専檢2・東商・海兵〕

★洋 々 ヤウヤウ

水の盛んなさま。又涯なきさま。〔同志〕

★揚 々 ヤウヤウ

得意なるさま。意氣揚々。〔商船・東音〕

★矢 面 ヤオモ

矢のとんで来る陣頭のこと。敵前。

★躍 如 ヤクジヨ

をどりたつさま。面目躍如などいふ。

★藥 石 ヤクセキ

藥と石針とのこと。轉じて療治の意となる。亂庭事苑

に「夫<sup>レ</sup>攻<sup>レ</sup>病<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>藥、劫<sup>レ</sup>病<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>石、古<sup>以</sup>三<sup>石</sup>爲<sup>レ</sup>針

也」とある。砭は以<sup>レ</sup>石<sup>刺</sup>病也と。

★扼 塞 ヤクソク

おさへふさぐこと。〔北大・陸士〕

★藥籠中物 ヤクロウチュウのモノ

人の過を諫める人の喩。必要の人物といふこと。即ち

藥籠中にある物は藥にして、病を攻むるものなるに比

せしなり。唐書に「君正<sup>ニ</sup>吾<sup>一</sup>藥籠中物、不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>一<sup>日</sup>無<sup>一</sup>

也」とある。

★藥 研 ヤゲン

藥を碎いて粉にする金屬製の道具のこと。〔東農教・明華〕

★矢 頃 ヤゴロ

矢を射れば達すべきほどあひのこと。〔明專・高校〕

★矢 叫 ヤサケビ

放つた矢が的に當つた時發するかけ聲のこと。

★野 史 ヤシ

在野の人又は民間で編述した歴史のこと。〔商船〕

★香具師 ヤシ

縁日や祭禮などで粗造な品を賣り、又は見世物などを興行する商人のこと。〔同志〕

★八潮路 ヤシホジ

遠い航路のこと。〔外語〕

★野 心 ヤシン

身分不相應の望のこと。非望。即ち山野にありて心荒く馴らすこと能はざる義により、非道の企望などをいだける者を野心ありといふ。

★野人不馴於禮 ヤジンレイになれズ

田舎者又はぶしつけ者で禮儀を知らないといふこと。〔高松商〕

★夜 叉 ヤシヤ

性質の極悪極まる鬼のこと。惡鬼。「惡鬼ハ血ヲ飲ミ、人肉ヲ食ス」とある。

★矢 束 ヤツカ

矢の長さのこと。〔專檢〕

★野 黨 ヤダウ

政府黨にあらざ即ち野に在る政黨のこと。

★柳 檜 ヤナギタル

川柳のこと。又川柳集をもいふ。川柳は一六五頁を見よ。

★柳 綠花紅 ヤナギハミドリハナはクレナキ

天地自然のままといふこと。〔水農〕

★箆 籜 ヤナグヒ

矢を盛つて背負ふ具のこと。〔專檢・陸士・長商〕

★野 柄 ヤナフ

田舎の僧のこと。又僧が自己を謙稱していふ言葉のこと。〔大商〕

★野無遺賢 ヤニキケンナシ

賢人は皆任用されてゐるといふこと。書經に「嘉言罔攸伏、野無遺賢」とある。〔高校〕

★冶 金 ヤキン

金をきたへること。〔長商〕

★流鏑馬 ヤブサメ

鎌倉時代の武藝の一にして馬を馳せ鏑矢を射ること。〔陸士〕

★藪 蛇 ヤブヘビ

餘計なことをして却つて禍を招くこと。竹藪をつゝいて蛇を引る義による。〔同志〕

★山 賤 ヤマガツ

山中に住むきこりなどの賤人のこと。〔高校〕

★病入膏肓 ヤマヒカウマウにイユ

病氣が非常に重いと云ふこと。心は上にあり、膏は下にあり、膏上に薄膜あるを肓とし、心下に微脂あるを膏とす。この膏肓の處は至虚の所にして、針も薬も及ばず。故に病のこゝにあるは不治の難症なりと。左傳に「晉侯疾、病、求醫于秦、秦伯使醫緩爲之、

ユの部

★融 合 ユウガウ

とけて一つになること。〔外語・水農〕

★勇 敢 ユウカン

いきほひよく押しとほすこと。勇悍はいさましくてた

★擲 擲 ヤユ

からかふこと。後漢書に「市人皆大笑、舉手擲之」とある。〔盛農2・山商・法大・福商・米工・大農教〕

★彌 生 ヤヨヒ

陰曆三月のこと。〔醫專・高檢〕

★遣 水 ヤリミツ

流し水のこと。庭などへ流しやる水の義による。〔專檢・千醫・神商大・明大〕

けくしいこと。

★融會 ヌウクワイ

とけて一つに集まること。

★夕立 ヌウダチ

俄雨のこと。驟雨。〔神宮〕

★融通 ヌウツウ

有無相通じやりくりすること。とどほりなく通る義による。〔盛農・鹿農〕

★雄圖 ニウト

雄大な企のこと。

★勇因義長 ヌウハツテニヌス

ユウはギにヨツてチャウザ

眞の勇氣は、正義を行ふときは益々強められるといふこと。〔廣高師〕

★勇往邁進 ヌウワウマイシン

勇しく元氣よくおし進むこと。勇邁。〔名工〕

★輸贏 ヌエイ

かちまけのこと。輸は負、贏は勝なり。〔謂ニ勝負ニ爲ニ輸贏ニ〕とある。〔長商・慶大〕

★行不由經 ヌクニコミチニヨラズ

ユクにコミチにヨラズ

正道を歩んで邪道に足を入れぬこと。經は道の小にして近いこと。こみちを通らずに大道を行く義による。論語に出づ。〔水産〕

★往者不可諫、來者猶可追

ユクモノはイサむべからズ、キタルモノはナほオふべし

既に過ぎ去つたことは後悔しても及ばない、將來のことは追ふて改むべきであるといふこと。論語に出づ。〔専檢〕

★油斷大敵 ヌダンタイテキ

心をゆるめると大失敗のもととなるといふこと。〔和商・米工〕

★輸入超過 ヌニフテウクワ

外國から來る輸入品額の方が我が國から出す輸出品額を越えること。〔成蹊高〕

★纈絞 ヌハダ

くすり染、即ちしぼりのこと。

★染指 ヌビをソム

指にて一寸味をみる。又物事に手をつけること。

〔東商大〕

★夕風 ヌフナギ

夕方に海風と陸風と入り交はる時、一時風やみ波靜かなこと。〔商船〕

★夕映 ヌフバエ

日の没する際に日光の反射によつて西の空のあかくなること。曉。〔神宮〕

★渝盟 ヌメイ

ちかひを變へること。左傳に「有レ渝盟、明神靈レ之」とある。〔陸士〕

★揄揚 ヌヤウ

譽めあげること。班固の文に「雍容揄揚、著ニ于後嗣」とある。〔商船〕

★由緒 ヌキシヨ

由つて來るいはれのこと。由來。來歴。〔高校〕

★唯物論 ヌキブツロン

物質を以て一切の根本となし、精神上の現象も總て物質の作用に外ならずと論ずるもの。唯心論の對なり。〔慈醫・九藥〕

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

★弓勢 ヌンゼイ

弓を射る力のこと。〔高校〕

★弓手 ヌンデ

左手のこと。馬手に對していふ。〔外語〕

ヨの部

★餘殃 ヌアウ

天の降すわざはひのこと。餘慶の對なり。書經に「作ニ不善、降ニ之百殃」とある。

★餘音 ヌイン

響の既に絶へて尙ほ残れる音のこと。

★餘蘊 ヌウン

あまつたたくはへのこと。〔廣高師〕

★容喙 ヌウカイ

くちばしを入れること。干渉すること。〔水産2・神商・學習・廣高師〕

★備耕 ヌウカウ

人に雇はれて田畑を耕すこと。〔海兵〕

★容儀端正 ヌウギタンセイ

容儀端正 ヌウギタンセイ

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

ユ・ヨの部

みなりが禮儀にかなふて正しいこと。端も正なり。

〔仙工・長商〕

★擁護 ヨウゴ

たすけまもること。又寄せられぬやうまもること。憲政擁護などいふ。〔金工〕

★擁書萬卷 ヨウシヨマンクワン

多くの書籍を家に蔵すること。

★庸臣 ヨウジン

平凡な臣、手腕のない臣といふこと。〔廣高師〕

★鷹氈之志 ヨウセンノシ

鷹が小鳥を捕へる如く猛威を振ふ心のこと。後漢書に出づ。

★雍塞 ヨウソク

ふさぐこと。〔阿醫〕

★雍滯 ヨウタイ

物事がとどこほること。〔京城醫〕

★膺懲 ヨウチヨウ

うちこらすこと。膺はうつなり。〔專檢〕

★庸夫 ヨウフ

世の常の男のこと。凡夫。〔商船・海軍〕

★餘榮 ヨエイ

あと／＼に残る光榮のこと。

★翼賛 ヨクサン

力をそへて政事をたすけること。〔海兵・女高師〕

★抑制 ヨクセイ

おさへて自由にさせぬこと。

★翼戴 ヨクタイ

たすけあげておしただくこと。左傳に「翼戴天子、而加レ之以レ共」とある。共は恭なり。〔神宮〕

★抑揚 ヨクヤウ

抑へたりゆるめたりすること。又音楽が詩文の調子を高くあげ、又低くさげること。〔東音〕

★與國 ヨコク

同盟を結んでゐる國のこと。〔廣高師・神商大〕

★餘燼 ヨジン

もえのこりのこと。〔鹿農・米工〕

★餘生 ヨセイ

今後の生涯といふこと。又辛うじてたすかつた生のこと。

残つたおもむきが長く響いて絶えないこと。〔東音・和商〕

ラの部

★禮讚 ライサン

ほめた／＼へること。佛に禮拜して其の功德をほめた／＼へる義による。女人禮讚などいふ。

★雷霆 ライテイ

激しい雷鳴のこと。霆は雷の餘聲なり。〔東高師・山商・商船・米工〕

★雷同 ライドウ

みだりに他人の説に同意すること。附和雷同。雷鳴れば萬物之に應じて響くが如く、人の説は是非をも顧みずして應ずる義による。禮記に「母ニ雷同」とある。〔醫專・海軍〕

★磊砢 ライカ

石の多く重なつてゐるさま。また卓然として特出するさま。屈原に「石磊砢兮」とある。〔外語〕

★磊磊落落 ライライラクラク

と。餘れる生命の義による。餘命。殘生。〔和商〕

★與黨 ヨダウ

政府に味方する政黨のこと。なかま。

★餘念 ヨネン

他の考のこと。「唯在得レ戒無餘念」とある。

★蓬生 麻中不扶而直

ヨモギマチユウにシヤウザればタスケズしてナホシ

善人に交れば、己も亦善人になるといふこと。説苑に

「鏡以ニ清明、美惡自レ服、衡平、無レ私輕重自得、蓬

生ニ 麻中ニ不レ扶直、白沙入レ 泥與レ之皆黑」とある。

★餘裕 ヨユウ

ゆつたりしてこせつかぬこと。又あり餘ること。餘裕綽々。孟子に「豈不綽々然有餘裕」とある。〔九藥・仙工〕

★輿論 ヨロン

世間一般の意見のこと。輿は衆なり、衆人の議論の義による。左傳に「晋文公聽輿人之論」とある。〔神商大・專檢・早大專〕

★餘韻嫋々 ヨキンテウク

ヨ・ラの部

心にわだかまりがなく小事に頓着せぬさま。落。落不羈。晋書に「大丈夫行レ事、當ニ磊磊落落、如ニ日月皎然」とある。「大商・海軍・東商大・高校・大商」

★郎 從 ラウジユウ  
家來のこと。耶黨。

★勞資協商 ラウシケフシヤウ  
労働者と資本家との間をとりなすこと。「高松商」

★狼 藉 ラウゼキ  
とりちらしてあるさま。又亂暴をすること。杯盤狼藉

★狼 狽 ラウバイ  
あわてること。周章狼狽。狼は狼の屬なり。連文釋義に「狼ハ前ニ足長クシテ後ノ二足短カク、狼ハ前ノ二足短カクシテ後ノ二足長シ。狼ハ狼ナケレバ立タズ、狼ハ狼ナケレバ存セズ。若シ相離ルレバ進退スルコトヲ得ズ」とある。「早高」

★老 髦 ラウバウ・ラウモウ  
おいはれのこと。老衰。七十を老といひ、八十・九十を髦といふ。「山前・海經」

★老婆心 ラウベシン  
切に思ひやる心のこと。略して婆心ともいふ。老婆の如く人の爲に心配する義なり。傳燈錄に出づ。「水農」

★狼 戾 ラウレイ  
怒が深くて人道にはづれてゐること。狼の性の食戾なるによる。漢書に「閩越王狼戾不仁」とある。

★落 胤 ラクイン  
貴人の私生兒のこと。

★絡 繆 ラクエキ  
往來の續いて絶えざるさま。絡繹も同じ。荀恒に「遠而望レ之鴻鵠群游、絡繹遲延」とある。「高校・専檢・早高」

★落 居 ラクキヨ  
落付くこと。終ること。「甲南」

★落 款 ラククワン  
書畫に筆者の名を記すこと。又雅號の捺印にもいふ。

★樂 觀 ラククワン  
著書の賣行の盛んな形容。晋書に「左思字ハ太冲、齊國臨淄ノ人。貌寝ニ口訥ナレド辭藻壯麗、齊都賦ヲ造リ、一年乃チ成ル。復三都ヲ賦セント欲ス。思ヲ稱フル十年、賦、成ルニ及ビ、時人未ダ之ヲ重ンゼズ。張華見テ曰ク、班固ノ流ナリト。是ニ於テ競イテ相傳寫シ、洛陽之ガ爲ニ紙價貴シ」とある。「日商」

人生は楽しみのみならずと観ずること。又良い結果を得べきことを信じて安心すること。この反対は悲觀なり。

★樂 天 ラクテン  
その境遇・地位に安んじて人生は楽しみなりとすること。

★落 莫 ラクバク  
さびしいさま。秋風落莫などいふ。「山前・盛農・水産」

★落 魄 ラクハク  
落ちぶれること。業を失ひて寄る所なきなり。零落。「大藥・神宮・北大2・盛農・海軍・東商」

★洛 閩 ラクビン  
程氏と朱氏の學問のこと。程氏は洛陽の人、朱氏は閩中の人なりしによる。「神宮」

★洛陽紙價貴 ラクヤウのシカタカシ

★螺 旋 ラセン  
螺の殻の様にぐる／＼ねぢれてゐること。ねぢ。「神商大」

★辣 腕 ラツワン  
すごい腕まへのこと。敏腕。「長商」

★螺 鈿 ラデン  
青貝をちりばめた細工のこと。「女高師」

★臘 月 ラフゲツ  
陰曆十二月のこと。

★濫 造 ランザウ  
むやみにこしらへること。組成濫造。

★濫 賞 ランシヤウ  
みだりに賞を與へること。書經に「有徳不濫賞」、賞



必加<sup>フ</sup>于賢人<sup>ニ</sup>とある。

★濫觴 ランシヤウ

物のはじめのこと。觴は盃なり。源は小にして一つの盃を浮べる小流に過ぎずといふ義による。孔子家語に「江始出于岷山、其源可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>蓋<sup>シ</sup>觴、及<sup>ニ</sup>其至<sup>ニ</sup>江津<sup>ニ</sup>也、不<sup>レ</sup>妨<sup>レ</sup>舟、不<sup>レ</sup>避<sup>レ</sup>風、則<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>涉<sup>ニ</sup>とある。〔高校2・女高師・海兵・外語・廣高師・山商・京城醫・神船・北大・名工・盛農・満工・東亞・高檢〕

★亂臣賊子 ランシンゾクシ

君に忠ならずる臣と親に孝ならずる子のこと。孟子に「孔子成<sup>ニ</sup>春秋<sup>ニ</sup>、亂臣賊子懼<sup>ル</sup>」とある。

★爛漫 ランマン

物の満ちて溢れるさま。天真爛漫。又花の咲き亂れたるさま。櫻花爛漫。莊子に「大徳不<sup>レ</sup>同、而性命爛漫矣」とある。〔海兵〕

★變輿 ランヨ

天子乗用の御馬車のこと。天子の輿には變鈴をつけたるによる。

★濫用 ランヨウ

みだりに用ひること。〔長商〕

★亂離 ランリ

世が亂れて離ればなれになること。〔女高師〕

★糗糲食 ランルレイシ

ぼろ着物と粗食のこと。糲は玄米、食は飯なり。左傳に「以<sup>テ</sup>糗糲糲食<sup>ニ</sup>、啓<sup>ニ</sup>山林<sup>ニ</sup>」とある。〔神宮・陸士〕

リ の 部

★柳暗花明 リウアンクワメイ

柳は茂つて暗く花は開いて明るい春の自然のさま。歲華紀麗に「風煖<sup>カニシテ</sup> 而燕南雁北<sup>シテ</sup>、日和柳暗花明<sup>カナリ</sup>」とある。

★柳營 リウエイ

將軍の陣屋のこと。幕府。〔海軍〕

★流言蜚語 リウゲンヒゴ

根も葉もないうはさのこと。流言は水の流れる如き無根の言なり、蜚語はこがね虫が飛び来る如く何所からともなく飛び來つたことばなり。〔廣高師・明專〕

★流竄 リウザン

しまながしのこと。配流。〔明華〕

★流觴曲水 リウシヤウキョクスキ

曲水(まがりくねつた流水)に盃を流し、他の杯が自分の前に來ぬ内に詩を作つて勝負を争ふ風流の遊びごと。盃は杯の俗字なり。觴は盃なり。曲水之宴。曲水流觴ともいふ。一〇五頁を見よ。

★柳絮 リウジヨ

春の末に雪のやうに亂れとぶ柳の花のこと。

★柳眉 リウビ

美人の眉のこと。細まゆ。柳眉を逆立てゝ怒るは美人の怒るさま。

★流風 リウフウ

昔の教化の残りとどまつてゐるもの。〔北大〕

★留保 リウホ

留めて保存すること。保留。〔名工〕

★流落 リウラク

落ちぶれて諸方を歩き廻ること。〔東商大〕

★流離 リウリ

人が骨肉の親しい者に別れ、居所を失ふて他國にさま

よふこと。〔早高・神商大〕

★鬩亮 リウリヤウ

樂器の音の清く明かなさま。

★柳綠花紅 リウリョクカワコウ

天然のさま。ヤナギはミドリハナはクレンナヒを見よ。

★流連荒亡 リウレンクワウバウ

遊に耽りキツクケして家に歸るを忘れること、田獵飲酒の樂みに耽ること。孟子に「流ニ從ヒテ、下リテ歸ルヲ忘ル、之ヲ流ト謂フ。流ニ從ヒテ、上リテ反ルヲ忘ル、之ヲ連ト謂フ。獸ニ從ヒテ獸ク無キ、之ヲ荒ト謂フ。酒ヲ樂ンデ厭ク無キ、之ヲ亡ト謂フ。先王流連ノ樂、荒亡ノ行無シ」とある。

★釐降 リカウ

皇女の降嫁のこと。釐は治むるなり。帝女の心を治め嫁せしめる義による。

★釐革 リカク

改めかへること。改革。〔外語〕

★李下之冠 リカノカンムリ

嫌疑を避ける喻。李の樹の下にて冠を正せば李を盗み

たるの疑を受ける故、正してならずといふなり。八三頁の瓜田李下を参照せよ。

★離間策 リカンサク

人の間をさいて仲を悪くする計畫のこと。

★離宮 リキヤフ

常居の宮殿を離れて別處に置く宮殿のこと。民間にていふ別荘なり。

★六合 リクガフ

天地四方のこと。天下。易に「遠在二六合之外<sup>ニ</sup>、近在二一身之内<sup>ニ</sup>」とある。〔慈醫・大藥・京靈・東農教〕

★六軍 リクゲン

天子の軍勢のこと。周禮に「一軍萬二千五百人、周制天子六軍、諸侯大國三軍、次國二軍、小國一軍」とある。

★六藝 リクゲイ

禮、樂、射、御、書、數のこと。孔子世家に「弟子三千人、身通二六藝<sup>ニ</sup>者、七十二人」とある。〔京城大・松商〕

★六國史 リクコクシ

勅撰歴史六種のこと。日本書紀・續日本書紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄のこと。

★六出 リクシニツ

雪の異稱。雪は六瓣なる故による。

★六書 リクシヨ

漢字の構造及び使用上の六種類。即ち象形・指事・會意・諧聲・假借・轉注のこと。又六種の書體。即ち古文・奇字・篆書・隸書・經篆・蟲字のこと。

★六親 リクシン

父・母・兄・弟・妻・子のこと。〔廣高師〕

★六尺之孤 リクセキノコ

十四五歳のみなしごのこと。〔熊醫〕

★陸績 リクツク

ひきつゞくさま。〔水産〕

★六韜三略 リクタウサンリヤク

兵法の書なり。六韜は文・武・虎・龍・豹・犬の六つあり、三略は上中下に分ち、略は謀略にして黄石公の書、張子房に土橋の上にて授けしものといふ。

★理窟 リクツツ

理のあつまる所のこと。窟は穴にして道理がこゝに集まる義による。

★陸離 リクリ

物がきら／＼とかじやいてまばゆく見えるさま。光彩陸離。〔千醫〕

★六六魚 リクシクギヨ

鯉のこと。鯉は腹の中通り頭の下より尾に至るまで鱗三十六あるといふによる。

★陸梁 リクリヤウ

思ふまゝに振舞ふこと。跳梁。跋扈。〔千醫・專檢〕

★俚言 リゲン

世間に行はれおる卑しい言葉のこと。俚語。〔廣高師・臺農〕

★俚諺 リゲン

俗世間のことわざのこと。俗諺。〔東醫〕

★利權均霑 リケンニキンテンサ

利益と權利を他と一様に得ること。〔海兵〕

★罹災 リサイ

災難にかゝること。罹災民。

★理財 リザイ

財をよく整へ利益ある様に運行すること。經濟。易經に「理財正辭」とある。〔神宮〕

★理想 リサウ

吾人の智能で想像する最高目的のこと。〔女高師・高檢〕

★離騷 リサウ

楚の屈原の作りし書名のこと。離は遭なり、騷は憂なり。屈原は憂に遭ひて之を作りしなり。

★蓋正 リセイ

をさめたゞすこと。蓋は治むるなり。〔横商〕

★履端 リタン

正月元日のこと。左傳に「先王ノ時ヲ正スヤ、端ヲ始ニ履ミ、正ヲ中ニ舉グ、餘ヲ終ニ歸ス。端ヲ始ニ履メバ、序則チ衍ラズ。正ヲ中ニ舉グレバ、民則チ聽ハズ。餘ヲ終ニ歸スレバ、事則チ悖ラズ」とある。

★律語 リツゴ

韻文のこと。〔東醫〕

★立錐之地 リツスキノチ

極く少しの地のこと。即ち錐を立つる程の地といふ義なり。〔慶大〕

★理不盡

理論や筋道を度外したる亂暴なる所置のこと。

★諒 闇

天子・皇后・皇太后などの崩御又は薨去せられて喪に服する期間のこと。

★良禽擇木

賢士は其の主の賢愚を擇びて事ふといふこと。三國志に「良禽擇木而棲、賢臣擇主而事」とある。

★領 會

さとること。會得。〔名工・海軍〕

★兩 敬

相方對等の敬禮を用ひること。片敬の對。〔神商大〕

★兩虎鬪 其勢不俱生

兩雄が相鬪へば何れか一方が死るといふこと。史記に出づ。又「兩虎鬪而驚犬受弊」とあり、又戰國策に「兩虎爭人而鬪、小者必死、大者必傷」とある。

★良賈深藏若虛

「兩虎爭人而鬪、小者必死、大者必傷」とある。しきがゴトし

よい大商人は商品を奥深く藏めて店頭にはないやうにして置くものであるといふこと。史記に「吾聞良賈深藏若虛、君子盛德、容貌若愚」とある。

★令 旨

皇后・皇太后・東宮・親王の命令を記したかきつけのこと。〔航機探〕

★領 袖

衆人のかしらのこと。又人を率ゐる者のこと。衣の領と袖とは人の目につく所にして、此の二所を持っては容易に持ち上げることが出来る。即ち衣服全體の主要部の義による。晋書に「堂々人之領袖也」とある。〔海欄・海兵・廣高師・大醫・三農・水産・專檢〕

★梁上之君子

盜賊のこと。後漢書に「陳寔、太丘ノ長ニ除セラル。德ヲ修メテ清靜、百姓以テ安シ。時ニ歲荒ル。盜アリテ夜其ノ室ニ入り、梁上ニ止マル。寔陰カニ見ル。子孫ヲ呼ビ、色ヲ正シ、之ニ訓ヘテ曰ク、夫レ自ラ勉メザルベカラズ。不善ノ人、未ダ必ズシモ木ト惡ナラズ。習ヒテ以テ性ト成リ、遂ニ此ニ至ル。梁上ノ君子是レ

★隆 運

盛んな運のこと。〔女高師〕

★隆 替

時勢の盛んなることと衰へること。盛衰。〔慶大・明專・三農・長商〕

★凌 駕

他人をしのいで上に秀でること。〔陸士〕

★凌雲之志

世外に超然たる意志を有すること。天寶遺事に「張曠ジテ曰ク、丈夫雲ヲ凌ギ世ヲ蓋フノ志アリテ、下位ニ拘セラレ、身ヲ矮屋ノ下ニ立テ、人ヲシテ頭ヲ擡グルヲ得ザラシムルガ如シト。乃チ官ヲ棄テ去ル」とある。

★龍 顔

天子の御顔のこと。天顔。

★令義解

中古の律令の解釋書のこと。〔東美〕

★利用厚生

物のつかひみちをよくして社會の便益を謀ること。利用は種々の器を作り、貨を運轉すること。厚生は生活

★良 心

人の本心のこと。又善惡を見分ける天賦の性能のこと。

★良 人

妻が夫を稱していふ言葉のこと。孟子に「其妻告ニ其妾曰、良人出、則必壓三酒食ニ而後反」とある。

★持二兩端

二心をいだいてどうしようかと迷つてゐること。

★良二千石

良い地方長官といふこと。漢代の制で二千石は一郡の太守の俸給だといふことから、良い太守といふ義による。〔水産・農教〕

★良藥苦口

善き藥は口に苦いけれど病によく利くといふこと。説苑に「孔子曰、良藥苦口、於口ニ利ニ於病ニ忠言逆耳利ニ於行」とある。

を厚くすることなり。書經に「正徳利用、厚生惟和」とある。〔神商大〕

★龍攘虎搏 リヨウジヤウコハク・リユウジヤウコハク  
龍と虎とが相闘ふやうな激烈なる戦のこと。

★凌辱 リヨウジヨク  
しのぎはづかしめること。凌はしのぐ、腕力にてしのぐ場合にもいふ。

★龍頭鷓首 リヨウトウゲキス

天子の御船のこと。船の軸に龍の頭又鷓鳥の首を彫りつけて飾りとす。龍も鷓も水に溺れず水難を禦ぐ故による。

★龍頭蛇尾 リヨウトウダビ

始が善くて終がつまらぬこと。又始が盛んで終り衰ふること。倂燈錄に「可憐、龍頭、成蛇尾」とある。

★陵廢 リヨウハイ

衰へること。〔海樓〕

★綾羅 リヨウラ

きらびやかに美しい装のこと。あやぎぬとうすぎぬた

リ。綾羅錦繡の装。〔東首〕

★稜威 リヨウキ

天子の御威光のこと。みいづ。〔女高師・陸士・北大〕

★閭巷 リヨウカウ

村ざとのこと。又民間のこと。〔京蠶・名商〕

★慮外 リヨグワイ

思の外、意外、案外の意なり。又不作法、無禮のこと。

★綠林 リヨクリン

盜賊の異稱。後漢書に「諸ノ亡命、綠林中ニ聚リ謀ル」とある。

★脊力 リヨリヨク

うでの力のこと。

★履歴 リレキ

人の今日まで履み來たりし事柄のこと。〔長商〕

★離婁之明 リロウノメイ

目のよく見えること。離婁は人の名、古の目の明なりし人なり。〔女高師〕

★梨園 リエン

俳優の技を習ふ處のこと。轉じて俳優の意に用ひる。

唐書に「明皇既知音律、又酷愛法曲、選坐部伎子弟三百、教于梨園」とある。〔盛農〕

★霖雨 リンウ

長雨のこと。霖は三日以上降る雨なり。

★林間燧酒燒紅葉 リンカンニサケをアタタめて

林の間にて落葉を拾ひあつめて之を燒き、酒を燒めて飲むことにて、風流の趣を述べしなり。白樂天の詩の文句なり。

★輪奐之美 リンクワンノビ

壯大美麗なる建築物の美のこと。〔長商・專檢・海兵・神商大〕

★綸言如汗 リンゲンアセのゴトシ

天子の勅令には取消や改更等はないといふこと。綸言は天子の勅なり。綸は細き糸にして、天子の言細きをいふ。如汗とは天子の言は一たび出で、遂に反らざるをいふなり。〔高校・盛農・陸士〕

★臨終 リンジュウ

死に際のこと。末期。最期。〔東高師・明華〕

★吝嗇 リンシヨク

リ の 部

深く物をしきまをすること。けちんぼう。漢書に「性質實吝嗇」とある。〔海兵〕

★臨池之業 リンチノゲツ

習字をすること。「張芝臨池學習、池水盡黑」とある。

★輪讀 リンドク

多人數が輪になつて書物を次ぎぐによむこと。〔横商〕

★輪廻 リンネ

人世の生死變轉、又は因果應報の廻りあはせのこと。

★淪落 リンラク

おちぶれること。零落すること。淪は沈むなり。〔外語・廣高師・大分商〕

★淋漓 リンリ

あふれ流れるさま。鮮血淋漓などいふ。

★麟麟 リンリン

多くの車のきしり轟く音の形容。〔廣高師〕

★凜冽 リンレツ

寒さの烈しきこと。李白の文に「嚴冬慘切、寒氣凜

★垂<sup>ルリ</sup>綸<sup>リン</sup> リンをたる  
釣糸を垂れて魚をつること。垂綸。〔外語〕

ル の 部

★縷<sup>ルジュツ</sup>述<sup>ルジュツ</sup> ルジュツ

細かくはしくのべ立てること。類語に縷言、縷説、縷陳などがある。

★流<sup>ルテン</sup>轉<sup>ルテン</sup> ルテン

人間社會の人の生死・事物の興亡等が始終うつり變ること。流轉輪廻。華嚴經に「一切衆生界、流<sup>ス</sup>轉<sup>ス</sup>生死海」とある。〔水産・大分商・陸士・高檢〕

★鏤<sup>ルヒヨウ</sup>氷<sup>ルヒヨウ</sup> ルヒヨウ

徒に勞して功なき喻。即ち氷は直に融くるものにして之にちりばむるも功をなさざる義による。

★流<sup>ルフ</sup>布<sup>ルフ</sup> ルフ

廣く世にひろまるること。水の流れ布く如く普く行きわたる義による。流傳。〔愛知醫〕

★累<sup>ルキエウ</sup>葉<sup>ルキエウ</sup> ルキエウ

數代を累ぬること。葉は代なり。

★壘<sup>ルキクワイ</sup>塊<sup>ルキクワイ</sup> ルキクワイ

胸中に不平あること。世説に「胸中壘塊、故須<sup>ニ</sup>酒<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>澆<sup>レ</sup>之」とある。

★誅<sup>ルキシ</sup>詞<sup>ルキシ</sup> ルキシ

死者を悼む辭のこと。即ち死者生前の功德を述べて其の冥福を祈ることば。〔神宮・明專〕

★羸<sup>ルキジヤク</sup>弱<sup>ルキジヤク</sup> ルキジヤク

つかれよわること。又かよわいこと。〔外語・陸士・米工・愛醫〕

★縲<sup>ルキセツ</sup>綫<sup>ルキセツ</sup> ルキセツ

罪囚のこと。縲は黒きナハなり、綫はツナグなり。而して縲は繼に同じく縲繼とも書く。古は獄中にて黒ハナを以て罪人をつなぎし故による。縲繼の苦などいふ。論語に「雖<sup>モ</sup>在<sup>ニ</sup>縲<sup>ニ</sup>綫<sup>之中</sup>、非<sup>ズ</sup>其<sup>罪</sup>也」とある。〔千園〕

★累卵之危<sup>ルキランノアヤフキ</sup> ルキランノアヤフキ

卵を積み重ねたるごとく危きこと。司馬相如の文に「去<sup>リ</sup>累卵之危<sup>ヲ</sup>、就<sup>ニ</sup>永安之計<sup>ニ</sup>」とある。〔外語・米工〕

エ

★累<sup>ルキルキ</sup>累<sup>ルキルキ</sup> ルキルキ

多くかさなつてゐるさま。屢累々などいふ。〔外語〕

★累<sup>ルキルキ</sup>累<sup>ルキルキ</sup> ルキルキ

つかれて病を失ふさま。うなだれるさま。史記に「累<sup>トシテ</sup>累<sup>トシテ</sup>、若<sup>シ</sup>喪家之狗」とある。〔北大〕

★以<sup>ルキ</sup>類<sup>ルキ</sup>聚<sup>ルキ</sup> ルキをモツてアツまる

正邪、悪各々似たものは似たもの同志相集ること。易に「方<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>聚<sup>リ</sup>、物<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>群<sup>分</sup>」とある。方とは事情の向ふところなり。〔大谷〕

レ の 部

★藜<sup>レイカウ</sup>羹<sup>レイカウ</sup> レイカウ

粗食といふこと。あかさの葉の吸物の義による。韓愈の詩に「藜羹如<sup>レ</sup>此、肉食安可<sup>レ</sup>嘗<sup>ム</sup>」とある。〔専檢〕

★厲<sup>レイキ</sup>鬼<sup>レイキ</sup> レイキ

やくびやうがみのこと。惡鬼。〔外語〕

★冷<sup>レイダウ</sup>遇<sup>レイダウ</sup> レイダウ

そまつなあつかひのこと。〔海軍〕

ル・レの部

★令<sup>レイケイ</sup>閨<sup>レイケイ</sup> レイケイ

人の妻を呼ぶ敬稱。善い家室の義による。令室。令夫人。令は善きなり。

★囹<sup>レイゴ</sup>圜<sup>レイゴ</sup> レイゴ

牢獄のこと。夏臺を見よ。〔金醫・専檢・大分商〕

★零<sup>レイサイ</sup>碎<sup>レイサイ</sup> レイサイ

極めてこまかいこと。

★犂<sup>レイジヨ</sup>鋤<sup>レイジヨ</sup> レイジヨ

田畑をすく、すきのこと。〔農大〕

★例<sup>レイシヨウ</sup>證<sup>レイシヨウ</sup> レイシヨウ

前例によりて證明すること。

★令<sup>レイシヨク</sup>色<sup>レイシヨク</sup> レイシヨク

顔色を善くして人の機嫌を取ること。令はよし。

★厲<sup>レイシヨク</sup>色<sup>レイシヨク</sup> レイシヨク

激した顔色をすること。血相をかへる。〔水産〕

★伶<sup>レイジン</sup>人<sup>レイジン</sup> レイジン

樂人のこと。〔水産〕

★厲<sup>レイセイ</sup>聲<sup>レイセイ</sup> レイセイ

こゑを上げますこと。聲をあらげること。〔水産〕

★蠶測 レイソク

極めて見識の狭いこと。蠶は飄なり、又蚌の殻なり。飄やほら貝て大海の水を測る義による。八十五頁の管見蠶測を見よ。

★隸屬 レイソク

支配を受けてそれに属すること。〔早高〕

★零丁 レイテイ

失意のさま。李密の陳情表に「零丁孤苦、至<sub>ニ</sub>於成立<sub>ニ</sub>」とある。

★令聞 レイブン

よい噂、よい評判のこと。〔名工〕

★黎民 レイミン

人民のこと。黎は黒なり、民は首黒き故にいふ。九十  
八頁黔首を見よ。〔慈賢〕

★令名 レイメイ

よいほまれといふこと。令聞。孝經に「身不<sub>レ</sub>離<sub>ニ</sub>於令名<sub>ニ</sub>」とある。〔高校〕

★黎明 レイメイ

夜のあけがたのこと。黎は黒なり。黒と明との交り明

★零落 レイラク

けんとして未だ明けざる義なり。拂曉。味爽。〔五高〕  
おちぶれること。草のしほむを零といひ、木の葉の落つるを落といふ。禮記に「草木零落」とある。

★玲瓏 レイロウ

金玉の鳴る聲のこと。又さえて明らかなるさま。玲瓏  
透徹。李白の句に「玲瓏望<sub>ニ</sub>秋月<sub>ヲ</sub>」とある。〔水農〕

★料簡 レウケン

かんがへのこと。思案。所存。了簡とも書く。

★料峭 レウセウ

春風のヒヤ／＼と肌寒いこと。春寒料峭の候。蘇軾の句に「東風料峭羊角<sub>ヲ</sub>」とある。

★瞭然 レウゼン

あきらかなさま。一目瞭然などいふ。〔海欄・日大〕

★遠東之冢 レウトウノキノコ

自ら奇異なりとして誇るも他人より之を見れば異とすに足らないといふ喩。漢書に「流陽ノ太守彭寵、自<sub>ラ</sub>功ヲ貢ミ滿ルコト能ハズ。幽州ノ牧朱浮、書ヲ與ヘテ曰ク、伯通自<sub>ラ</sub>伐リテ以爲<sub>ニ</sub>ラク、功天下ニ高シト。往

★連歌 レンカ

ひ、瀟は水波なり。〔小南〕  
歌の上下二句を二人にて連れてよむこと。〔専檢・臨教〕

★廉潔 レンケツ

潔白で慾が少いこと。〔東高師・名商〕

★輦轂 レンコク

天子の在ます都のこと。御膝もと。輦下も同じ。又輦轂之下などいふ。〔高校・海欄・廣高師・東協大〕

★歛昏 レンコン

たそがれのこと。歛はをさまる。黄昏。〔水農〕

★連坐 レンザ

共に罪に陥ること。又まきぞへになりて處罰せらるゝこと。

★聯想 レンサウ

或事に引續いて他の事を思ふこと。〔米工・東美・早大專〕

★連枝 レンシ

兄弟のこと。兄弟は木の枝を連ねて本を同じくする義

★連瀋 レンシ

さざなみのこと。風が水上を行きて文を成すを連とい

★遼遼 レウバク

遙に遠いこと。〔慈賢〕

★繚亂 レウラン

散りみだれること。百花繚亂などいふ。

★料理 レウリ

事をはかりをさむること。晋書に「卿在<sub>レ</sub>府日久比當<sub>ニ</sub>相料理<sub>ニ</sub>」とある。又食物を調理すること。

★料量 レウリヤウ

料て量ること。又ますめのこと。〔千賢〕

★遠遠 レウエン

遙に遠いさま。前途遠遠。〔盛農〕

★列聖 レツセイ

前朝代々の賢明な君主といふこと。〔福工〕

★漣漪 レンイ

による。千字文に「同氣連枝」とある。

★廉 恥 レンチ

無慾ではぢを知ること。唐書に「從政者皆知廉恥」とある。「慶大・國大・鹿農・陸士」

★妙 簡廉能ー レンノウをメウカンす

潔白にして才能ある者を精しくえらぶこと。妙簡は精くえらぶ。「東商大」

★憐 憫 レンビン

あはれむこと。又憐愍と書く。「北大」

★運府槐門 レンブクワイモン

大臣の異稱。蓮府は大臣の屋敷で、支那の晋の大臣王儉が家に蓮を植えて愛した故事により、槐門は大臣の坐で、周代朝廷に三株のゑんじゆを植えて、三公即ち大臣の坐とした故事による。「専檢・明専・山商」

★聯 盟 レンメイ

共に約束をきめたもの。又きめること。「米工」

★鍊 冶 レンヤ

れりきたへること。「山商・海欄」

★陋 巷 ロウカウ

せまくてきたないちまたのこと。うらだな。

★弄 瓦之喜 ロウダワノヨココビ

女子出産の喜のこと。瓦は糸巻なり。女子が生れるとイトマキのおもちやを與へ、女子たるものよ本分を知らしめんとするなり。詩經に「乃生女子、載寢之地、載衣之褐、載弄之瓦」とある。

★陋 習打破 ロウシフダハ

悪い習慣を打ち破ること。

★籠 城 ロウジヤウ

一所にたてこもること。城にたてこもる義よりなる。

★弄 璋之喜 ロウシヤウノヨロコビ

男子出産の喜びのこと。璋はタマなり。男子が生れると、玉のおもちやを與へるといふ故事による。詩經に「乃生男子、載寢之牀、載衣之裳、載弄之璋」とある。

★壘 斷 ロウダン

による。千字文に「同氣連枝」とある。

★廉 恥 レンチ

無慾ではぢを知ること。唐書に「從政者皆知廉恥」とある。「慶大・國大・鹿農・陸士」

★妙 簡廉能ー レンノウをメウカンす

潔白にして才能ある者を精しくえらぶこと。妙簡は精くえらぶ。「東商大」

★憐 憫 レンビン

あはれむこと。又憐愍と書く。「北大」

★運府槐門 レンブクワイモン

大臣の異稱。蓮府は大臣の屋敷で、支那の晋の大臣王儉が家に蓮を植えて愛した故事により、槐門は大臣の坐で、周代朝廷に三株のゑんじゆを植えて、三公即ち大臣の坐とした故事による。「専檢・明専・山商」

★聯 盟 レンメイ

共に約束をきめたもの。又きめること。「米工」

★鍊 冶 レンヤ

れりきたへること。「山商・海欄」

利益を獨占すること。壘は岡の高く聳へた處なり。斷はたち切るなり。高い所に登り市中を見まはし、安い物を買ひ占め高く賣つて一人で利益をしめたといふ故事による。私壘斷も同じ。孟子に曰く「有賤丈夫、焉、必求壘斷而登之、以望左右而罔市利」とある。「山商2・水産・鹿農3・名工・神商大・東商大・廣高師」

★籠 鳥懸レ雲 コウテウクモをコフ

身を束縛されてゐる者が自由を得んと欲する喩。籠の中の鳥が雲外の飛揚を望む義による。鷗冠子に「籠中之鳥、空望不出」とあり、又蘇軾の詩に「鳥囚、不忘れ飛、馬繫、常念馳」とある。

★鏤 膚 ロウフ

いれずみのこと。

★釐 畝 ロウホ

はたけのこと。「高校・秋嶺」

★籠 絡 ロウラク

人の心を自己の意の儘に左右すること。

★得レ隴復望レ蜀 ロウをエテマタシヨクをノゾム

利を食つて飽くことを知らないこと。後漢書に「人苦利、不レ知レ足、既平レ隴復望レ蜀」とある。「高校2・廣高師2・小商・神商・北大・商船・外語・名工・神宮・法大・高檢・大藥」

★奉 漏甕一沃ニ燠釜ー

急速にせなければ効なきこと。即ち底の漏る水ガメを以てやけたる釜にそゞく義による。戰國策に「救趙之務、宜レ若ク奉漏甕一沃ニ燠釜」とある。

★魯 魚之謬 ログヨノアヤマリ

文字の誤のこと。魯の字と魚の字とは誤りやすい故にいふ。抱朴子に「諺曰、書三寫、魯爲魚、魚爲虎」とある。

★六 根清淨 ロクコンシヤウジヤウ

六根の妄執を絶つこと。六根とは即ち眼・鼻・耳・舌・身・意をいふ。又心身を清らかに保つこと。「廣高師」

★鹿 鳴之宴 ロクメイノエン

州縣より擧げられて京師に貢せらるゝ者を送る宴會のこと。

★碌 碌 ロクロク

人につき従つて獨立心のないさま。又つれ、なみの意なり。「仙工・水農」

★祿位

律祿と爵位のこと。「海兵・醫專」

★魯酒薄而邯鄲圍

思ひがけない禍を被ること。魯酒は薄くして不良の酒なり。淮南子に「楚諸侯ヲ會ス。魯趙俱ニ酒ヲ獻ズ。酒吏趙ヲ怒ル。乃チ魯ノ薄酒ヲ以テ趙ノ厚酒ニ易ヘテ之ヲ奏ム。楚王趙ノ酒薄キヲ以テ遂ニ邯鄲ヲ圍ム」とある。邯鄲は趙の都なり。又莊子に「魯酒薄而邯鄲圍。聖人生而大盜起」とある。

★露宿

野原にとまること。屋外にとまること。

★露臺

屋根のない臺のこと。又屋上に設けた運動場のこと。

〔愛商〕

★魯之男子

品行方正なる男子のこと。詩經に「魯有男子一獨居。子室一。鄰人整婦趨而託之男子閉戶。而不納曰。」

吾聞之男女不三六十二不三間居」とある。

★路馬

天子の馬車につける馬のこと。「廣高師」

★鹵簿

天子の行列のこと。「高校2・海經・北大」

★鹵莽

あれた土地のこと。又粗略にして雑駁なること。鹵莽滅裂などいふ。莊子に「君爲レ政焉勿ニ鹵莽一。治レ民焉勿ニ滅列一」とある。

★魯陽之戈

勢力の旺盛なる形容。昔、魯陽公、戈を揮ひて、日輪を招き返せしといふ故事に本づく。即ち淮南子に「魯陽公戰酣。方日暮。援レ戈而扞レ之。日爲反三合」とある。

★鷺列

鷺の如く徐行しつゝ列ぶこと。周邦形に曰く「鷺列以就レ次」とある。

★魯論

論語の異名。秦火の後、三種の論語を生ぜり。齊論。

古論・魯論これである。

ワの部

★猥褻

みだりがはしく人の劣情を挑發するやうなこと。猥も褻も共にみだりがはしく、けがらはしいこと。

★淮南

支那の郡名。又豆腐の異名。淮南王安始めて豆腐を作リし故事による。即ち山堂肆考に「淮南王始磨豆腐爲三乳脂一名曰豆腐、自是爲豆腐異稱」とある。

★賄賂

不正の贈物のこと。賄、賂共に人に貨財を送ること。

★枉駕

乗りものをわざと立ち寄らせること。人の來訪を云ふ敬語。御來車。枉車。蜀志に「枉駕顧之」とある。枉顧はまげてたづねること。長者が少者を訪ふこと。又人の來訪を云ふ敬語。蒙ニ枉顧一などいふ。

★横行

大手を振つて氣儘に歩むこと。横に行く義よりなる。

潤歩。「大女專」

★王畿

王城の四方千里（支那里數で）以内の土地のこと。近畿。「米工」

★枉屈

身をかじめてへりくだること。諸葛亮の出師表に「先帝不レ以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中」とある。「陸士・米工」

★王侯將相寧有種乎

別に王侯將相の系統がある譯ではない、誰れでも努力次第でなれるといふこと。史記に「壯士不レ死即已、死即舉ニ大名ニ耳、王侯將相寧有種乎」とある。「水産」

★王佐之才

帝王をたすけるに十分なはたらきのこと。成語考に「孔明有王佐之才、嘗隱草廬之中」とある。「海欄」

★横死

正當でない死のこと。

★王臣蹇々匪躬之故

ワウシンケンケンケンミノユエにアラザ



王の臣が艱難をなめて忠義をつくすのは偏に君の爲めであつて、我が身の利益をはかる爲めではないといふこと。九八頁の蹇蹇匪躬を参照せよ。

★嫩草 ワカグサ

春の若草のこと。

★我心非石 不可轉

ワガココロイシにあらズ。心の確乎として動かすべからざること。詩經に出づ。

★我心如秤

ワガゴ、ロハカリのゴトシ。心に私なく公平無私なること。鶴林玉露に「孔明曰、我心如秤、不能爲人作輕重」、至レル哉言ヤ、信ニ此ヲ能クセバ吾ガ心即チ造化ナリ」とある。「陸士」

★和合

ワガフ。人が能く打ち解けて仲のよいこと。又兩家の男女を合せて婚姻せしむること。周禮に「三十之男、二十之女、和合使成婚姻」とある。

★和氣霏々

ワキアイアイ。平和で晴しいこと。

★和氣致祥乖氣致異

ワキシヤウをイタシクワイ。平和の氣分のある所には自然にめでたい事が来り、逆

らひたがふた氣分のある所には自然に意外な悪いことが起るといふこと。「專檢」

★惑溺

ワクデキ。まどひおぼれること。

★和光同塵

ワクワウドウヂン。才智をかくして人並にしてゐること。即ち和光とは我が智の光を隠して隠はさざるを云ひ、同塵とは世に隨ひ塵俗の中に混じて居ること。老子に「和其光、同其塵」とある。「小商」

★和魂漢才

ワコンカンサイ。心はどこまでも大和魂を持ち、才智は漢學によるを要すといふこと。菅原道眞の云ひはじめし説なり。「東高師・水農」

★禍從口生

ワザハヒはクチヨリシヤウザ。禍は言語によりて来すといふこと。釋氏要覽に「一切衆生、禍從口生、口舌者鬻身之斧也」とあり、傳玄の口銘に「病從口入、禍從口出」とある。

★轉禍移福

ワザハヒをテンじてフクとス。災難を巧に變じて幸福たらしめること。史記に「古之

★和而不同

ワしてドウゼズ。善制レ事者轉レ禍爲レ福、因レ敗爲レ功」とある。

★和衷協同

ワチウケフドウ。内心は同意するも直ぐそれを表面に出して同意せざる

★和陸

ワボク。衷は中なり。即ち心の底より和するなり。「明華」

★破子割籠

ワリゴ。折箱のやうに白木で作つた辨當箱のこと。「女高師・陸士」

★吾畏其卒一故怖其始

ワレソノヲハリをオソルユエにソノハジメをオソル。自分はその終がうまく行かないと困るから、その始をおそれつゝしむのであるといふこと。「專檢」

★和韻

ワケン。他の作りし詩に韻をつゞけ和して作ること。

あ の 部

★あ い な し 可愛いげがない。面白みがない。

〔京大〕

★あ い な だ の み あてにならぬたのみ。

★あ か ら さ ま 明白に。かりそめに。つい一す。

〔神商・東商大・海経・専検・東高師・京大〕

★あ か ら め わき目。

★あ か る わかれる。〔横商〕

★あ く が る うかれる。〔水農〕

★あ げ つ ら ふ 論ずる。あげつらひは議論のこ

と。〔北大・八高〕

★あ さ ま し (1)あまりと言へば餘りだ。(2)淺

はかである。思慮がない。(3)情けない。〔廣高師・神商

大・醫専〕

★あ さ む ひ (1)驚きあきれる。(2)賤しみ輕ん

ずる。馬鹿にする。〔東商大・神商大〕

★あ た 仇。

★あ だ (1)外の、他の。(2)徒な、脆く修

い、つまらぬ。

★あ た ま ご な し 冒頭から無遠慮にいふこと。

★あ た ら し (1)惜しい。(2)新らしい。古文の

場合には惜しいと解することが多い、注意せよ。〔東

高師・大阪商〕

★あ ち さ な し つまらない。情けない。無益だ。

〔明専・高岡商・醫専〕

★あ な う た て あゝいやな。〔専検〕

★あ な が ち に 強ひて、無理に。〔愛醫大〕

★あ な づ る 侮などの。〔山商〕

★あ は れ (1)可愛さうだ、悲しい。深い趣

がある。(2)心に深く感ずるときに發する聲。

★あ ふ さ き る さ (1)ゆきき、往來。(2)一方よけれ

ば一方悪く兩方よく行かない。〔京城大〕

★あ へ し ら ふ 應答する。程よくとり扱ふ。〔愛

醫大〕

★あ へ な し 修ない、頼りない。〔高校〕

★あ や し (1)怪しい。(2)みすばらしい、粗

末な。(3)妙に、變に。〔大分商・國大〕

★あやなし わけがわからぬ。區別がない。無茶だ。〔高校・上鷺〕

★あやにく 意地悪く、折あしく。〔高校・専檢〕

★あらがふ 争ふ。〔高校・長商〕

★あらぬ とんでもない、思ひ掛けぬ。〔外語〕

★あらまじごと 豫定した事。〔専檢・農大〕

★あらます 豫定する。豫測する。〔新鷺〕

★あらまほし 斯くありたい、あつてほしい。〔東高師・京城〕

★ありがたし めつたにない。今日では有難いといふ感謝の意なれど、古文ではめつたにない。有りにくいの意である。〔高校〕

★あるじす 御馳走する。〔北大・東高師〕

★あるじまうけ 饗應。〔六高〕

★あわただしく 俄に。〔山商〕

い の部

★いかで (1)何卒、どうか(願望)。(2)どうして………ことがあらう(反語)。

★いさ 否と打消す意。どうだか知らな

★いざ さアと誘ふ意。

★いざよふ 躊躇する。〔高校〕

★いざり舟 漁をする舟。〔名工〕

★いそしむ 勤める。精出す。〔高校〕

★いたはる (1)功勞、骨折。(2)病氣。〔小商〕

★いたはる 可愛いがる。〔山商〕

★いちの人は 攝政・關白の異稱。〔日商〕

★いとしか いつの間にか。〔廣高師〕

★いとど いや〜、益々、其上に、尙一層。

★いひしろふ 論争する。〔海軍〕

★いぶせし 鬱陶しい。氣が晴れない。〔廣高師・高校・北農〕

★いふも更なり 無論のことだ。いへば更なりも同じ。〔醫專・臨教・廣高師〕

★いまだし まだ早い。まだその時機でない。〔東高師〕

★いみじ 甚だしい。えらい、すぐれてゐる。〔大商・陸士・上智大・大分商・海兵・上鷺・高校2・廣高師〕

★いらへ 返辭、返答。〔陸士〕

あ の部

★あやまふ うやまふ。〔上鷺〕

う の部

★うきよのきづな 世の情け合。〔小商〕

★うけぱりたるさま 引受けて承知したさま。〔京城醫〕

★うしろめたし 氣がかりだ、不安心だ。〔専檢・高校・北大・明專〕

★うたかた 水の泡。又はかない噺。〔廣高師・東高大〕

★うたげ 酒もり、宴會。〔専檢〕

い・あ・う の部

★うなね 假寐。〔早大高〕

★うたて やな、變な。うたてして出ることが多い。〔北大・東商大・神商大・明專〕

★うち 動詞に冠する接頭語。一寸。又意味のない場合もある。

★うつし心 現心。〔専檢〕

★うつせみ 現身。世、命、人等の枕詞。

★うつろふ うつろの延語、移る。色があせる。うつらふ花の色は色のあせる花の色。〔専檢・大分商〕

★うと 疎遠。親しくない。

★うとま いとほしい。

★うなづく 點頭。合點する。首肯する。〔外語〕

★うなわ 子供。〔専檢〕

★うべなふ 承知する。〔専檢〕

★うへのをのこ 上男。昇殿を許されたるもの。〔専檢〕

★うむかしむ よろこぶ。賞愛する。  
 ★うるはし きちんとして立派だ。端正。  
 ★うるはしむ 親しくする。愛する。  
 ★うれたし 歎かましい。〔陸士〕

えの部

★えうなし 無益な。〔神商大〕  
 ★え………ず 「何々し得ず」といふのを上下に  
 わけたのである。よう………しない。えもいはずはい  
 ふに云はれぬ。〔海兵〕

おの部

★おくれをとる 負ける。おとる。〔新醫〕  
 ★おこたり (1) 罪過。(2) 病がなほる。〔八高〕  
 ★おしなべて 一般に。〔京靈・陸士〕  
 ★おそまし 恐ろしい。〔専檢〕  
 ★おぞや 情けない次第だ。見苦しいこと  
 だ。  
 ★おだし 程か。〔愛醫大〕

★おとなふ おとづれる。門口に立つて案内  
 を乞ふ。〔海欄〕  
 ★おどろおどろし 驚くほどである。仰山である。  
 〔日醫・商專〕  
 ★おなじくは 同じ事なら、一層のこと。〔陸  
 士・東北大〕  
 ★おのがじし 各自に、めい々に。〔水農・日  
 齒・神商大・高校・米工・福商・専檢〕  
 ★おひめをはたる 買債を請求する。〔長商〕  
 ★おぼしきこといはぬは腹ふくるなり  
 思ふことを云はれば不満である。〔明專〕  
 ★おぼつかなし なんとも當にならぬ。気がかり  
 だ。不安だ。〔京城醫〕  
 ★おぼけなく 分に過ぎた、身分不相應の。  
 〔専檢〕  
 ★おぼゆ 自然にさう思はれる。〔二高〕  
 ★おもふせ 不面目。〔水産〕  
 ★おろか 愚の意は普通。他に、軽々しい。  
 浅はかな。

★おんいたづきおこたらせ給はず  
 御病氣がおなほりにならない。〔小商〕

をの部

★をかし 面白い。趣がある。〔高檢・仙工〕  
 ★をこ おろか、馬鹿らしいこと。〔長  
 商・福商・東商大〕  
 ★をこがまし 馬鹿らしい。〔高校・東高師〕  
 ★をさく 殆んど大方、大抵は。〔北大・高  
 校2・専檢・東高師〕  
 ★をたけび をしきさけび、又をしきさ  
 けぶ。〔陸士〕  
 ★をぢしなし 愚鈍な。  
 ★をとこもじ 漢字。をんなもじは平假名。  
 〔農大〕  
 ★斧の柄もくたつべし 思はぬ内に長い年月を過し  
 たことだらう。斧の柄もくさつてしまふだらうの文義  
 なり。〔専檢〕

かの部

★かいなで うはべて、うはすべりに。〔陸  
 士〕  
 ★かうざま かやうな。〔小商〕  
 ★かゝづらふ かゝりあふ、關係する。〔長商・  
 廣高師〕  
 ★かぎり 頂上、それ丈。  
 ★かこつちをいふ。〔醫專〕  
 ★かごとと かこつ言葉。うらみをいふ事。  
 ★かしし 上、わい。終止法命令法凡て完  
 結した文句につけて餘情を添える。譯さなくてもよし。  
 ★かしこし 賢。恐れ多い。もつたいない。  
 有難い。  
 ★かた 其向、其方向。時間、空間。事  
 柄にもいふ。頃。方向。方角。點。  
 ★かたくな 頑固で事理のわからないもの。  
 〔陸士・京靈・神宮〕  
 ★かたはらいたし 傍で見ても氣の毒である。

笑止である。又御氣毒千萬だといふこと。〔東商・上野・東高師〕

★かたはらなし 比較するものがなく勝れてゐる。〔大醫〕

★かたみ (1)形見、記念。(2)互に。〔千醫・水産・専檢〕

★かたふ 談合する。他を説きつけて自分の徒黨にする。

★かたつ 一方に又。辛うじて、やつと、わづかに。〔高校・神商大〕

★かづけもの 褒美。〔千醫・専檢〕

★か な なア、わい。か、かも、かなは詠歌の意。が、がも、がなは願望の意にして、たいなアの意なり。

★かなぐり落す 亂暴に引き落す。〔北大〕

★か な 奏する。〔山商〕

★かにかく とにかく。あれこれ。〔陸士〕

★かねごとと 豫れて約束してあつたこと。

くの部

★く さ く 種々。いろく、さまざま。〔岡醫〕

★くちさがなし 口ぎたなくいふ。〔高校・龍大〕

★くちたしく 言葉多くしゃべること。〔東高師〕

★くちをし くやしい。残念である。無念である。〔高資・専檢・桐染・高校・慶高師・臨教・旅工〕

★くろがねしとびら 鐵の鼻。極めて堅固なる喩。〔長〕

けの部

★けざやか あざやか。〔醫專〕

★けしき 様子。ありさま。工合。模様。〔盛農・京醫〕

★けじめ 區別。〔高校・水産〕

★けたまし あはたましい。騒がしい。〔水産〕

★か [高商]

★かへさひ は てあらうか、さうではない。くりかへし。返しの延音なり。

★からざま 唐様。支那の風。〔陸士・名商〕

★が 許に。〔東高師〕

★我を折る 主義・主張を曲げる。〔東高師〕

★き

★きこ 詞にして、けりの様に詠歌の意味はない。き、し、しかと活用する。

★きこ ゆ (1)といふ噂だ。(2)敬語。(3)道理は明かだ。申し上げる。〔一高〕

★きほ は 際。分際。分限。身分。いきほひ。〔長商〕

★きらく し 煌々しい。まばゆい。嚴に美し。〔高校〕

きの部

★けちえん 目立つて。

★けにに それよりも尙一層まさつて。成程、實際に。

★けは ひに そぶり。様子。又化粧。〔海兵・女大・山商・北大〕

★けむ したであらう。過去を推量していふ助動詞。

★けやし あざやかな。〔北大〕

★けり 動であるが、きは純粹の過去の助動詞であり、けりは詠歌の意味が多量に含まれてゐる。

この部

★ことくし 仰山だ。〔高校〕

★こともと 手近なところ。〔名商〕

★ことらの年月 多くの年月。〔高校・愛醫・陸士〕

★心あはる 考がある。情合がある。心なしは反対なり。

★心ちとり 劣つて見える。只劣りがする。

〔高校・東高師〕

★こゝろぎたなし 心が潔白でない。〔新醫・東高師〕

★心ぐるし 氣の毒である。

★心しらひ 心がまへ。心づかひ。〔東高師〕

★心つかひ 心づかひ。心配。〔専檢〕

★心づきなし 氣にくはぬ。面白くない。〔上野〕

★心なき人 情合のなき人。無理解な人。

★心にくし 奥ゆかしい。〔高校2・廣高師・山商・海兵・九藥・水産〕

★心もとなし 待遠しい。氣がいらくする。不安である。〔高校・陸士〕

★心やり 慰め。〔醫專〕

★心ゆく家 楽しい家。

★心ゆくばかり 満足するほど。〔高校2・専檢・明專〕

★心ゆくわたり 楽しいあたり。〔水農〕

★ござんなれ であるよ。こそあるなかれの約

である。〔外語〕

★こそあれ こそよい。

★こちたし 煩しい。複雑な。甚だしい。〔陸士2・高校2・米工・京城醫〕

★ことくし 大層らしい。仰山である。〔高校〕

★ことそぐ 節約する。〔東北大・東商大〕

★ことほぐ 祝ふ。〔海軍・陸士〕

★ことわりなし 道理に合はない。理由がない。〔高校・専檢・愛醫大・濱工・同志〕

★心ばへ (1)心もち、氣もち。(2)意味。(3)風情。〔高校・東高師・愛醫〕

★こよなし この上もない。格別である。〔高校・上野・専檢〕

さの部

★さうくし 淋しい。今日では騒がしい意なれど、古文では淋しい意である、注意せよ。〔専檢・日商〕

★さうくし 淋しい。今日では騒がしい意なれど、古文では淋しい意である、注意せよ。〔専檢・日商〕

★さうなく とかくの論なく。たやすく。

★さがが 習はし。〔彦商〕

★さか し 賢か。才智が勝れてゐる。〔大谷〕

★さかしらす 賢がること。物知りぶること。〔北大〕

★さげすむ 見下げる。輕蔑する。〔北大・日大〕

★ささえを傾く 酒をのむこと。〔女高師〕

★さし も それほどの。さうも。〔醫專〕

★さすがに さうは言ふものゝ矢張り。如何にも名高程あつて。〔高校・醫專・高資〕

★さすらふ あてなくさまようこと。〔高校〕

★させらる 格別、これといふ程の。〔海軍〕

★さながら (1)そのまま、残らずすべて。(2)恰かも。ちやうど。〔高校・廣高師・北大〕

★さのみ さうばかり。さう一概に。〔千代田〕

★さやに さやかに。はつきりと。〔専檢〕

★さし の 部

★さし の 部

★さし の 部

★さゆ 寒く身に沁みる程である。

★さうでも さうでなくても。たゞさへも。〔高校〕

★さうなり 勿論だ。いふ迄もない。

★さうらに もつと、新らしく。又少しも。〔横商〕

★さうでだも ただてさへ。

★さうぬ さうでない。其他の。さうはしない。然あらぬの約なり。又のがれることの出来ぬ。

★さうりげなし 何んともない。〔海軍〕

★さうかたに それはそれてまた。それ相應に。〔長商〕

★さうは それは。それ故に。又さうではあるが。

★さうるべし さうある筈だ。さうあるが至當だ。然あるべしの約なり。〔外語〕

しの部

★しのか かつた。即ち過去の助動詞。

★し きる 繁くなる。度重なる。後から後からと続くこと。〔山商〕

★したりがほ 得意な顔つき。誇り顔。〔大醫〕

★しづ心なく 落付いた静かな心なく。〔北大〕

★しづやまがつ 百姓や木こり。〔神宮〕

★しつらふ ころらへる。飾りつける。〔北大〕

★しのぶ (1)我慢をする。(2)追憶する。〔一高〕

★しはぶき せきばらひ。〔廣高師〕

★しほらしいことをほやいたり 小しやくなことを云ふた。〔水農〕

★し も 實に。即ちしといふ強勢の助辭に、もといふ詠歎詞が添つたもので別段譯す必要はない。

★しるし 顯著である。明かである。

★しろしめす (1)知りたまふ。(2)治めたまふ。〔神商大・大醫〕

すの部

★す 否定のす。……であらう。……しようの意の場合がある。

★す さび (1)愈々すゝむこと。(2)興ずる、耽る、おぼれる。〔千醫・秋鏡・事檢〕

★す さまじ 興がない。面白くない。又物すご。甚だしい。

★す ずろ そぞろ。何んといふわけなく。〔米工・高校・慶大〕

★す だく 群る。〔小商・海兵・京城醫〕

★す なはち とりもたほさず。すぐさま。

★せ の部 兄。〔日醫〕

★せ うと

★そ の部 若干。幾らか。〔米工・東商大〕

★そ くばく どこともなく。あてどもなく。

★そこはかとなく

〔神商大・山商〕

★そ こら たくさん。

★そ ろごど とりとめのないこと。〔水農〕

★そ のかみ 其當時。

★そ びら せなか。〔高校〕

たの部

★た ぐふ 並びそふ。連れ伴はしめる。

★た じろぐ 遮易する。よろく退く。〔東商大〕

★た だずまひ たゞむこと。立つた様子。有様。〔海兵・神商大〕

★た つき たより。〔事檢〕

★た どくし 覺束かない。確でない。

★た どる 尋ね探してすゝんで行くこと。又方向に迷ふこと。

★た だ に ても。さへ。〔山商〕

★た ばしる 勢はげしく走り飛ぶこと。たは

接頭語なり。〔東商大〕

そ・た・つの部

★た めらふ 躊躇する。ぐずぐずする。〔水農〕

★た り である。である。でありの約で完結の状態が今現に續いてゐる場合に用ひる。

★た つつ 現在完了の意味をあらはす助動詞。ぬと殆んど同意義なり。

★た きくし 似つかはしい。ふきはしい。〔日醫・北大・東商大・高校〕

★た づもり 月の末日。つもごり。又おぼつごもりは一年の最終即ち大晦のこと。〔海兵・長商・東商大〕

★た つ しつつ。動作の續いてゐること。つといふ現在完了の助動詞の重なつた語である。

★た づらをり 非常に折れ曲つた坂路のこと。〔臨教・大商・海軍・海經・鹿農〕

★た とめて その翌朝に早く。明朝。〔北大・長商・海兵〕

つの部

つ・て・と・なの部

★つれなく なすこともなく退屈なさま。  
★つれなし 情がない。そしらぬ顔をしてゐる。  
〔陸士〕

ての部

★ていたらく すがた。體裁。又なりゆき。  
〔神商・陸經〕  
★てけり 過去に於て或る動作が完了したことを表はす過去完了である。  
★てん 未來完了の助動詞。例へば安置してんやは安置せられようやといふこと。

とこの部

★とかうのいらへもせず 何んとも返答せず。〔早高〕  
★とかか あゝかう。どうかう。  
★とさめく 榮える。〔高校・廣高師・北大〕  
★ところえがほ 得意さうに。〔臨教〕

★所せき 窮屈なこと。〔専檢〕  
★ところせし 場所がせまい。窮屈である。  
〔東商大・明大・真檢〕  
★とぞ といふ話である。といふ事だ。  
〔米工〕

★とち 友達。

★とづくに 外國。古は畿内以外の諸國のことを云ふた。〔東高師〕

★とて このととの間には必ず何等かの言葉が省略されてゐるのであるから、前後の關係をそれを「とイヒて」とか「として」とか補ふて譯せばよい。

★とばかり 僅かばかり。ほんの少し。

★とはでもしるきことわりなり 問はなくても明白な道理である。

なこの部

★なかくに (1)却つて。(2)願ふ。相應に。容易には。〔高校3・専檢・京大・北大・東商大・博専・東高〕

師・神商大・山商・早大專

★ながむ 物思に沈みながらぼんやり見守る。又歌を詠む。〔東商大〕  
★なごり 心のこり。〔千醫〕  
★なさけ 思ひやり。情趣。風流。〔學習〕  
★な……そ するな。中に連用形をはさむ。春なわすれそは春を春を忘れてはならぬぞの意。〔高檢・桐工・東高師〕  
★なづむ 拘泥する。かゝはる。〔真檢〕  
★なべて 一般に。すべて。悉く。  
★なまじひに 強ひて。〔北大・海軍〕  
★なほ (1)一層。(2)やはり。それでも。(3)その上に。いよく。  
★なまめかし 色つばい。若々しい趣がある。上品。優美。  
★なみをかづく 波をくぐる。こと。〔陸士〕  
★なむ (1)未來完了の助動詞。(2)願ひ望む意の助動詞。(3)物事を指し定むる意。ぞに似てぞより弱い。例一斯くなむありける。

な・に・ぬの部

★なめげ 失禮な様子。無禮な様子。なめしは無禮なり。〔日醫・高校〕

★なりはひをいそしむ 生業をつとめること。〔専檢・早大專・米工・廣高師〕

にこの部

★にきさ もうとつくの昔にさうなつて了つたといふ過去完了なり。従つて過去より意味が強い。

★にけり、にたりも同じ。〔海經・新醫・水産〕

★にや てあらうか。又……であつたらうか。〔高校〕

★にほふ つややか。光りかがやく。又香ひ。〔専檢・大商・和商〕

ぬこの部

★ぬなつてしまった。 現在完了の助動詞。自然にさうなつてしまった。

★ぬかづく 頭を下げて禮拜する。叩頭。



★ぬ ば 玉 黒、夜、夢等の枕詞。

はの部

★は かなさすさび なくさみごと。〔早高〕

★は かなし たよりにならぬ。つまらぬ。と

りともめない。〔小商〕

★ば か り それだけ。ほど。くらひ。頃。

〔東高師2〕

★は ぐくむ ぞだてる。〔高校・北大2・海軍・

海経・山商大・京大・神商大〕

★は したなし (1)どつちつかず。中途半端であ

る。(2)とりつく端がない。きまりが悪い。(3)情ない。

意地悪い。〔海兵〕

★は が たみ つ 窮極まで行く。死ぬ。

★花 が たみ つ 花かど。〔専検〕

★は なむ け 旅立する人に贈る物品又は詩歌

の類。〔長商〕

★ば や 何々したいなア。

ひの部

★ひ が ごと 道理に合はぬ間違つたこと。

〔廣高師・福商・東高師・桐工・上置・大醫大・愛醫・仙醫・

演工〕

★ひ が み し 聞きそこなひ。〔廣高師〕

★ひ き での 舞臺の節主人より客への贈物。

〔高校・金醫・龍大・大分商〕

★ひ じ り (1)賢天子。(2)聖人。(3)酒。(4)高

徳の僧。〔臨教〕

★ひ た かぶ と 一同揃つて甲冑を着かためてゐ

ること。〔海軍・海兵〕

★ひ た ぶ る に 只管に。一途に。もつばら。全

く。〔神商・陸士〕

★人 やり ならず 人からさうさせられたのではな

く自分の心からの。

★ひ ね も す 終日。一日中。〔醫専・明専・滿

教〕

★ひ じ の しる 賑々しい。〔水農〕

★ひ れ ぶ す 平伏する。〔専検〕

ふの部

★ふ ざ は し にあふ。釣合つてゐる。相應し

てゐる。〔高校・京大〕

★ふ し ぞ め くらもじの木を染料として染め

たもの。〔廣高師〕

★ふ す ま 夜具。又襖障子のこと。〔上智

大〕

★ふ つ し か 無調法。〔長商〕

★ふ り さ け み る 振り向いて遠く見る。〔農大〕

への部

★へ し 断定的推量の助動詞。(1)それに

相違ない。さうあるが至當だ。(2)可能即ちできる意。

(3)命令即ちなさい、さうした方がよい。(4)自己の決意

即ち斯うする決心だ。きつとして見せる。〔専検・名

工・京大・東高師・水産〕

ほの部

★ほ い 本意の音。本来の考、素志精神。

ほいなしは素志精神に反して、つまらぬ。〔熊工・上

置・北大〕

★ほ ぎ ごと 祝ひごと。祝ひて述べる詞。

〔専検〕

★ほ だ し 東縛。〔成蹊〕

★ほ と く 殆んど。〔専検〕

★ほ の み ゆ ほのかに見える。〔海軍〕

まの部

★ま う づ 参る。〔山商〕

★ま か る 貴所から賤所へ行くこと。賤所

より貴所へ行くことを「まゐる」といふ。参詣するの

を「まゐる」といふのも畢竟同義で、まうづも同じで

ある。〔東高師・陸経〕

★ま く むの延音で、……むことの意。

〔東商大〕

★ま げ て 強いて。無理に。〔北大〕  
 ★ま (1) 未来推量の助動詞。……であ  
 たらう(多く事實に反した想像)。〔2〕軽い希望。……  
 したい。〔農教・高岡商・海経〕  
 ★ま じ 推量して打消けしの助動詞。ま  
 い。〔陸士〕  
 ★ま だ き に はやくから。〔専検〕  
 ★ま だ し 未だ早すぎる。まだその時節  
 でない。  
 ★ま た なく 他になく。他に類なく。何よ  
 りも一番。〔海兵・新醫・高校〕  
 ★ま ち つ く まち受ける。待つてその人又は  
 その時に合ふこと。〔高校〕  
 ★ま ち わ たる 長い間待つこと。〔高校〕  
 ★ま ど か やすらかなこと。圓滿。〔商船・  
 廣高師〕  
 ★ま ど ろ ろ ひ うとくと眠る。〔山商〕  
 ★ま ど ろ ろ る 一座に集つて固く居ならぶこ  
 と。又集合。

★ま な ご いとしご。〔北大〕  
 ★ま ほ し ……したい。〔山商〕  
 ★ま ……ので、の故に。「まゝに、まにま  
 に」はその通りに。それにつれて。それ次第にといふ  
 意なり。〔外語・東高師〕  
 ★ま め や か 忠實に。〔高校〕  
 ★ま め 男 小男。〔高校〕  
 ★ま ら う ど 客人。御客。〔廣高師・愛醫・醫  
 専〕  
 ★ま れ び と 客人。賓客。〔醫専〕

み の 部  
 ★み ……したり、……したり。〔3〕の故に。〔山商・  
 東商大〕  
 ★み そ ぎ 身をきよめること。〔北大〕  
 ★み て ぐ ら (1) 總て神に奉るもの。〔2〕御幣。  
 ★み ま かる 死ぬ。〔醫専・陸士〕  
 ★み も すそ川の流 皇祖の御系統。〔専検〕

★み や び 風流。風雅。優美。〔陸士〕

む の 部

★む く つ け し (1) 恐ろしい、こはい。〔2〕氣味悪  
 い、きたなげな。〔専検・北大2・京霖・九樂〕  
 ★む げ に むやみに。一概に。一向に。〔東  
 商大・北大〕  
 ★む づ か し 鬱陶しい。うるさい。面倒だ。  
 〔日商〕  
 ★む ね と 主として。要旨として。〔山商〕

め の 部  
 ★め て 右手。〔東商大〕  
 ★め で た し (1) 愛し賞すべきだ。結構だ。祝  
 賀すべきだ。〔2〕美しい、上品な。〔大分商・高校・長商〕  
 ★め の と 乳母。〔専検・山商・高校・長商〕  
 ★め り ……のやうである。……の  
 やうに見える。〔廣高師・大農教・國大〕

も の 部

★も て 以ての略。さうして。  
 ★も ど く 反對する。〔廣高師〕  
 ★も の か ら ものながらの略。その物ではあ  
 るが。ものゝ。であるが故に。〔東商大・北大・山商・  
 専検・東高師・醫専・奈女師〕  
 ★も の す 或動作をなすこと。前後の關係  
 によつて譯すべし。〔二高〕  
 ★物 の あ は れ 物事の情趣、又は面白み。〔神  
 商大〕  
 ★も は ら 専ら。〔専検〕  
 ★も よ ほ す 自然にそゝる。何かを起さうと  
 する。〔廣高師〕

や の 部

★や が て そのまゝ。すぐに。間もなく。  
 ★や は ……であらうか決してさうで  
 はない。……しようや決してしはしない。〔高松商〕

水産・米工

★やんごとなし (1)すて置かれない。普通でない。  
(2)極めて尊い。〔廣高師・高校・水産・海軍・北大〕

ゆの部

★ゆか し 追求的興味が起つて押へ難い状態。(1)何んとなく慕はしい。知りたい。(2)奥ゆかしい。  
〔陸士・秋嶺〕

★ゆかりのもの 縁者。〔醫専〕

★ゆくすゑ 未来のなりゆき。〔高校〕

★ゆくへ て 行くさき。前途。〔高校・北大〕

★ゆくへ 行つた方向。〔高校・醫専〕

★ゆくりなく 思ひ掛けなく。不意に。〔専検〕

★ゆたけ し ゆつたりしてゐる。〔水産〕

★ゆゝ し 忌々しいの約なり。(1)忌み憚るべき。(2)甚だしい。重大な。〔千醫〕

よの部

★よき人 善人。高貴な、上品な人。〔金

〔醫〕

★よし (1)善し。悪の反対なり。よろしは多少限定的でまあ／＼善しの意。(2)由緒。わけ。(3)よるべ。縁。〔米工・高校〕

★よしあるさま 由緒あるさま。〔大阪工〕

★よしなし わけなし。〔北大〕

★よしなしごと 何んといふ理由もない根なし言。たはいいないこと。冗談。〔水産2・神商・北大2・専検〕

★よす が ゆかり。よるべ。たより。〔大分商・海兵・横商・六高〕

★よに 世の中に。どうしても。誠に。〔陸士〕

★よもすがら 終夜。よどほし。〔千醫〕

★よる し すぐに。

★よるろ し まあ／＼よい。かなりだ。悪くはない。

★よるろぶ 萬事。凡て。なにもかも。

★よるろぶふ よろ／＼して歩く。〔高校〕

別がない。無茶苦茶である。(2)是非がない。〔高校・陸士〕

らの部

★らうたし 可愛らしい。

★らむ てあらう。動作を推し量りいふ意の助動詞なり。行くらむ。見るらむ。

わの部

★わくらばに たま／＼。まれに。

★わざ する事。しわざ。仕事。又早に事。〔高校・小商・上蠶〕

★わすれがたみ 記念。〔早高・名醫〕

★わたつみ 海の神。海。〔長商〕

★わたらひ 世わたり。渡世。〔上蠶〕

★わたり あたりの音轉なり。ほとり。

★わび し (1)わぶべき状態である。なやまし

い。つらい。(2)しよざいなく静かな。〔高校・海軍・専

検〕

★わぶ 謝罪する。

★わりなし (1)理なし。わきまへがない。分

ら・わの部

學校略名並に所在地(順序不同)

一、關東地方 (東京府、神奈川縣、埼玉縣、千葉縣、茨城縣、群馬縣、栃木縣)

陸士 陸軍士官學校  
 陸經 陸軍經理學校  
 海經 海軍經理學校  
 東高師 東京高等師範學校  
 一高 第一高等學校  
 東高 東京高等學校  
 東府高 東京府立高等學校  
 武高 武藏野高等學校  
 成蹊高 成蹊高等學校  
 成城高 成城高等學校  
 慶大 慶應義塾大學豫科、專門部  
 早大 早稻田大學高等學院、專門部  
 明大 明治大學豫科、專門部  
 (豫科(澁谷區代田町))

法大 法政大學豫科、專門部  
 日大 日本大學同  
 中大 中央大學同  
 專大 專修大學同  
 立大 立教大學同  
 上智大 上智大學同  
 國大 國學院大學同  
 拓大 拓殖大學同  
 農大 東京農業大學同  
 立正大 立正大學同  
 駒大 駒澤大學同  
 大正大 大正大學同  
 東洋大 東洋大學同  
 大東 大東文化學院  
 青學 青山學院高等學部豫科  
 澁谷區富士見町  
 神田區三崎町  
 神田區駿河臺  
 神田區今川小路  
 豊島區西巢鴨町  
 麴町區紀尾井町  
 澁谷區若木町  
 小石川區荳荷谷  
 澁谷區常盤松町  
 品川區東大崎  
 世田ヶ谷區駒澤町  
 豊島區西巢鴨町  
 小石川區原町  
 麴町區富士見町  
 豊島區目白町  
 澁谷區綠岡町

外語 東京外國語學校  
 東農教 東京帝國大學農學部  
 東農大 東京帝國大學農學部  
 東工大 東京工業大學豫備部  
 水産 東京水産講習所  
 東美 東京美術學校  
 東音 東京音樂學校  
 商船 東京高等商船學校  
 東工藝 東京高等工藝學校  
 東蠶 東京高等蠶絲學校  
 東農 東京高等農林學校  
 慶醫大 慶應醫科大學豫科  
 熱醫大 東京慈惠會醫科大學同  
 日醫大 日本醫科大學同  
 東醫 東京醫學專門學校  
 昭醫 昭和醫學專門學校  
 東齒 東京齒科醫學專門學校  
 日齒 日本齒科醫學專門學校

東高齒 東京高等齒科醫學校  
 東藥 東京藥學專門學校  
 明藥 明治藥學專門學校  
 明大女 明治大學女子部  
 女高師 東京女子高等師範學校  
 女大 日本女子大學  
 女大 東京女子大學  
 帝女專 帝國女子專門學校  
 東女醫 東京女子醫學專門學校  
 東女藥 東京女子藥學專門學校  
 共女藥 共立女子藥學專門學校  
 帝女藥 帝國女子醫學專門學校  
 共女職 共立女子職業專門學校  
 橫商 橫濱高等商業學校  
 橫工 橫濱高等工業學校  
 浦高 浦和高等學校  
 千醫大 千葉醫科大學豫科  
 千醫附 附屬藥學專門部  
 千園 千葉高等園藝學校  
 本郷區湯島  
 澁谷區梅木町  
 世田ヶ谷區駒澤野澤  
 神田區猿樂町  
 小石川區大塚町  
 小石川區高田豐川町  
 杉並區井荻町  
 小石川區大塚町  
 牛込區市ヶ谷河田町  
 澁谷區幡ヶ谷笹塚町  
 芝區芝公園第六號  
 下谷區上野櫻木町  
 大森區大森町  
 神田區一ツ橋  
 橫濱市中區南太田町  
 同 中區大岡町  
 浦和市砂原  
 千葉縣千葉郡都村  
 千葉縣松戸町



醫學大 關西學院大學豫科  
甲南高 甲南高等學校  
姫商 姫路高等學校  
神工 神戸高等工業學校  
神船 神戸高等商船學校  
縣神商 縣立神戸高等商業學校  
神女藥 女子藥學專門學校

兵庫縣武庫郡 兵庫縣飾磨郡安室村  
兵庫縣飾磨郡水笠通  
兵庫縣武庫郡本庄村  
神戸市明石區垂水町  
神戸市上畑澤町

五、中國地方 (岡山縣、廣島縣、山口縣、鳥取縣、島根縣)

岡醫大 岡山醫科大學  
六高 第六高等學校  
海兵 海軍兵學校  
廣高師 廣島高等師範學校  
廣高 廣島高等學校  
廣工 廣島高等工業學校  
山商 山口高等商業學校  
山口高 山口高等學校  
鳥農 鳥取高等農業學校  
松江高 松江高等學校

岡山市岡  
岡山市國富  
廣島縣江田島村  
廣島市東千田町  
廣島市皆實町  
廣島市千田町  
山口市  
山口市大字上字野令  
鳥取市  
島根縣八東郡川津村

六、四國地方 (德島縣、香川縣、愛媛縣、高知縣)

德工 德島高等工業學校  
高商 高松高等商業學校  
松山高 松山高等學校  
高知高 高知高等學校  
德島市常三島町  
高松市宮脇町  
松山市持田町  
高知市江ノ口

七、九州地方 (福岡縣、佐賀縣、長崎縣、熊本縣、大分縣、宮崎縣、鹿兒島縣、沖繩縣)

福岡高 福岡高等學校  
明專 明治專門學校  
九醫 九州醫學專門學校  
九齒 九州齒科醫學專門學校  
佐高 佐賀高等學校  
長醫大 長崎醫科大學  
長商 長崎高等商業學校  
熊醫大 熊本醫科大學  
五高 第五高等學校  
熊藥 熊本藥學專門學校  
熊工 熊本高等工業學校  
福岡市大坪町一丁目  
戶畑市中原  
久留米市小森野  
福岡市今泉  
佐賀縣佐賀郡本庄村  
長崎市  
長崎市片淵町  
熊本市本庄町  
熊本市黒髮町  
熊本市大江町  
熊本市黒髮町

大分商 大分高等商業學校  
宮農 宮崎高等農林學校  
鹿農 鹿兒島高等農林學校  
七高 第七高等學校造士館

大分市上野  
宮崎市船塚町  
鹿兒島市上荒田町  
鹿兒島市山下町

八、臺灣地方

臺農 臺北帝國大學  
附屬農林專門部  
臺醫 臺北醫學專門學校  
臺商 臺北高等商業學校  
臺工 臺南高等工業學校  
臺北高 臺北高等學校

臺北市宮田町  
臺北市東門町  
臺北市幸町  
臺南市旭町  
臺北市古亭町

九、北海道樺太地方

北大 北海道帝國大學農學部實科  
附屬土木專門部水產專門部  
小商 小樽高等商業學校  
函水產 函館高等水產學校

札幌市  
小樽市綠町  
北海道龜田郡龜田村

十、朝鮮滿洲地方

京城大 (朝大) 京城帝國大學豫科

京城府東崇洞

京城法 京城法學專門學校  
京城醫 京城醫學專門學校  
聯醫 セブランス聯合醫學專門學校  
京城藥 京城藥學專門學校  
京城齒 京城齒科醫學專門學校  
京城工 京城高等工業學校  
水農 水原高等農林學校  
京城商 京城高等商業學校  
滿醫大 滿洲齒科大學豫科  
旅工大 旅順工科大學豫科  
滿工 南滿洲工業專門學校  
京城府光化門通  
京城府蓮蓬洞  
京城南大門通り  
京城府黃金町  
京城南大門通り  
京城府東崇洞  
京城道水原郡日荆面  
京城府崇二洞  
奉天市富士町  
旅順市札幌町  
大連市伏見町

學校略名並に所在地 終

原書

著作權所有

昭和十三年十月一日  
昭和十三年十月五日  
發行 印刷

「故事と熟語」

定價金一圓八十錢

編者 帝國漢學普及學會

發行者 金子專一郎

東京市小石川區宮町四三

印刷者 木村茂市郎

東京市下谷區町一

印刷所 神宮館印刷所

東京市下谷區西町一

發行所 東京市小石川區宮下町四三番地

京文社書店

振替東京三四〇八六番  
電話大塚六五四五番

健和 爾田 著	大慶 堂井 著	靖和 著田	渡海 旭邊 著	新石 禪井 著	渡海 旭邊 著	釋宗 演著
般若心經講義	信念書葉隱讀本	一休珍話集	歎異鈔講話	般若心經講話	觀音經講話	茶根譚講話
特價・八〇 二二〇頁函入	特價・五〇 二五六頁	特價一・四〇 五四〇頁函入	特價一・四〇 五四六頁函入	特價一・四〇 五二〇頁函入	特價一・四〇 五六〇頁函入	特價一・四〇 四三〇頁函入
法門第一の聖典を、死生觀を中心に逸話金言を綴ひ交せて興味深く解説し悟道への最捷徑を語る。	武士道精神の神髓佐賀の葉隠は日本人の強さと魂を素で見た聖訓逸事に満つ戦時下國民の心の糧	洒脫飄逸八十八年の生涯を笑の哲學を以て體現した一休禪師の悟話、逸話、遺狂詩歌の集大成!	親鸞聖人の内觀を表白せる淨土眞宗の聖教の大家化、他力道を宣説して滋味全巻に溢れる名講話!	八萬四千の法門を一經に統轄せる經典中の經典を禪門の巨擘が平易明快に説述せる聖典講話の歴巻	大聖釋尊が出世の本懐を説いた萬人親炙の大法門を法燈界の碩徳が滋味豊かに説く理想的洗心讀本	近代の名僧宗演禪師が東洋の聖典を縦横に解説せる、精神大學綜合講座。好評百版を越ゆる名著!

和木 三郎 著	島木 耕介 著	室生 犀星 著	大井 光夫 編	和田 黎三 編	和田 黎三 編
唐詩選講義	短歌表現新辭典	新しい詩とその作り方	啄木鑑賞讀本	ゲーテ詩集	ジイド讀本
特價一・六〇 六〇〇頁函入	特價一・五〇 三二〇頁函入	特價一・四〇 三七〇頁函入	特價一・二〇 三五〇頁函入	特價一・二〇 三六〇頁函入	特價一・六〇 五四〇頁函入
本文調讀通釋並に作家の小傳を掲げ、一般受讀の参考書としても、漢詩愛好家にも無二の好伴侶!	五十音順に短歌表現語、枕詞を網羅し一々名家の作品を引用して短歌作者・研究家の座右寶となす	新しい角度から近代詩の本質を語り、その味ひ方作り方を平易に説いた、巨匠會心の詩の入門書!	情熱の詩人啄木の短歌・小説・感想中より珠玉の名篇を抜萃して解説評論を試みた生活と藝術の書	哀婉典雅を極める詩聖の絶唱を流麗の筆に譯出し巻頭には懇切なるゲーテ研究を載す代表的名著!	現佛文壇の巨匠大ジイドの小説・戯曲・評論・感想より名什佳篇を抜萃解説した清新なる文學讀本



演釋 著宗	石新 禪著 井非	演釋 著宗	潤綠 著川	潤綠 著川	潤綠 著川	潤綠 著川
叩 け よ 開 か れ ん	修 養 洗 心 錄	禪 的 處 世 道	秘 訣 出 力 メ ラ 讀 本	月 露 別 出 新 興 寫 真 術	本 實 位 技 寫 真 入 門 二 十 講	詳 解 出 寫 真 術 十 二 ヶ 月
特 價 ・ 八 〇 三 五 〇 頁 函 入	特 價 ・ 八 〇 三 三 〇 頁 函 入	特 價 ・ 八 〇 三 二 〇 頁 函 入	特 價 ・ 八 〇 二 七 〇 頁 函 入	特 價 一 ・ 五 〇 四 五 〇 頁 函 入	特 價 一 ・ 五 〇 四 五 〇 頁 函 入	特 價 一 ・ 五 〇 四 五 〇 頁 函 入
禪師の名講演、言行逸話、巡錫記の粹を日 常生活に處する心構へ氣構へを教へた珠玉の名篇	宇宙の真相、人生の歸趨、悟道の妙機を盡し た修養書中の白眉。全頁俗腸淨化の活指針に満つ	禪師が三昧的善美の心境から流露した悟道の大 法話を集め、腹でゆく處世法の奥諦を示せる名著！	初心者本位に撮影焼付引伸の要領を寫真圖版入 りで易しく説いたカメラ入門書、好評！ 忽ち十版	春夏秋冬の撮影操作を被寫體、撮影用具等を一 々擧げて解説す。露出表廿四表、挿入寫真百數十葉	カメラの選び方から撮影、焼付、引伸の要領まで 詳細に説明す。露出表廿四表、挿入寫真百數十葉	寫真術の全工程を各種露出表、寫真圖版數十葉入 りて説明し、實地について指導した評判の名著！

386  
589

終

刊・社 文 京